
シアワセノトキ

中堂 珪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シアワセノトキ

【Nコード】

N1909Q

【作者名】

中堂 珪

【あらすじ】

NYの投資銀行を退職し、日本へ戻ってきた遠野誠人。マルチデザイナーの速水千歳。偶然ふたりは出会い、恋に落ちる。ふたりの想いとは別に、人生という名の時計の針が時を刻む。人は生きるために何が必要なのか？愛、名誉、使命、それとも金？あるいは、それら全てを手に入れることができることなのか。

ビターテイストな大人の恋愛小説です。

「大人になっても恋愛はいつも上手くいかないもの」

#01

2010年2月

風が鋭い刃物のような冷たさで街中を駆け抜けていく。乾いた空気がやけに埃っぽく、思わず唇を硬く閉じた。

土曜日の午後。遠野誠人は旧知の友人のオフィスへ向かう。横浜駅からほど近くにある新築ビルのワンフロアーに「株式会社I・C」はある。

オフィスには受付兼総務兼秘書の女性スタッフがひとりおり、誠人が扉を開けると愛想よく奥の部屋に通してくれた。

「鈴木さん、ご無沙汰してます」

「よお」

株式会社I・Cの社長、鈴木啓太郎は手に持っていた雑誌をテーブルに置くと、ソファから立ち上がった。学生時代アメフトで鳴らした体は、今や運動不足がたたりジャケットの上からでもメタボが分かる。

「元気そうだな」

「おかげさまで。いつまでも海底にいるわけにもいきなから」

誠人は、そう言って鈴木が差し出した右手を握った。

「どうだ日本は？」

「まあ、この不景気では。商売上がったりです」

誠人は適当な回答をして勧められるがままに座った。癖で足を組みそうになり慌てて戻した。ここは日本だ。年長者への礼儀を忘れてはいけない、と誠人は自分を戒めた。

「土日仕事してるなんて鈴木さんらしくないですよ」

「真面目な経営者なんで365日働いてるのさ。なんてのは冗談で、今日は1件、来週早々にあるプレゼンの最終チェックがあつてさ」

株式会社I・C（イマジネーションサークルズ）は、デザイン会社だ。営業が苦手・嫌いなデザイナーや若手のデザイナーを囲い、

鈴木が仕入れた仕事を各デザイナーに振り分けている。若い頃に大手広告代理店で経験を積み33歳で独立した鈴木は、親の遺産でI・C・を起業した。

何人かの能力あるデザイナーと契約することに成功し、ここ数年の業績は悪くない。広告、プロダクトデザイン、エディトリアル、ウェブと様々なところでI・C・のデザイナーたちの名前を見ることが出来る。

鈴木のような元来金に困っていない人間だからこそできる仕事だと誠人は思う。このご時勢、デザインだけで事業していくのは難しいことだ。おまけに虚栄心の強いデザイナーをコントロールするのは至難の技だし、マイワールドに籠りがちな才能を大衆化させられるのはディレクターとしての高い能力が必要だ。

女性スタッフがコーヒーを持って現れた。テーブルにカップを置くスタッフに鈴木は、

「チトが来たら呼んでくれ」

「了解です」

女性スタッフは、誠人に品の良い笑顔を見せる。

コーヒーの香りが部屋を満たし、冷えていた体の芯がほぐれていく。

「君のほうこそ、毎日出社してるの？」

「当然じゃないですが。それでもサラリーマンの端くれですから」

「サラリーマン、ね」

鈴木は、苦笑する。

誠人は、カップに口を寄せながら「日本でネクタイ締めたらサラリーマンですよ」と囁いた。

「もう2年経つのか？」

鈴木の問いかけに誠人は視線を上げた。

「NYの投資銀行を退職して、2年以上経つか？」

「・・・ええ、2007年の6月でしたからね」

「どうして予感したんだ？」

その質問に誠人は、口元をゆがめた。

「あの金融危機を予感したわけじゃないですよ。ただ、単に嫌になっただけです。適当な金儲けに。虚像すぎるマネーゲームに嫌気がしたんです。マーケットが崩壊したのは必然でした。俺でさえ、いつか崩壊すると分かっていたんですから。それなりのバンカーなら気づいていたはずですよ。それを先延ばしにすることで、俺たちは儲けていた」

感情を交えずに、抑揚を最小限にした口調で言った。

鈴木は、誠人の言葉に重いため息をついた。

「君がいたチームはどうなったんだ？」

「俺がいた投資銀行は、全ての部門を縮小しました。チームは、別の投資銀行へ移りましたよ。直後の収入は今までより少なくなったみたいですけど、でも、また儲け始めてるみたいです。世界中の投機マネーが再び動きだしてますから」

世界はまた地獄へ向かうのだ。懲りることなど決して無い。どろりとした粘着質の感情が胸の奥で蠢くのが分かった。その感触に未練を感じる自分自身に誠人は警戒する。

「で、君は？日本で何をするんだ？」

「さあ。・・・鈴木さん、日本の筆筒預金がいくらあるかご存知ですか？40兆円ですよ。日本人はこんかいの金融危機で猜疑心の塊になってしまった。でも、反面、妙に強欲なところもある。その強欲さを上手く刺激して、筆筒預金を差引き出させます。で、その金を使ってファンドを作る。成長が期待できそうな企業を探して、成長させるための融資をする。今の俺にできることはそれくらいです」
一気にそう言葉を吐き出したものの誠人は自分の発言の怪しさに体温が下がる気がした。

「成長できる企業ね。ぜひうちもそのカテゴリーに入れて欲しいよ」
鈴木に茶化しに思わず笑う。

「社長、チトさんがいらっしゃいました」

ノックと同時に扉の向こうから、女性スタッフが言った。

#02

「分かった。すぐ行く」

「チトさん？デザイナーですか？」

「ああ。うちの売れっ子。少々変態なんだけどね」

「変態？」

「変わり者ってことだよ。悪いが少し待っててくれないか。これが終わったら食事に行こう。旨い寿司屋があるんだ」

鈴木は、キャビネットからファイルを取り出すと扉のノブに手を掛けた。

「ところで、君、NYではどれくらい稼いだんだ？」

「・・・知らないほうがいいですよ。これから先の人生、幸せに生きたいなら」

誠人は言いながらソファから体を伸ばし、ブラインドを押し下げた。ガラスの向こうに女性が見えた。白いセーターに黒のパンツといういたって普通のスタイルだった。

変態には見えないが・・・

「興味ある？後で紹介するよ」

意味ありげに微笑むと鈴木は部屋から出て行った。

誠人がアメリカの投資銀行ロイス・ベッカーを辞める前の数年間、年収は200万ドルに届く勢이었다。総資産は不動産を含め、600万ドルを超えていた(妻が男を連れ込んだマンションを売ったら購入時の30%増しで売れた。それでハンプトンビーチに別荘を購入したら、それがまた値上がったのだ)。

日本の平均的なサラリーマンの生涯賃金を数年で稼ぎ、その代償に一生分以上とも思えるストレスを抱えていた。

俺は、こんなに稼ぐ必要があるのか？

モニターを見ながらそんな思いに囚われたことがよくあった。

おめでとう、今回もすばらしいディールだった。
そう言われることにも違和感を感じ始めていた。

誰のためのディールなんだ？何のための金なんだ？

友人の誕生日パーティーで金髪美女が体を押し付けてくるのを、
何の感情も無く見ている自分に気づいたとき、このままではうつ病
になると直感した。

俺は破滅する。

伝説のファンドマネージャー、ジョージ・テイラーは誠人の5倍
は稼いでいたはずだ。

はじめはM&A部門に所属していた誠人だが、デリバティブ部門
で名を馳せていたジョージ・テイラーに憧れて自分を売り込んだ。
ジョージ・テイラーのチームに加入してすぐ誠人は才能を発揮した。
日本人特有の緻密さと忍耐力、そして天性の勝負強さで多くの取引
を成功させた。

2年後には自分のチームを持ち、銀行の稼ぎ頭のひとりになって
いた。

チームは皆成功に酔い、高級車に乗り、マンハッタンで最高の眺
望のマンションに住み、高級リゾート地へ美女と出かけ、毎晩シャ
ンパンを開けていた。

ストレスから不眠症になり、睡眠薬を手放せなくなっていた誠人
は、ハイテンションの仲間を遠巻きに見ていた。部下たちからは陰
気な日本人だと思われていた。妻の浮気が原因で離婚し、精神的疲
労が増した状態では皆のはしゃぎぶりについていけなかった。

結果、そのお陰で全てを無くさずに済んだのだから不思議なもの
だ。

うつ病を恐れて退職し、日本の経済誌にコラムを書いたりしてい
た頃「流血の日曜日」が起こった。テレビの前で呆然としている自
分と助かったとほっとしている自分の両方がいた。しかし、その一
端を担ったのも自分なのだと思うと体が震えてきた。この瞬間が来

ることを分かっていたのに誰も止めようとしなかった。

携帯電話が鳴った。

「おい、マサト！お前は、ウォール街の予言者か？よかったな、こんな地獄を体験せずに済んで」

同じ銀行にいた同僚からだった。

「大丈夫なのか？」

「大丈夫なものもないね。これからますます酷くなる。沈み始めた船は誰にも止められない」

同僚は、乾いた声で笑った。

今でも時々大声を上げてベッドから飛び起きる時がある。

夢の内容は自分が仕掛けたビットが大失敗するというものだった。絶対絶命。心臓を凍った手で握り潰される。呼吸が苦しくなり、視界が暗くなる。同僚たちから冷酷な謗りを受け、耳をふさいでも目を閉じても逃れることができない。エレベーターの扉が開き、逃げるように駆け込むと、そこにカゴはなく、叫び声と共に落下していくのだ。

気を抜くと見る夢。この夢は、NYでの自分が行ったことへの報いだ。

一時でも金という絶対神の足にキスをした自分の魂は、決して浄化されることはない。この後の人生で、どんなに多くの善行をしたとしても。

#03

上下巻で発売される本の装丁サンプルをテーブル上に置く。

表紙、裏表紙。使われる紙。文字、その大きさ、行間。全てを仕上げてきた。前回の打ち合わせで落とし所が見えたから、これこそが最終版だった。

平面の、紙にプリントした状態のものと、きちんと本にまで仕上げたものの両方を用意した。

速水千歳は、指先で本をなぞる。納得いくものが出来た時の満足感が胸の中にあつた。小説の内容とも合っている。力強さの中にも切なさを抱いた主人公の気持ち表現できたと思っっている。

これで、ボツだったらかなり落ち込むわね。

いつものネガティブ思考が顔を出し始めたことに気づき、千歳は慌ててその考えを頭から追いやった。

椅子に座り殺風景な部屋を眺める。いつ来ても殺風景なミーティングルームだ。この殺風景さが提示された作品を引き立てるのだと社長の鈴木は言った。

白い壁にこげ茶色のフローリング。木目の四角い大きなテーブルに、マルセル・ブロイヤールのNO. 14が10脚。低い位置にある本棚は、デザイン関係の書籍が並べられている。

大きなガラス張りの壁。今はブラインドが下ろされていて向こうは見えない。が、鈴木の仕事に誰かがいることは分かった。

ドアノブが音を立て、扉が開いた。

「お待たせ」

「・・・こんにちは」

「お、出来たねえ」

鈴木はテーブルに早足で近づき、上に置かれた本を手を取った。
「いいね」

鈴木は笑みを浮かべた。評価が高い時ほどほめ言葉が減るのは、

以前からだった。何度も裏表とひっくり返し、表紙を開き、ページを捲り、手触りを確かめる。

「いいよ」

「ありがとうございます。お客さんも気に入ってくれると嬉しいんですけど」

「大丈夫だ」

鈴木の力強い言葉に千歳は心底ほっとする。満足感と自信は別物だ。自分の満足感とクライアントの要求は往々にして乖離している。したがって、自分の満足感を定規にすると、商品にはならない。今回の満足感は、自分の中ではクライアントの要求に応えたものだと確信していたが、それでも自分以外の誰かからOKが聞けるまでは安心は出来なかった。

とは言っても、クライアントがOKを出すかどうかは明後日になっ
てみないと分からない。

「明後日は何時からでした？」

「2時からだ。来るだろう？」

「ええ。そのつもりです」

鈴木は千歳の言葉に頷き、作り付けの棚の中から白い箱を取り出した。その箱の中に入れた出来上がった作品を収める。

箱の中に入った作品は、クライアントの審判を静かに待つ。

「そういえば、トリデコーポレーションのレストラン、来月にはオープンらしいな？」

「ええ、予定では、3月27日です」

「楽しみだな」

「そうですね。緊張しますけど」

トリデコーポレーションは中堅どころのレストランチェーンだ。横浜に出す新規店舗のデザインをI・C・が担当した。若手建築デザイナーと千歳が共同で行ったのだ。

「君のセンスを社長が気に入ってくれたんだから、心配の必要は無いと思うけどね」

「社長のセンスが来店者に気に入ってもらえるかどうかは分かりませんよ」

千歳は皮肉っぽく返した。それなりに好評を得なければならないのは分かっている。次の店舗もI・C・でやりたいと思ってもらわねばならない。

千歳は、また月曜日に来ると言うと言った。バッグを手を取った。来る時より身軽になった。作品に対する不安感も軽くなり、気分がいい。

鈴木がミーティングルームの扉を開けてくれた。

礼を言い部屋の外に出るとスタッフの女性を相手に背の高い男が会話をしていた。その男が振り返る。

「ああ、チト、紹介するよ。友人の遠野誠人くん。遠野くん、うちに所属してくれてるデザイナー、速水千歳さん。デザイナーとしては、チトって名前で活動してる」

「はじめまして」

誠人は、近づきながら右手を出した。

千歳は、あ、どうも、と慣れない仕草で誠人の手を握る。その瞬間、香りの記憶が蘇る。男がつけている香り、どこかで？

「遠野くんとはNYで知り合ってたね。なんだかねで10年くらいの付き合いになる。彼、向こうでずっと仕事してたから現在日本で友達募集中」

鈴木と誠人は顔を見合わせて笑う。

誠人がジャケットの内ポケットから名刺入れを取り出した。

「よろしく」

「・・・あ、ありがとうございます」

千歳は、慌ててバッグを探り、自分の名刺を取り出した。

薄いベージュのマットな感触の紙に、R64、G128、U128で色指定したSimSunというフォントで名前やアドレスが記載されている。デザインを仕事としてる身としては、それなりなのをと思いついた名刺だ。

誠人は、その名刺を必要以上の時間をかけて眺めた。彼がその手

触りを楽しんでいるのが分かった。なんだか急に気恥ずかしくなり、千歳は、誠人の名刺に書かれている会社名を読んだ。

「グレンジャー&戸谷インベストメント??」

「投資会社です」

「・・・投資、会社?・・・すみません、全く知識が無くて」

千歳は、名刺を読んだことを後悔する。金勘定に才能が無いことを自覚しているために「投資」など無縁だった。

「いえ、かまいませんよ」

誠人は、千歳の白くほっそりとした首に視線を当てながら言った。髪をひとつに束ねているせいで、長い首が強調されている。

タートルのセーターでなければ良かったのに、誠人は瞬時に思った。

「チト、今から俺たち食事に行くんだけど、どう?」

鈴木は誘いに千歳は残念そうな表情を作り、「ごめんなさい。私、この後、約束があるんです」

「へえ、男か?」

「大きなお世話です」

「じゃ、今回の企画が通ったら誘うよ」

「というこては、月曜日、ですね?」

千歳はにっこり笑って鈴木に返した。

#04

「美加ちゃん、ごめんね、待たせちゃって」

テーブルでひとりワインを傾けている女性に千歳は手を合わせながら近づいた。

「いいよ。勝手にやってたから」

田中美加の前には、生牡蠣が並んでいた。

「おいしそう！私も牡蠣、注文しちゃおう！」

「で、どうだったの？作品は？」

「社長は、気に入ってくれた。クライアントもOKするだろうって言うてくれたから、ちょっと安心」

千歳は、笑顔で言う。

「よかったわね。じゃ、これは前祝。――すみません、シャブリをボトルでお願いします」

美加が景気良くスタッフに声を掛ける。

「まだ決まったわけじゃないよ」

「でも、今まで社長が気に入ってたって言って、その後、私とご飯たべると大抵OKじゃない？これは、成功への布石なのよ」

スタッフが持ってきたグラスに白ワインを注ぐ。

「乾杯」

「ありがとう！」

いろいろな牡蠣料理を堪能しながらふたりは近況報告をしあう。

「この間、美加ちゃんが話していた、例の彼はどうなったの？」

「彼？え、誰のこと？」

「ほら、電気メーカー勤務の研究者っぽい人」

「あー！あの人ね。何度か食事に行ったけど、結局いまいち盛り上がらなかったわ」

美加はそう言って肩を竦めた。

「なんで？」

「どうでもいいことを説明したがって、肝心な話が盛り上がらなかったり、有名企業勤務だって事を鼻にかけてるのかなって思えたりね」

「美加ちゃんだって一流企業勤務なのに！」

「うちが一流かどうかは分からないけど」

美加は、一部上場の製薬会社に勤務している。2年前に経営企画室に異動になった。本人曰く、従順な女性事務員を演じ仕事は翻訳と資料作りとコピー取りとのことだが、以前より忙しく働いている。大学時代から美人で有名だったが美加だが、その美人が仇になったのか、20代の後半を不倫という不毛な時間をして過ごしてしまい、今は恋愛関係が長続きしない時代に突入していた。大体数ヶ月で終わってしまうのは、不倫時代に身についた「ひとり上手」のせいでと美加自身が分析していた。週末をいかにひとりで楽しく過ごすかを習得してしまった。そのせいで、誰かと長い間一緒にいることが時々ひどく苦痛に感じると言う。

それだけでは、無いだろうと千歳は思っていた。彼女は結局のところ仕事をしているのが好きなのだ。だから、心底結婚したいとも思っていない。よって、相手を熱心に探していない。

とは言え、同じようなことは千歳にも当てはまる。他人のことはよく分かるが自分のこととなるとまるで客観的になれないのは人の常だ。

「勤めてる会社がすごくたって、勤めてる人まですごいわけじゃないのにね」

「そ。自分に箔をつけるために、勤務先自慢とかされちゃうとどうしようかと思うわ」

「あ、男と言えば！私、今日、社長のところで男の人紹介されたの」千歳は、バッグのポケットから名刺を取り出した。

「投資会社の人」

「・・・ グレンジャー&戸谷インベストメント。ファンドマネージャー遠野誠人」

美加は名刺を読んだ。

「知ってる？」

「知らない。・・・投資会社っていわゆる大手の証券会社みたいな一般の人向けと、証券会社とか超大口顧客しか相手にしないファンド運営の会社があるから、知られていないところはたくさんあるのよ」

「ふーん」

「ネットで検索してみた？」

「まだしてない」

美加は、iPhoneを取り出すと早速Googleに「グレンジャー&戸谷インベストメント」と入力した。

即座にその会社のホームページが引かった。クリックしてみると非常にシンプルなサイトで、企業告知でしかなかった。

創業は1990年。日本人とアメリカ人によって設立されたM&Aを専門にする投資会社だった。「国内の上場・非上場企業等を対象とした日本の独立系プライベート・エクイティ投資会社」とある。

「プライベート・エクイティ投資会社？」

千歳には初めて聞く言葉だった。

「端的に説明しちゃうと、この会社は基本的に敵対的買収をしない投資会社。企業再生とかベンチャー支援とかをするの。私も詳しくないから上手く説明できないけれど、日本では、買収ファンドと同一って思われてるみたいだけど、買収ファンドは、ある日いきなり敵対的買収で株を買い占めて一気に企業再生させて転売するっていうのが手法なんだけど、この投資会社は経営陣と友好的に買収や投資を進めるみたいね」

「傾きかけた会社にはいい投資会社よね？」

「まあ、経営陣が残れるかどうかは契約次第だろうけど・・・で、この遠野誠人って、いい男だった？」

「ルックス的には、いい男よ。背も高いし、頭も良さそうな顔つきしてるし。んー、年は、私たちと変わらないくらいじゃないかな？」

35前後だと思う。ずっとNYで仕事してたって言ってた」

「独身？」

美加の表情が明るくなる。

「美香ちゃん、いい質問！名刺もらった時チェックしたら指輪はしてなかった」

「きゃー！きつと独身よ。海外暮らしが長いのに結婚して指輪してない男なんてほとんどいないもの！また会う機会ある？」

「さあ。社長が呼べば会うこともあるだろうけど・・・」

「ちよつと、連絡してよ」

美加の依頼に千歳の視界が少し歪む。

嫉妬？

脳が汗をかくような感覚がした。が、それには気づかない振りをして敢えて会話を進める。

「何にも用事が無いのに、連絡できないよお」

「まあ、確かにそうだけど。じゃ、社長に頼んでくれる？」

「うん、頼んでおく。社長なら何か食事会とかセッティングしてくれるんじゃない？」

「ありがと」

美加の笑顔がさらに広がる。もっと情報があればいいのに、とつぶやきながら生牡蠣を殻ごと口元へ運ぶ。

#05

「そうだ！」

美加は、殻を皿に乱暴に置くと、再びiPhoneを手にとった。

「何？」

「名前で検索してみるのよ。遠野誠人・・・検索！」

美加は次の瞬間、あった！と声をあげた。

「・・・」 マネーウィーク”に記事書いてるわよ・・・あ、他にも”エコノミックリポート”とか・・・ファッション誌にも何か書いているみたい」

「へえ」

クリックするとインターネット版が読めた。

経歴部分を美加が読み上げる。

「2006年1月の記事の経歴によると・・・」 遠野誠人、アメリカの投資会社”ロイス・ベッカー”のファンドマネージャー。専門はヘッジファンド。ロイス・ベッカーにてディレクター。”すごい”！

「すごいのか？」

「ロイス・ベッカーって言ったら、超有名よ」

「なんで今は日本にいるの？」

「そりゃ、おととしの金融危機で何かいろいろあったんじゃない？あ、ほらあの頃の記事・・・」 アメリカ投資会社ロイス・ベッカー社でデリバティブ部門に所属していた遠野誠人氏が2007年6月にて退職していたことが分かった。遠野氏は、ロイスベッカー社にてマネージングディレクターとして活躍。しかし、世界金融危機の影響でロイス・ベッカー社は縮小を余儀なくされ、遠野氏の所属していた部門も人員削減が行われた模様”」

「クビになったってこと？」

「そんな感じに取れるけど。まあ、金融危機で職を失ったファンド

マネージャーは多いっていうからね。ポジションが上になればなるほど解雇される可能性は高くなるし」

美加の意見にそんなものかな、とつぶやきながら千歳はウィングラスを傾ける。

ふいに遠野誠人がつけていたフレグランスの香りを思い出した。ゆったりとした甘さとさわやかさが同居した、気持ちいが穏やかになる香り。なんとという香りだったんだろう？

美加は相変わらずiPhoneを覗き込んでいる。会ったこともない人の情報がいとも簡単に手に入る。手に入れた情報を分析すれば、次に会うまでに自分が何を準備すればいいのか、わかってくる。恋愛も情報戦なのだ。

「ねえ、この記事、すごいミーハー。」NYフアンドマネージャーの実態”・・・休暇は、バハマ。乗ってる車は、ベントのSL。スーツは、ギーブス&ホークス。靴は、エドワード・グリーン・・・って、カタログみたいな生活！」

「遠野誠人が書いてるの？」

「ライターが取材して書いてるみたい」

「・・・そんなに軽そうに書かれて文句言わないのかしらん？」

「まんざらでもなかったんじゃない？この頃は」

美加は鼻を鳴らした。バカにしたような仕草をしても興味深々なことはよく分かった。

反対に千歳は肩を竦める。どっちにしろ自分には縁の無い人間だと判断した。確かにあの香りや理知的な雰囲気は未練はあるが、全身ブランドで固めた一分たりとも隙のなさそうな男では、一緒にいても気が休まりそうにない。少しくらい抜けてる男のほうがいいことは分かっている。

千歳は、美加に遠野誠人を紹介することを改めて約束した。

山の中腹に建つ家の窓を開けると山間に横須賀の海が見える。

横須賀は山と海の街だ。人が山を切り崩して家を建て、暮らせる場所を作った。いつまでたっても下町といった感じで、自衛隊やアメリカ軍の基地がありながらもどこかのんびりした空気が漂っていた。ここ数十年の間で山を崩しての住宅地が盛んに開発され、マンションが建ち、人口も増えた。が、メインストリートを一本奥に入ると、車一台通るのさえ精一杯な道があり、その道にギリギリ面して狭小住宅が建っていたりする。

新しい町ができると古い町に過疎化が広がる。新興住宅地では、新しい学区ができたりスーパーマーケットが新設されたりしていたが、少々不便な立地にある地域での昔からの一戸建てには、老人だけが住んでいることが多い。そういう町では昔あった商店街は消え、子供の姿を見ることが少ない。それでも、昔からこの地に住んでいた人たちは、強烈な愛着を持ってこの街を語る。

3月下旬ではあったが、風はまだ冷たい。しかし、春は確実に訪れており、それは山々のトーンが明るくなっていることで証明されていた。

千歳は、部屋の空気を入れ替える為にしばし冷気を我慢する。

6畳あまりの部屋には、2面が作り付けの天井までの本棚、そして海が見える窓に面して机が置いてある。もう一面が南向きの掃きだしの窓で、そこから庭に出ることができた。庭には園芸用の温室と家庭菜園ができる花壇があり、残りは芝生に覆われていた。

横須賀市内の山間にある一軒家は叔母から譲り受けたものだ。築60年は経つこの家には子供の頃良く遊びに来ていたので、ここに住むことにはまったく違和感は無かった。不便なことは確かだが、むしろ狭いマンション暮らしから開放され、仕事が捗るようになった。

天井に向けて両腕を上げ、体を伸ばす。

今夜はデザインを担当したレストランのオープニングパーティーだ。オーナーの注文通り、それなりに着飾って出かけなければならぬ。このパーティーの為に先日、濃い紫色のワンピースを新調した。かわいい年はとくに過ぎていく。それなりに品格ある女性の雰囲気をかもし出さなければと、変な使命感に駆られ、ファッション業界で仕事をしている大学時代の友人に仕立ててもらった。

さすが既製品とは違い、シンプルなデザインではあったがフィット感がまったく違った。身体への無理がない分、欠点も強調されない。おまけに痩せて見えるという魔法までついている。既製品よりかなり費用はかかったが、満足感は充分あった。

美容院の予約まであと数時間ある。千歳は、風呂の準備をするために窓を閉めた。

#07

ホテルルームのドアがノックされた。

誠人はテレビを消し、ドアへと歩み寄る。チェーンをつけたままドアを開けると、女性が立っていた。

グレーのジャケットとパンツ。薄ピンクのセーターを着ている。

髪は、軽くまとめていた。

「こんにちは。お久しぶり」

そう言って女性は、左耳を触った。

それを確認して誠人はチェーンを外す。

「ありがとうございます」

女性は誠人に微笑み、部屋に入った。

鍵を掛ける音がやけに大きく部屋に響く。女性は、ソファアにバッグとコートを置くと振り返った。

注文通りの女性だった。年齢は、20代後半、いやもしかしたら30をわずかに超えているのかもしれない。痩せすぎず細すぎず。派手にしてこないように念押しした通りの服装だ。

「時間は、3時間です」

「ああ」

誠人は椅子に掛けてあったジャケットから財布を取り出すと一万円札を数枚取り出し、女性に渡した。

「何て呼べばいい？」

名前を呼ぶことなど無いと分かっているが尋ねた。

「お客様のご希望はありますか？」

「別に」

女性は誠人から金を受け取ると「では、レイコ、と呼んでください」

ベッドに座りレイコを見下ろす。

黒のブラジャーとショーツを身に着けたまま跪き、熱心に誠人自身を銜えている。解いた彼女の髪を掻き上げ、顔が見えるようにする。恋人のものでもないのにうっとりとした表情を浮かべているのは演技なのか、それとも本当にこの行為が好きなのかどちらなのだろうかとふと思う。遠慮なく舌に蹂躪されている誠人は快楽を享受すること以外考えられない。

午後のまだ早い時間。明るいままの部屋でする行為にしては、随分大胆だ。陽の光を浴びている彼女の背中が輝いて見える。染みひとつない背中。その美しさと誠人に行っている奉仕のギャップが倒錯感をそそる。

レイコが誠人の最も敏感なところを舌で愛撫した。思わず声が漏れる。それに気づいた彼女はさらに執拗にそこを刺激した。快感が脳髓を駆け上がってくる。こめかみに力を入れて耐える。が、ついに彼女の頭を抑え、自分のものを引き抜いた。彼女のもの欲しそうな視線にさらに血が熱くなる。

無言のまま彼女をベッドに引き上げ押し倒すと、身に付けていたブラジャーを乱暴に剥ぎ取った。そしてすぐさまショーツにも手を掛ける。レイコが身を振るが、それこそまさに演技だと誠人は思った。手を入れ、彼女の濡れた部分に指を這わす。甘えるような視線と息を飲む姿に挑発され、誠人は唇を重ねた。わずかに開いていた唇から舌を入れ、彼女の舌に絡めた。舌の動きが良いのか、それともいまだ愛撫しつづけている指が良いのか彼女は誠人の体に腕を絡め、体を押し付けてきた。充分に手入れされた肌が誠人にしつとりと吸い付く。甘い喘ぎ声を聞きながら、誠人はその肌にゆっくりと手を這わせる。

レイコの手が、熱くなった誠人自身を扱いた。理性は、あつという間に融けてしまっていた。

物音で目が覚め、自分がどこにいるのか理解するまで数秒掛かった。

何度か瞬きをすると、ぼんやりとしていた影が女性のそれだと分かった。

誠人は、自分がここで何をしていたのか思い出す。

「目、覚めました？」

レイコが優しい声で言った。

「・・・すまない。すっかり眠ってしまっ」

「かまわないわ。・・・すごかったもの。疲れたんですね」

誠人は、半身を起こす。

自分がした痴態の記憶が甦り、少々バツの悪い思いをした。が、金で買った時間だ。違反行為がなければ何をしようとも構わないはずだと思い直す。サイドテーブルの時計を見ると間もなく3時間が経過しようとしていた。

レイコはすっかり身支度を整え終わっていた。

「こんなホテルに呼ばれることなんてなかったから驚きました」

「？」

「インターミッドコンチネンタルホテルのエグゼクティブルームなんて、初めてです」

誠人は、ああ、と頷きながらサイドテーブルにあるペットボトルに手を伸ばした。

仕事では、いつもヒルトンかフォーシーズンズを利用しているが、こういう場合は定宿は避けるべきだと考え、インターミッドコンチネンタルを選んだ。初めて利用したが、なかなかいいホテルだというのが感想だ。調度品もシックでセンスがいい。ベッドも心地よかった。

「もし気に入っていただけたなら、また指名してください」

レイコは、そう言って名刺をテーブルに置いた。

ペットボトルに口をつけて水を飲む。その姿にレイコがビジネスとは別の視線を向けていた。

「・・・ありがとう。楽しかったよ」

水分を取ってひと心地ついた誠人は、再び訪れはじめた睡魔を感じながら答えた。

タクシーの中で千歳は指の先を眺めた。

髪と一緒にネイルの手入れもしてもらった。服に合わせて大人っぽく暗いトーンの赤で彩られている。ちょっと悪女っぽい出来栄えにネイルアーティストも「らしくない」と笑った。

ゴールドの指輪にネックレスと大きめのピアス。

千歳的には相当がんばったつもりだが「若い子には絶対勝てないわね」と口の悪いゲイのヘアデザイナーに辛口コメントをもらっていた。「いいのよ、若い子に勝とうなんて思っていないから。それに、今日は”店舗デザイナー”として参加するんだもの」

「そうよねー。貫禄がなくちゃ駄目よね」

「・・・貫禄って表現も嫌だけど」

化粧もいつもよりしっかりと施され「通常の5倍のいい女」とヘアデザイナーに太鼓判を押されてた。「いい男がいたらチェックしなきゃいいよ」

エルメスの腕時計は、4時を差していた。5時からマスコミ向けの披露がある。そしてその後に招待客を入れてのオープニングパーティーだ。

ほどなくタクシーはオープン直前のレストランの前に着いた。

入り口には、指示通りブラウンのカーペットがひかれている。赤ではなくあえてブラウンにした。そのカーペットはお客様用なので避けて歩き、千歳は店内に入る。お祝いの花で埋め尽くされた一角を通り抜け、目指すは一箇所しかない。

「このたびはおめでとうございます」

社長の鳥出泰造^{トリデタイゾウ}に歩み寄ると千歳は笑顔で言った。

「やあ、チトさん、今日はいつも以上に美しいね」

「ありがとうございます。仰せ付けの通り華やかにしてきました」

「滝本くんもさっき来てたよ。ほら、あそこに」

I・C・の若手建築デザイナー滝本陽平が手を振って近づいてきた。彼も黒のスーツにシルバーのシャツ、細めのネクタイと普段のラフな格好からは想像つかない出で立ちだったが、細身の彼には似合っていた。

「チトさん、いけてますね」

「滝本くんも、嵐に加入できそうよ」

「でしょ。松潤イメージしてますから」

滝本陽平が無理やり真面目な表情を作って言った。千歳は、舌を出して見せる。

「ところで、最終チェックで何かあった？」

千歳は小声で聞いた。

「万事OKです。昨日の夜までにオールクリアですよ。鳥出社長、相当気に入ってくれてますから、次もよろしく的なこと言われました」

陽平の言葉に千歳は右手を差し出した。その手を陽平が握る。

「マジ、チトさんとは次も一緒に仕事したいんで、よろしくお願いします」

「まだ次があるって訳じゃないから」

「そうっすよね。最期まで気を抜かず。今日はマガジンハウスも来るし、集英社も来るそうです。で、来週には、メンズエリートっていうファッション雑誌の10周年記念号の撮影にも使われるそうです。大注目ですよ、この店」

レストランのイメージは、モダンエスニック。メインカラーは、ダークブラウン、ベージュ、グレー。アクセントは、モロッコ柄。草木模様を大胆に織り柄として取り入れた暖かなイメージのモロッコ柄が、クールなイメージの店内を柔らかくしている。直線的なテーブルにモロッコから取り寄せた生地で作られたソファ。白いアイムチェアに置かれたモロッコ柄のクッション。無造作に置かれたヤギ革のオットマンはエキゾチックな雰囲気を出している。

提供される料理は、モロッコ、チュニジア料理を中心としたエスニック。しっかりと吟味されたワインセラーを備えており、ワイン通も納得するはずだ。料理もワインも試食会で大好評だった。

できれば、大人に来て欲しい。

鳥出社長の言葉に千歳は頷いた。

マスコミ向けに鳥出社長が挨拶をした。その後、I・C・の鈴木社長、千歳、滝本が紹介され、資料を元に滝本がレストランデザインについて説明した。もちろん、その説明資料も千歳と滝本が時間をかけて作成していた。

拍手喝采で説明を終えると、カメラを持った記者たちに囲まれつつ店内の細かい説明をして歩く。何枚もの名刺を交換し、時間ギリギリまで対応してようやくマスコミがレストランから出て行った。

次は、招待客を迎えるのパーティーだ。

店内をスタッフたちが風のように動き回る。その邪魔をしないようにと鈴木、千歳、滝本の三人は店の外に出た。

「よくやった、滝本くん、チト」

鈴木はそう言って二人を抱きしめた。

「ありがとうございます」と千歳が言うと「勉強になりました」と滝本が頭を下げた。

「もし次もあつたらぜひ俺を使ってください」

「お、謙虚じゃん」

鈴木がからかう。

「レストランのデザインって楽しいですね。気を使うところがたくさんあるけど、表と裏の顔が全然違うからやりがい2倍って感じで高揚した表情で滝本は言う。

「クライアントが難しいと辛いわよ」

千歳は脅した。

「確かにそうなんですけどね。でも、チトさんと仕事して、クライアントにイエスって言ってもらう方法を勉強させてもらいました」

「あ、分かるよ。チトは上手いんだよね。相手の要求に合わせるのが。でも、完全な言いなりじゃない。これはね、チトの特技だよ」

鈴木も手放しでほめた。

「お二方からそんなふうに言われるなんて幸せ。次もがんばります」
千歳は、少しおどけた口調で言いながら恭しく頭を下げてみせた。

着飾った招待客で埋まったレストランは圧巻だった。レストランの関係者として何よりも嬉しいのは、そこにいる誰もが楽しそうだということだ。

千歳は見知った顔を見つけては挨拶をし、側にいた人の紹介を受けて笑顔で応対し、明日は表情筋の筋肉痛を確信していた。

さすがに足の疲れを感じ、目立たないつくりになっているVIPルームに逃げ込んだ。そこではひとり社長の鈴木がワイングラス片手にソファに座っていた。千歳を見つけると、お疲れと声を掛けた。「お疲れ様です」

千歳は、テーブルの上のミネラルウォーターのペットボトルを開けると、そのまま口をつけた。

「不景気、不景気と言ってもこうやってこれだけの店をオープンさせる人もいるんだから、金があるところにはちゃんとあるってことだな」

鈴木言葉に千歳は頷く。

「そういう人がいないとI・Cも困りますからね」

「まあな。ああ、そういえば、東澄出版から連絡があったぞ。牧本秀利が次に出す本の装丁をチトに頼みたいって」

「牧本秀利？あのミステリー作家？私ってあの人の作品のイメージ、あるかしら？」

千歳は、鈴木を見上げた。

「近々原稿が送られてくるから読んでみてくれよ。今回は、ワイルドな話じゃないらしいから」

千歳は鈴木言葉にうーんと首を傾けた。牧本秀利という作家には男っぽい作品を書くイメージしかない。過去2冊しか読んだことはないのだが、どちらも組織から外れた警察官が主人公だった。

今回はワイルドじゃないそうだが、どうなんだろうか。

5センチヒールの華奢なパンプスを脱ぎ、ソファの上に足を乗せる。

鈴木はそれを見て「行儀悪いなあ」と言いつつも特別咎めるような口調でもない。

千歳は部屋をぐるりと見渡す。このVIPルームは千歳と滝本が「最もモロッコ風で」と、こだわった場所だった。

タイルで装飾された丸テーブルを囲むようにソファが置かれ、床全面にモロッコ絨毯をひいた。モロッコの居間で使われているゴブラン織りの布でカーテンを作り、温かくもゴージャスな雰囲気にした。扉にはモロッコで魔よけとして有名な”ファティマの手”がデザインされている。照明も間接照明を使い、女性が綺麗に見えるようにした。

完全に他とは違う場所だった。

そして、この部屋は密会の場合とテーマを決めていた。だから、外からの音はかなり遮蔽されている。窓も外からは中が見えないようになっている。

最初に提案した時、滝本は「チトさん、結構いやらしいんですね」と笑った。そう言った彼も相当に乗り気で、部屋の形を真四角ではなく少々いびつな四角にした。そのほうが心理的に「揺れる」のだそうだ。

ふいに鈴木の手持電話が鳴る。

鈴木は胸のポケットから携帯電話を取り出し、

「ああ、到着したか。今VIPルームにいるんだ。ちょっとここは分かりにくいから迎えに行くよ」

話しながら鈴木は立ち上がり、部屋から出て行く。

千歳はひとり残された。

天井を見上げると星の輝きが見える。

滝本が、サハラ砂漠で7月に見える星を天井に描いた。

「新月の夜、らくだに乗って砂漠に行くんですよ。そうするときつとこんな星が天空に広がっているんです」

星空が完成した日、滝本はこの部屋の床に寝転んで千歳に説明した。

「案外ロマンチックなのね」

千歳は寝転んだ滝本を見下ろして笑った。

そんなことを思い出しながら寛いでいるとドアが開く音がした。

#11

鈴木が戻って来たのだと思い込んでいる千歳は、振り向きもせずそのまま天井を見上げていた。無意識に笑みを浮かべていたのは、このプロジェクトの成功に酔っていたからだ。加えて、滝本が作り出した天井の星空が予想以上に奥行きを感じさせ、本物の星空を見ているような気分で幸せだったせいもある。

千歳が足を投げ出して座っているソファァーが、ぎしっと軋み、人が座ったことを示した。

「ねえ、きれいよね」

千歳は、天井を見上げたまま言った。

そう口にして、ふと我に返った。鈴木がつけていた香りと違う。

鈴木でないと気づき、顔を向けるとそこには遠野誠人がいた。反射的に伸ばしていた足を畳んだ。

「ほんとうにきれいですよね」

誠人は天井を見上げていた。

「よく出来ている」

「・・・あの、鈴木は？」

「ああ、外で知り合いの方とお話しされてますよ」

誠人は天井から視線を千歳に移した。そして「先日はどうも」目が笑っていない。心なしか冷淡な口調に千歳は一瞬固まる。

「・・・どうも」

「このレストランは、あなたがデザインしたそうですね」

「もうひとり、うちの建築デザイナーと一緒に、です」

今日の遠野誠人は、上品なチャコールグレーに白のピンストライプのスーツ、カッターシャツはペールブルー、濃紺とグレーのスレジメンタルタイという姿だ。最初の印象よりさらに爽やかさを纏っている。

「さっきレストランの中も見せてもらいましたが、素敵でした。子

供には来させたくない場所だと思いましたよ」

「ありがとうございます」

自分のイメージがこの冷ややかな人間にも伝わったことに千歳は素直に嬉しく思う。

「そして、ここは、特にいいですね」

誠人が体を動かしたとたん、香水が香る。この香り、なんという香水だった？

「落ち着くんだけど・・・何か不思議な衝動にも駆られる」

「不思議な衝動？」

「ええ」

誠人が少しだけ口元を緩ませる。

その小さな笑みが千歳の脳の奥のほうを刺激した。あ、まずい、と反射的に思う。この男は、自分の本能に訴える男だ、と気づいた。頭の奥でアラームが鳴る。

「何か、飲みますか？」

千歳は誠人ペースを崩すために立ち上がる。

が、靴を脱いでいることを思い出して足元を見下ろし「あ、」と再び腰を落とした。直後に誠人が床に転がっている千歳の靴を拾い、彼女の足元へ片方を差し出した。

#12

千歳の足首を持ちあげ、彼女が拒否する間もなく左足の靴が履かされた。その行為に千歳は頬を染め、

「ごめんなさい。自分で履きます!」

思わず誠人が手に取ったもう片方の靴を取り上げるために手を伸ばした。が、それはいとも簡単にかわされてしまい、反対に誠人は悪戯っぽい笑みを浮かべ「さ、右足を出してください」

「な、何言ってるんですか。冗談はやめて下さい」

千歳はうろたえて足を引き、誠人の手から逃れるように体の向きを変えた。

「美しい女性に靴を履かせることは、男の喜びです」

淡々とした口調でそう言うところか誠人はソファから降り、千歳の前に跪いて靴を差し出した。

彼の言葉にも唾然としたが、その行動にも閉口した。これだから外国帰りは理解できない。千歳は辱めを受けているような感覚さえ抱きながら彼を見た。

「さあ」

いたって真面目な顔をして誠人は千歳の足に手を差し出した。跪いてはいるが口調や目線は決して低姿勢ではない。

「あなた、Mの気があるの?」

「まさか」

それとも自覚が無いの? 千歳は、再び誠人の手から靴を奪還するために手を伸ばした。しかしその手は彼に捕まれ、奇しくも手を握られる状態になってしまった。

「離して」

自分の失態に内心で悪態をつきながら千歳は誠人を睨んだ。

「嫌だと言ったら?」

「蹴飛ばすわよ」

強い口調で返した。

「蹴飛ばされるのは困ります。なので、この靴を持って私はここを去りましょう。あなたは、片方の靴で帰るか、ここに居続けるかのどちらかですね」

笑みを含んだ声でそう言うのと千歳の手を放し、つい、と誠人は立ち上がった。

「ちよつと、待って。そんなの困る」

「ならば、足を出してください」

千歳は理解した。この男、Sだ。女に靴を履かせたいMじゃない。・・・」

これ以上この男に付き合うつもりは無かった。だから黙って足を出した。なのに誠人は千歳を見下ろしたまま靴を履かそうともしない。

「足、出したわよ」

千歳は低く言う。

「あなたは、次に何か言うことがあるのでは？」

「は？」

身をかがめ、千歳の耳元で誠人が囁いた。

「アメリカでは、子供に最初に教える言葉があります。Thank youとpleaseです。今はどちらが相応しいでしょうね？」

体内の血液が怒りで逆流する。どこまでふざけた男なんだ。千歳は「もういい！」と半ば叫ぶように立ち上がった。そして、片足だけ履いた靴を脱ぎ、誠人に向かって投げつけた。

「いい加減にして！私はあなたの言いなりなんかにならないわよ。そんなに靴を返したくないのなら、その靴あげるから持って帰りなさいよ！」

唇を震わせながら怒鳴ると視界が歪んだ。なぜ私がこんな思いをしなければならぬのかと忌々しく思う。今日は成功を喜ぶ日のはずなのに。

#13

バックから携帯電話を取り出し、滝本の番号を呼び出そうとタッチパネルを操作する。しかし、感情が昂り、指までが震えて上手く操作できない。指の震えに気づくとますます自分が情けなくなり、涙が頬を伝った。

その手が誠人の手に覆われ「あなたを泣かせるつもりはありませんでした。すみません」と先ほどとは別人のような温かい声で言われた。

スーツのポケットからハンカチを取り出し、千歳の手に握らせる。「靴はお返しします」
裸足で立つ千歳の足元に揃えて置く。

その拍子抜けな行動に千歳は戸惑った。泣き叫んだ自分の子供っぽさに恥ずかしくなる。誠人に腕を借りながら靴を履き「ありがとう」となぜか礼まで口にしていた。気分を害されたのに、バツが悪いのはなぜ自分なんだろうという疑問は、心の奥に追いやられた。それもこれも全ては、手のひらを返したような誠人の優しい雰囲気気のせいだ。

「何か飲み物を持ってきましょう。座ってください・・・それから、涙も拭いてください」

誠人は千歳をソファに座らせると、にこりと微笑んで部屋から出て行った。

何？この展開は？

扉の向こうに誠人が消えると千歳はがっくりと肩を落とした。ほとんど面識の無い男に本気になって泣いて怒るなど30過ぎの女のことじゃない。せっかくの化粧もどんなひどい状態かと恐ろしくなっ慌てて鏡を見た。

間接照明のせいではっきりとは見えなかったが、友人のヘアデザイナーのメイク技術は最高だということは確かだった。涙の跡はあ

るが、マスカラが落ちることもなく、ほぼ保たれている。簡単にパウダーを重ねて、涙の跡を隠した。

鏡をバックにしまうと誠人が戻ってきた。

手にはシャンパングラスを持っている。その金色の飲み物は千歳の最も好きなものだ。どうぞ、と差し出され、黙って受け取った。

誠人は立ったままグラスに唇をつける。

冷えたシャンパンが昂っていた感情を落ち着かせていく。千歳は瞬く間にグラスの半分以上を飲んでしまった。

「鈴木社長には、あなたの気分が優れないと伝えました。家まで送ります」

「？」

「車を用意しています」

誠人はそう言ってシャンパンを飲み干した。

「結構です。ひとりで帰れますから」

千歳はグラスをテーブルに置いた。

「それに、気分が優れないのは」

「私のせいですか？」

誠人が面白いものでも見るように微笑んだ。

「・・・そうです」

「あなたが悪いんですよ。あなたが・・・」

「・・・私何か？」

誠人は千歳の質問には答えず、身をかめると彼女のバッグを手にとった。

「さあ、行きましょう。これ以上、私を煩わせるのはやめてください」

「何？」

千歳の腰に手を廻し、立ち上がらせる。

半ば抱きしめられるような体勢になり、思わず身を振ると、懇願に近い声が頭の上から聞こえた。体が止まる。

「お願いですから、私の言うことを聞いてください」

彼がつけている香水が、また千歳を惑わせた。

千歳は肩を抱かれながらレストランの裏口から出る。

誰にも会わなかったのがせめてもの救いだった。この状況を打破する術が思いつかない。それよりももうどうにでもなれという自暴自棄の気持ち芽生えてくる。彼は鈴木社長の友人だ。まさか乱暴されるとも思えない。

通りには黒く光るフーガが停まっていた。インターミッドコンチネンタルのマークが小さくドアに描かれている。

誠人が車に近づくと言転席から人が降りてきた。そして、後部座席のドアを恭しく開ける。

千歳は車へ押し込まれた。

「すまないが、彼女の家を経由してほしい」

「かしこまりました」

「場所は、横須賀市ー」

千歳の住所を正確に言転手に伝える。

「どうして、私の住所を知っているの？」

千歳は隣に座った誠人に厳しい口調で尋ねた。

「仕事柄、調査することには長けているんです」

「は？」

「・・・専門のチームがありますから」

「専門のチーム？」

言転手がナビを設定し終わり「出発いたします」と声を掛ける。

誠人がそれに頷くと車は静かに走り出した。

千歳は追求する間を逸し、仕方なく黙り込んだ。

誠人は彼女のことなど感知せずといった感じでポケットを探り、

iPhoneを取り出すとメールをチェックし始める。

こんな気分でなければ液晶の光を浴びた誠人の横顔がセクシーと感ずるだろうと千歳は思った。が、今はそんな風に感じられるほど

寛大ではない。何もかもが腹立たしい。

誠人がふいに画面に向かって顔をしかめると電話をかけ始めた。
低く心地よい声が静まり返った車内に響いた。

「私だ。メール見たよ。思いのほか向こうの状況は厳しいようだな。
・・・ああ、シャドウの見立てとしては、フィールドはもっと経営に余裕があるイメージだが、そうではないってことが証明されたな。
いや、予想通りだ。このまま進めてくれ。・・・そうだ。構わない。
・・・明日は、9時にはオフィスに行く。・・・わかった。ありがとう」

千歳に見せたものより、もっと深く充実感を抱いたような笑みを浮かべて誠人は会話していた。

その笑顔を横目で見ながら、相手が仕事だけの関係とは思えないのは狭小な心のせいだろうか。

心の中で何かが軋んだ。

電話の相手には顔を見なくても浮かぶ笑顔なのに、自分には酷薄そうに唇をゆがめる程度のものしか見せない。あるいは、作ったような”温かさ”を湛えたそれしか。

私も相当「女」だな、と千歳は内心で苦笑した。

さっきまで傳いていた男が別の誰かにいい顔をしたとたんに嫉妬するなんて。

いや、さっきのは傳いていたんじゃない。男がチェックをしているだけだ。私にM気があるかどうかの。

私が切れて叫んだのは、男には心外だったかもしれない。そして、私は男のリストから外されたのだ。

千歳は急に胸の奥が痛むのを感じた。

嫌悪した男のことを一瞬にして口惜しく思うなんてどうかしている。なのにこの感覚はなんなのだ？

これ以上深く考えたくなかった。深く考えて、答えを見つけるのが怖かった。

「どうしましたか？」

隣から声を掛けられ、我に返った。

「・・・」

「本当に気分が悪くなりましたか？」

眉間に皺を寄せ、奥歯を噛み締めている千歳に誠人は心配そうな視線を向けている。

「いえ、なんでもありません」

千歳は、表情を緩めた。そして、

「明日もお仕事なんですか？日曜日なのに」

「ええ」

「お忙しいならば、私を送ってくださる必要はありません。どこか近くの駅でおろしてください」

「そんなことができますと思いますか？」

誠人は千歳を直視した。その眼力に千歳が怯む。

誠人が耳元に顔を寄せる。

「もう少し側にいてください」

そう囁くとそのまま千歳を見つめ続けている。千歳は身じろぎもできず前を向いたままだった。

運転手が絶対におかしいと思っているに違いない、と千歳はだんだん顔が赤くなってくるのが分かった。

お願いだから離れて、と声に出したいのにそうできない。反面、衝動的に彼の体に腕を回したいと思う自分がいる。

誠人が千歳から離れたのは彼の携帯電話が鳴ったお陰だった。

何もなかったかのように身を離し、画面を確認してから電話に出る。

「Hello？」

またしても機嫌良さそうな声色で会話を始めた。時折り笑い声まで発している。

二重人格ぶりに驚きながらも、離れてほっとした。窓の外を眺めながら早く横須賀に到着しないかと思う。

隣の男に気づかれないよう小さくため息をつく。車のシートに背

を預け、目を閉じた。張り詰めていた神経が緩む。

レストランのオープンングパーティーがもう随分前のことになった。

#15

「チト？」

肩を揺すられ、ゆっくりと目を開けた。

「・・・家の近くに着きましたよ」

千歳は、眠っていたことに気づき慌てて身を起こした。

「すみません」

「疲れていたんですね」

あなたのことでストレス感じてたんです、とは言えずに千歳は無言で頷く。

「ありがとうございます」

車を降りようとドアに手を掛けると、誠人が腕を掴んだ。

「家は？」

「ここから少し歩いたところです」

「少して？地図をみるとかなり歩くようですが？」

運転席のナビ画像は、千歳の家が山の中腹にあることを示している。

「10分くらいです」

「この真っ暗の中を？」

「慣れてますから。途中に民家もありますし」

千歳は平然と言う。

「すみませんが、しばらくここで待っていてください」

誠人は運転手に言うのと自ら車を降り、千歳のドアを開けた。

「送ります」

「大丈夫です。夜歩くことは珍しいことじゃないですし、ここは私の生活圏なんです」

「だとしても、私はあなたをひとりで帰らせることが許せない。こんな暗い夜道を女性がひとりで歩くなんて」

「ここは日本ですよ。あなたがいたNYとは違います」

「日本だってNYに負けないくらい犯罪は起こっています」

誠人は千歳を車から降ろすと、ドアを閉めた。

「ここで我々が言い合っている時間も時間の無駄です。あなたの家まで送ります」

千歳は仕方なく歩き出した。

街路灯は確かに少なかったが、明かりの点いた民家が立ち並んだ道だった。山道を舗装した階段が連続する道は、ヒールで歩くのは少々厳しいものがある。いつもより千歳の足取りは遅い。

「こんな不便なところになぜ住んでいるんですか？」

「不便でもいいところだからです」

千歳は、誠人を振り返って言った。

「買い物だって重いものを持って歩くのは大変でしょう？」

「ええ、でもいいんです。私はここが好きなんです」

三日月が空に見えた。月を追いながら歩くのが楽しいと言ったら、この男はなんと言うだろう。

風が山を揺らす。静まり返った夜に木々がざわめく。まだまだ冷たい夜風に千歳は首を竦めた。

「マイナスイオンを浴びていると、デザインのアイディアが浮かびますか？」

「ええ」

「ならばこの生活も悪くないですね」

誠人は、何の感情も込めずに言った。電話の声とは全く異質の、がっかりするような声色だった、

「ここです」

小さな門の前で千歳は立ち止まった。

門の先には、さらに上に上る階段が10段ほど続いており、その先に一軒屋が建っている。

「ひとりで住んでいるんですか？」

「はい」

「戸締りには気をつけて。ここでは、警察もすぐには来てくれそう

にない」

「・・・はい。送ってくださってありがとうございました」

千歳は、門に手を掛けた。

「今夜は、」

誠人は、千歳を引き止めるかのように言った。

「今夜は、あなたの気分を害してすみませんでした」

「・・・なぜ、あんなことを？」

千歳は、誠人の方を見ずにたずねた。どんな答えを期待しているのか自分でも分からなかったが、質問せずにはいられなかった。

「理由が、必要ですか？」

薄く微笑んだ誠人が千歳に近づいた。

「あなたはその理由が聞きたいですか？」

その言葉と同時に誠人の腕が千歳の腰を捉えた。抵抗する間もなく、千歳は誠人に抱きすくめられた。

「やめてください」

千歳は、誠人と自分の間に腕を入れ、押し返えそうとしたが、しっかりと抱きとめられびくともしない。

「ティーンネイジャーみたいですね」

くっとな笑いを堪えるように言う。

「離して」

「命令ですか？」

また耳元で言う。

「Thank you と please のどちらですか？」

千歳は不本意ながら肌が粟立った。あのゲームは終わっていない。自分の浅はかさに唇を噛んだ。

「どちらですか？」

誠人が千歳の首に唇を触れさせた。

千歳の体が強張る。

「言えば、あなたは自由になります」

男の息が首筋をくすぐる。

思わず目を閉じた。

言ったらほんとうに自由になれるのか千歳には疑問だった。その言葉を口にしたとたん、別のものが待っているような予感がする。

「・・・いつまでこうしているつもりですか」

千歳は、誠人のジャケットを握り締めた。手が痛くなるほど握り締める。そうでもしなければ耐えられそうになかった。

ひと言、言えば開放される。絶対に開放される。そう心に言い聞かせる。

「・・・お願い、離して」

呻くようにようやく口にした言葉だが、誠人は無言で不満を伝えてきた。

千歳は、喉の奥に溜まる感情、怒りや屈辱を吐き出すように言った。

「は、離して、く、だ、さい、お願い、します」

声が震えていた。

「分かりました。では、おやすみなさい」

誠人は、千歳の蒼白の顔を覗き込んだ。そして、腕の力を抜き、千歳を開放した。

支えと失ったとたん、ぐらりと体が傾き、千歳は門につかまり体を支えた。

「おやすみなさい」

誠人は、もう一度そう言うのと千歳に背を向けてもと来た道を帰って行った。そのそっけなさに千歳はあっけに取られながらも、ほっと息をついた。

#16

「ホテルへ戻ってください」

誠人は、運転手に告げた。

車はインターミッドコンチネンタルへ向かう。

ジャケットのポケットから名刺を取り出し、そのメールアドレスにメールを送る。

”こんな時間に申し訳ないが、もう一度来てくれないか？ 服装は、首が大きく開いたのがいい。靴は5センチヒールのものを”

10分も経たないうちに返事が来た。

”ご連絡ありがとうございます。お伺いします。到着は、23…30頃です”

誠人は、そのメールに満足し、しばしの仮眠を取るために目を閉じた。

時間通りホテルのドアがノックされた。

こんな時間にロビーを無事通過できることに誠人は感心した。

今日、2回目のレイコを部屋に招きいれると、彼女のコートを脱ぐ手伝いをした。依頼通り、襟ぐりの大きく開いたカットソーを着ている。鎖骨から首のラインが強調され、プラチナの細いネックレスが肌に沿うように光る。

「シャンパンはどう？」

レイコの首に指を這わせながら聞いた。

「いただきます」

テーブルの上に置かれたワインクーラーからヴーヴクリコのボトルを取ると、シャンパングラスに注いだ。

グラスをレイコに差し出す。

「ありがとうございます」

恋人に微笑むような笑顔で受け取った。

誠人はその笑顔からさりげなく目を逸らす。乾杯をするわけでもなく、自分の飲み残しのシャンパンを一気に煽った。

そのグラスをテーブルに置くと、ジャケットから財布を取り出した。

「朝までいて欲しい」

通常の5倍の量の一万円札をレイコに差し出す。

「ありがとうございます」

レイコを椅子に座らせ、カットソーとブラジャーを押し上げた。形のいい胸に指を埋める、その頂をなぞると少しづつ快楽の反応を示す。

甘ったるいため息を漏らすレイコに執拗とも思える充分なキスと胸への愛撫を与え、焦らした。なぜそれ以上進まないのかという表情で誠人を見る。

「タイツと下着を脱げよ」

誠人は言った。

突然のことにレイコの目が瞬いた。

「聞こえなかった？服はそのままでもいい。タイツと下着を脱ぐんだ」レイコは、意味するところを理解し、椅子に座ったまま言われた通りにした。カットソーとブラは押し上げられたまま、スカートは履いたままという格好になった。

誠人は、彼女の足を持ち上げ、椅子の肘掛に乗せる。スカートをたくし上げ、両足を開かせた。

「自分でしろ」

シャンパングラスにシャンパンを注ぎながら、言った。「できるだろ？」

シャンパンを口に含み、突然の要望に頬を染めたレイコの顎を掴むと、口付けてシャンパンを彼女の中に流し込んだ。

喉を鳴らして飲むレイコの手を、彼女の中心へ導く。

「見せてよ」

そう超然と言い放つと自分はベッドの淵に座った。目の前に足を広げているレイコがいる。

レイコが指を動かし始めた。それを眺めながら誠人がシャンパンを飲む。このシチュエーションがレイコの官能をさらに刺激するのか、間もなく声を上げて体をのけぞらせた。

「いったか」

誠人は、近づき彼女の顔を覗き込んだ。額に汗を浮かべ、瞳を潤ませたレイコが物欲しげに誠人を見る。解けた髪を掻き揚げ、誠人は彼女の首に舌を這わせた。長く形よい首に跡を付けたい衝動に駆られるがそれは契約違反になる。両手で首を掴み、ゆっくりと撫でる。首から顎へのラインを指でなぞり、顎から耳までを手で覆う。誠人の手の中に上手く入り込んでしまうほど、彼の望みに適合する。人間にはいろいろな性の執着がある。若さ、足、胸・・・それらも充分理解できるが、彼にとって何よりも欲望を引き出すのが首だった。

頭の形から首、そして鎖骨までのラインが美しくなければ性的対象にならない。

レイコは最近の中では、上出来だった。

誠人は、彼女の体にまわりつく服の全てを取り払う。全裸にし、再び足を上げさせる。

レイコの足の間に屈みこみ、その場所付近に舌を這わせる。彼女の腹がぴくりと動く。彼女が自分でしたときに見せた彼女の最も好きな場所は避け、その周辺、足の付け根や周辺をゆっくりと唾液で濡らしていく。

レイコが耐えかね誠人の頭を掴んだ。その手を振り払い、変わりに彼女自身の脚を開かせるように置く。濡れたそこがさらに熱を湛える。

その姿に誠人が冷笑を浮かべる。が、その笑みは演出だった。彼女の目がこの状況を喜んでいる。

髪をかき上げてまとめ、彼女の首が見えるようにする。

誠人はさらに口と指で愛撫する。指を奥深くまで差し入れ、ゆつくりの中を掻き回す。彼女の内腿が震え始め、喘ぎ声が激しくなった。

「レイコ、どうして欲しい？」

誠人は淡々と尋ねる。

「触って」

「何を？」

レイコが口ごもった。誠人は、指でその周辺を触る。彼女の体のはねた。

「いやあ」

「嫌ならもうやめるけど」

「ダメ、やめないで。お願いだから」

「ならば、どうして欲しいか言えよ」

誠人の指の動きは止まらない。会話をしながら彼女を快楽の淵へ追い詰めていく。

「触って、私の」

レイコがそれを口にした。が、誠人は手を止める。

「それは、命令？君がして欲しいんだろ？」

「お願い。私の―――を触ってください」

腰を自分の手で開き、身体を振りながら、懇願した。

誠人は、彼女の望み通りそこを吸い上げた。

明日の朝、腰が立つだろうかと自分で自分を心配するほど、誠人はレイコを何度も貫いた。

頭の中にずっと千歳がいた。今まで見た中で最高に美しい首をした女。そして、その美しさを守るかのように簡単に男に屈服しない女。こんな風にいとも簡単に足を開いたりしない女。懇願などしない女。

その千歳を墮すことを想像し、誠人は目の前の娼婦を抱いた。つくづく自分は歪んでいると頭の隅で思いながらも、熱が冷める

ことは無かった。

「何？」

誠人は、グレンジャー&戸谷インベストメント（G&T）が最も信頼している荒木・磯貝弁護士事務所の田原弁護士の報告に思わず声を荒げた。

「私も驚いているんですが……。まさか、景山精機の顧問弁護士佐々木氏が相手方のクラノマシンナリーと内通していたとは思ってもみませんでした」

「景山精機の弁護士は、あそこの社長の身内のはずですよね？」

「ええ、景山社長の奥様の弟です」

「ちっ」

誠人は椅子から立ち上がると忌々しげに部屋を横切り、扉を開けた。秘書に「景山社長にアポを取ってくれ。出来るだけ早く会いたい」

「内通の証拠はすぐに揃えられますか？」

誠人は、田原に振り返ると尋ねた。

「はい。すぐに提出できます」

「景山精機とクラノマシンナリーの合併は、クラノ買収金額をいかに抑えるかが重要なんです。ここに来て景山の弁護士がクラノに情報を与えたとなると、クラノが何を仕込んでくるかわからなくなる。大体、弁護士が守秘義務違反を犯しているなんてシャレにもならない！」

「こちらで独自に調査したのですが、どうやら佐々木弁護士はクラノに弱みを握られているようです。内容の詳細まではまだ分かっています」

「このディールが始まる前に我々が調査した時は、佐々木弁護士はクリーンでした」

「ええ。あるいは、見落としていたかもしれません」

誠人は、目の前にあるゴミ箱を蹴飛ばしたい気分だった。

5日後には契約の詳細を詰めるための交渉に入る予定でいる。

景山精機がクラノマシンナリーを買収し、クラノの持つ特許技術を景山で生かす。そして、景山が中堅どころの精密機器メーカーとしての地位を固めるというシナリオだ。

それが、寝耳に水の情報で誠人の頭に血が昇った。どうにか落ち着いて対応できるのは、過去の経験と目の前にいる50歳を過ぎた田原弁護士が冷静でいるためだ。

「正義感の強い景山社長がクラノを嫌がるかもしれないですね」
田原が低く言った。

「汚い手を使う相手をどれだけ許せるか・・・」
そこまで口にして、誠人はふいに逆の発想が浮かんた。

「ある意味、手間が省けたかもしれない」
「手間？」

「今回のことで少なくともクラノの現経営陣は全員辞めてもらえないですね」

誠人は、そう言って田原を見た。口元が緩んだ。

Cミーティングルームは「シャドーフィールドプロジェクト／SFP」と紙が貼られている。景山の”カゲ”とクラノの”野”を無理やり英語に変換したものだ。誠人の秘書が名づけた。

通常M&Aは極秘に進められる。契約が締結するまで極力外部に情報が漏れないように努める。TOB（株公開買い付け）を行わない限り対象企業の従業員でさえギリギリまで買収を知らされないこともある。その秘密保持の為に適当なコードネームが付けられるのが常だ。

今回はシャドーフィールドプロジェクト、通称SFPだった。

ミーティングルームには誠人の他に弁護士の田原、G&TのM&A専門会計士の井原藍子やプロジェクトメンバー桜田亮、他5名が集まっていた。

すでに21時を過ぎていたが、この仕事に残業も徹夜も休日出勤も関係なかった。

誠人はメンバー全員を集め、田原弁護士から受けた内容を報告し、さらに景山精機の社長との面談結果や今後の方針を伝えた。

「景山精機の本心としては、クラノが開発中の音響パルス認識方式タッチパネルの専用コントローラー技術が欲しいだけだ。よって今回の事件をきっかけにクラノの経営陣を一掃することは充分可能と考える。明日早々にクラノへ出向き、佐々木弁護士の件を明らかにし、景山に有利になるよう話しをまとめるつもりだ。俺の予想では、この件を盾にしてクラノ買収価格は90億を切る」

「当初の予想価格が100億でしたから・・・もし90億としても、景山の技術開発費は増えますし、工場増設も早まる可能性が出ますね。・・・で、タッチパネルの量産が可能になれば・・・予想より早くリターンが望めますね」

桜田亮は、パソコンに数字を打ち込む。

「3年で15%は固い」

桜田の言葉に誠人は満足気に頷いた。そして、

「音響パルス認識方式は、どこのメーカーも狙っている。一日も早く量産体制を作ったところが勝つ。それも、高性能のものをだ」

「それを可能にするのがクラノの技術・・・。なんでクラノはヘマをしたんですか？」

井原はあきれたように言った。趣味のサーフィンのお陰で年中日焼けしている井原は、さっぱりとした性格で誠人は気に入っていた。年齢も近いこともあり、仕事がしやすかった。

「これを見てください」

田原は、数枚のコピーをテーブルに出した。決算書類の一部だった。

「クラノの関連企業に裏帳簿がありました。現社長の実弟が経営する企業でロボット部品を作る工場です。工場と言っても町工場程度のものでしたが、数年前のロボットブームで大企業から引き合いが

あった部品がありました。当時、その部品が作れるのは、その実弟の工場だけだったのですが、その後はそれに変わるものが開発され、今ではクラノの下請け状態です。クラノとしては、実弟の工場を守りたかったのでしょうか。それには、1円でも高い提示金額が必要だったんですよ。しかし、結局裏目に出てしまった」

「うちのプランだとクラノの関連会社は、ほぼ閉鎖だからな」
誠人は椅子の背もたれに身を沈めた。

「よくある話といえばそれまでだが、お陰でこちらが有利になった。クラノの経営陣に特別手当くらい出してやってもいいだろう」
「こんな汚い手を使おうとしたのにですか？」

桜田は驚きの声を上げた。

「そろそろ情報が漏れ始める頃だ。こちらより高値で言い寄ってくる連中だっているはずだ。そうなれば、どこで番狂わせが起こるかわからない。クラノに少しばかりいい目をみさせてやったって罰は当たらない。連中は会社を失うんだからな。」

「ほんと、遠野さん、Sですよ」

井原が言う。

「手を差し伸べたかと思うと、突き飛ばす。ファンドマネージャーってドSばかりっていうのは事実だわ」

「おいおい、このミーティングの締めが、俺がSだってことの告発か？」

誠人は、両手を広げて見せた。

#17 (後書き)

ちなみに、ここで登場する「音響パルス認識方式タッチパネル」についての可能性は、あくまでも想像です。

誠人が同時進行している3件のプロジェクトの進捗状況を説明し終わり、ソファアールから立ち上がると社長の高倉に「ちょっと待て」と止められた。

G&Tの現社長高倉は、すらりと背の高い男で年間80ラウンド以上プレイするゴルフのせいで肌は程よく日焼けしていた。年齢は60を過ぎたあたりだろう。しかし、精悍さはその辺にいる若者よりずっとあった。

呼び止められた誠人は、再びソファアールに腰を下ろした。

高層ビルの53階にある社長室には、ハーバート・リストがギリシャとイタリアで撮影した白黒写真、2枚が飾られている。シンブルではあるが、調度品全てに金がかかっていてセンスがいい。さすが日本屈指の投資会社の社長室だった。今誠人が腰掛けている座り心地の良いソファもイタリアから直輸入されたものだった。

大きな窓から東京の夕暮れが見えた。夜の帳が降りれば、すばらしい夜景が広がる。

誠人は自分が引き止められた理由が分からないまま手に持ったノートパソコンをテーブルに戻した。

「会長から君へのアドバイスだ」

高倉は、社長机の引き出しから紙封筒を取り出すと、ゆっくりと誠人に近づきそれをテーブルに置いた。

「何ですか？」

「戸谷会長は、プライベートに口出しなさることはしない方だが、今回のことについては、少々お困りのようだ」

誠人はテーブルに置かれた紙封筒を開けた。

プリントされた写真が数枚出てくる。

写真を見て手が止まった。

「グレンジャー&戸谷インベストメントの幹部社員ともあろうもの

が、女を買うのはいかなものかと」

数日前のものだった。レイコが夜中に誠人が泊まるホテルに入っていく姿と朝出て行く姿が撮られていた。

「この仕事にスキャンダルは禁物だ。ここはNYではない。日本は表向きは異常なほど潔癖なのだよ」

「・・・私を監視しているのですか？」

「たまには、ね」

誠人は高倉を見上げる。

この程度のものでどうして分かる？と反論しようかと思ったが止めた。それ以上の証拠がでてくることは分かりきっていた。

「君ほど優秀な人間なら、それなりに女が欲しい日もあるだろう。私も君の私生活がどうであろうと関係ないと言いたいところだが、雇っている以上は、口出しさせてもらおうよ」

誠人は写真を封筒に戻した。

「女が必要ならば、こういうところでない女にしてくれ。・・・なんなら、私が紹介しよう」

冷ややかに言われ、奥歯を噛み締める。

「ご指導ありがとうございます」

誠人は立ち上がり、一礼すると社長室を後にした。

エレベーターに乗り込むと手に持った封筒を握り締める。

監視カメラがあることを思い出し、壁を殴る衝動は押さえ込んだ。セックススキャンダルで身を滅ぼしたファンドマネージャーはいくらでもいる。それは誠人も充分承知していた。だからそれなりの業者を選んだつもりでいた。

しかし、G&Tはさらに厳格だった。

「くそっ！」

そう吐き捨てるしか無かった。

#19

千歳は、ベージュのシャツに白のカーデガンを羽織ってI・Cへ向かう。

白いチュールリップの花束は、駅前の花屋で購入した。5月も近づきすっかり暖かくなった。

「こんにちは」

扉を開け、中に向かって声を掛けた。

「チトです」

「こんにちは、チトさん」

スタッフの女性が笑顔で出て来る。

「これ、おみやげ」

花束と和菓子が入った箱をスタッフに渡す。

「きゃー、ありがとうございます。いつもすみません」

「社長いらっしゃる？」

「ええ、お待ちしてますよ」

スタッフの後について歩く。

「こんにちは、社長。チトです」

ノックして言う「入れよ」と返事があった。

鈴木は読んでいた資料を机に置いて立ち上がり、チトにソファアを勧めた。

「牧本秀利の装丁、すごく評判いいよ」

「ありがとうございます。牧本さんからもメール頂きました。次もお願いしますってあったので、内容によりまして返しました」

「・・・ったく、ほんとに君は商売っ気が無いなあ。チトがディレクションして、他のデザイナーにやらせたっていいだろう」

「まあ、そうなんですけど。それより、ミトン製菓のパッケージのほうに興味あります。コンペに参加しましょうよ」

「それ言うために来たのか」

千歳は頷く。

「そうか。実は、ミトンよりいい話があるんだが、どうだ？」

「いい話？」

「ほら、この間紹介した遠野誠人くん。パーティーの時、君を送ってくれた」

「・・・ああ」

思い切りトーンが下がる。

「何かあったのか？」

「いえ。その彼が何か？」

「彼の会社でM&Aを手がけた企業が会社案内のパンフレットとホームページを新しく作るようになってね、うちに依頼してくれたんだ」

「・・・」

「新しい企業になったことで、その企業ロゴも一新するそうだ。そのデザインも含めての依頼だ」

「それ、責任重過ぎます」

千歳は、そう言ってそっぽを向いた。

「何をそんなに嫌がってるんだ？」

「・・・あの遠野誠人って人がイヤ」

「小学生か君は」

千歳の脳裏にあの屈辱的な夜が甦る。あの日から数日間、落ち込んで何も手につかなかったのだ。

「そういう堅い仕事なら他のデザイナーに話してください。私が過去に会社案内なんてお堅い仕事、手がけたことないの知ってるじゃないですか」

「遠野くんが、君を指名したんだよ」

「・・・」

思い切り嫌な表情をしてしまった。あんなに人を怒らせておいてよくもぬけぬけと指名ができるものだ。やはりあの男は頭がおかしいに違いない。

「話だけでも聞いてくれないかな。最悪、チトは名前だけってこともできるからさ」

「それ、詐欺じゃないですか」

「まあ、そうなるけどね」

結局、鈴木 of 意向に逆らえず、千歳は2日後にG&Tのオフィスが入っている六本木ネオラスタータワービルの前にいた。

仕事を受ける代わりに鈴木も同行してもらった。

投資会社を訪問するのだから何を着ていけばいいかと悩んだが、黒のカッターシャツに黒のパンツ、ベージュのレザーブルゾンという少しかっちり系でまとめた。イミテーションパールのロングネックレスが柔らかさを出している。

六本木ネオラスタータワービルは、60階建てで、その50階から53階をG&Tがオフィスとして利用していた。

高層エリアへ行くエレベーターに乗り一気に50階まで昇る。

50階にはG&Tの受付があり、アンドロイドのように美しい受付嬢がいた。

「遠野さんと11時にお約束させていただいているI・C・の鈴木です」

「いらっしやいませ。すぐに遠野が参りますので、そちらにお掛けになってお待ちください」

アンドロイドに勧められた椅子は、フィリップ・スタルクのコステスだった。千歳が1脚いくらするんだろう？ここに5脚あるから・・・などと下種なことを考えていると、ひとりの男性が早足で近づいてきた。

「I・C・の鈴木様とチト様ですね。私、遠野の下におります桜田と申します。大変申し訳ございませんが、遠野の戻りが遅れておりまして、代わりに私が対応させて頂きます」

桜田と名乗った男は、名刺を取り出し鈴木と千歳に渡した。

どうぞこちらへ、と案内されたのはすばらしく見晴らしの良いミーティングルームだった。

「すごい！」

千歳は思わず窓ガラスに近寄った。全面ガラスで少々足がすくむ。「ここでお仕事するの怖くないですか？」

千歳は、桜田を振り返って聞いた。

「こういう作りになっているのは、このミーティングルームともう一箇所だけなんです。さすがにすべてがこれだと高所恐怖症の人は仕事になりませんから。もし、怖いようでしたら、ブラインドを降ろしますよ？」

「いえ、大丈夫です。勿体ないから開けといてください」

千歳の表現に鈴木が苦笑した。

ノックの音がして女性がひとり入ってきた。

その女性が鈴木と千歳の席に資料を置く。テーブルの上のパソコンを操作すると、ふたりの前に置かれたパソコンも同時に立ち上がった。

「こちらは弊社セールスプロモーションセクションの安藤レナです」

「はじめまして、安藤レナです」

20代半ばといった雰囲気の小柄な安藤が名刺を差し出した。鈴木と千歳も名刺を取り出す。

「私、チトさんのデザインのファンなんです。ですから、今回チトさんが弊社にいらっしゃることを聞いて、遠野に無理やりプロジェクトに入れてもらいました」

「・・・あ、ありがとうございます」

千歳は安藤の熱い視線に恐縮する。

表に出ることをほとんどしないチトではあったが、時々熱心なファンに出会うことがあった。

「チトさんが、広告大賞を受賞された医薬品の広告、私、薬局からもらって家に貼ってあるんです」

「もう随分前のことです」

千歳は、肩をすくめた。

「私はチトさんのお名前は存じ上げなかったのですが、安藤から話を聞くと、いろんなところで目にしていることが分かって驚きました。今ベストセラーの”永遠より長い夏”もチトさんが装丁されたそうですね」

2月に手がけたものだ。本屋に平積みされているのは知っていた。「私が彼女をコキ使ってるので露出度が高いんですよ」

鈴木という言葉に皆が笑った。

#20

一通り説明が終わり「何か質問はありませんか？」と安藤が問うた。

「・・・正直、あまりピンと来ないんです。私の生活から遠いお話すぎて」

正直に千歳は言う。

「そうですね、実際、現在の景山精機は、家電メーカーのような製品を製造販売しているわけではないですから分かりにくいですよね」
「・・・景山精機が力を入れている音響パルス認識方式タッチパネルというのは、iPhoneやiPadとはどう違うんですか？例えば、そのすごさを示すことができると、会社案内としてインパクトがでるのではないかと思うんです」

「確かにそうですね」

桜田は別の資料を提示した。

「これが景山のタッチパネル方式です。で、こっちがiPhoneやiPadが採用している静電容量方式です。この表が示すとおり」

桜田は、メリットデメリットを要領よく説明していく。疎い千歳にもかなり理解が出来た。

しかし、会社案内を作成するほど知識が詰まったわけではない。景山精機の過去の印刷物を取り寄せることや、コピーライター選定なども検討課題としてあがった。

「納期はいつですか？」

「7月上旬を予定しています」

「タイトね」

「すみません」

安藤は恐縮した。

「いえ、いいんです。安藤さんのせいではありませんから。ところ

で、会社のロゴですが、景山社長の拘りが分かると作りやすいのですが。例えば、赤が好きとか、丸いデザインが好きとか」

「うーん、さすがにそういうことを聞いたことは無いですね」

「では、できるだけ早く社長と会わせて頂けますか？お話して得られる情報もありますし、デザインの方向性を決めるには手っ取り早いです」

「わかりました」

安藤は、手帳にメモをする。

日程調整の為にスケジュール帳を捲っていると、ドアがノックされ、

「遅れてすみません」

声と同時に誠人が姿を見せた。

「やあ、遠野くん」

鈴木が立ち上がる。千歳も続いて立ち上がった。

「今回は無理を言って申し訳ありませんでした」

誠人が頭を下げた。

「いや、ありがたいオファーだよ。チトも結構乗り気でね」

余計なことを言わないで欲しいと心の中で叫ぶ。

千歳は、誠人と目を合わせないよう視線を落とし気味にしていた。それでも、相変わらず隙の無い雰囲気は充分伝わってきた。

「おかえりなさい、遠野さん」

「？」

安藤の言葉で鈴木の前疑問符が浮かんだ。

誠人が「上海へ行っていたんです」と答えた。

「ところで、どこまで進んだんだ？」

「景山精機の説明は終わりました。いろいろと詰めなければいけないこともありまして・・・」

安藤は誠人に説明する。

「チトさんの指摘は最もだ。安藤、すぐに景山に連絡して日程を詰めてくれ。社長をはじめとする幹部社員、あと工場勤務者や営業も

インタビュリストに加えること。それから、工場見学も許可してくれるよう依頼。立入禁止エリア以外の写真撮影もね」

「了解です」

「他に何か要望はありますか？」

誠人が千歳を見る。

「会社のロゴの件ですが・・・」

千歳は、ようやく誠人を見た。

誠人がその先を促すように眉をあげた。

「これは、私の思いつきなんですけれど」

千歳は、社内コンペを提案した。

「もちろん、会社ロゴデザインがあまりにも素人すぎでは困ります。ですから、最終的にはI・Cで責任持って仕上げます。ただ、アイデアは、従業員の方たちから出して頂くほうがよいかと思うのです。社長の拘りと従業員のアイデアが融合したら、愛着も増すと思いますませんか？」

最期に千歳は、買収合併した企業をまとめる社内イベントとしても使えると付け加えた。

「グッドアイデアだ。安藤、この案をすぐに準備して景山に提案するんだ」

「はい」

「え？こんなに簡単に決めていいんですか？」

千歳は、椅子から立ち上がった安藤を見て言った。

「これ以上どう決めるんですか？良いものは良い。すぐに始めるのが大事なんです」

誠人は、微笑みながらそう言った。

#21

「では、次は4月27日に景山精機と一緒に訪問するということで、よろしくお願いいたします」

桜田はそう言って打ち合わせを締めた。

「もうこんな時間ですか。どうです、昼食と一緒に」

左腕のIWCの腕時計を見て誠人は言った。

「いや、せっかくだけど私はこの後アポがありましてね」

鈴木はそう言ってから千歳を見て、

「チトは置いていきますから、遠野くん、昼飯おごってやってください」

「そんな、困ります」

千歳は、反射的に身を引いた。

「別に予定あるわけじゃないんだからいいだろう」

鈴木は全く悪気無く言う。

「でも」

「お時間があるならつきあってください」

誠人は、パンツのポケットに手を入れて千歳に言った。その格好が余りにも見栄えし、千歳の脳が反応した。

「・・・わかりました」

よくよく私はいいい男に弱いのだと、自分の弱点を千歳は反省する。

「桜田、安藤、きみらもどうだ？」

「すみません、私は急ぎの仕事がありますのでご遠慮させていただきます。チトさんとの食事、次回ということで、お願いします！」

安藤は深々と頭を下げた。

「安藤さん、女子会開きましよう」

千歳は、安藤が喜びそうな言葉を返した。

満面の笑顔で安藤が顔を上げた。歓声をあげ、小躍りする。

そんなやり取りを誠人が笑顔で眺めているのが千歳には意外だ。

「僕はご一緒させていただきます」

桜田のOKの返事に千歳は救われた気がした。

誠人に連れられて向かったのは、G&Tが入居しているビルの向かいだった。

エレベーターに乗り込もうとすると桜田の携帯電話が鳴った。

「すみません、先に行ってください」

桜田は、携帯電話を手にした。

え、と千歳が驚いている間に扉が閉まった。

エレベーターの中で誠人とふたりきりになる。

最悪。

誠人の視線を感じつつ、エレベーターの中ほどに立ち尽くした。

今日はあの時の香水じゃない・・・あ、これは、エルメスのナイルの庭だ。今日は万人ウケを狙ってるの？

「まだ怒っていますか？」

不意に誠人が言った。

千歳は、驚いて誠人を振り仰いだ。

「怒っているようには見えませんね」

「・・・怒っています。でも、仕事とは別ですから」

「そう言ってもらえると助かります」

エレベーターの扉が開き、彼の手が千歳の背を押した。

よく利用するのか店員は誠人を見つけると笑顔でやってきた。そして、いつものテーブルをどうぞ、と少し奥まっではいるが、レストラン全体が見渡せる席に案内した。

全体的には白のイメージの店内だった。全ての椅子にカバーが掛けられ、ふんわりとりボンが結ばれている。テーブルには紅いポピーが活けられていて、結婚式もできそうな雰囲気だ。

「イタリアンのお店なのに随分甘い装飾ですね。まるでフレンチみたい」

千歳は席につくと言った。

「ここはターゲットがアッパークラスらしいから、豪華にしてるようですよ」

「よくいらっしゃるのですか？」

「時々。いつもは、蕎麦や定食です」

メニューを見ながら言う。

蕎麦や定食を部下と一緒に食べている誠人も結構いけるだろう、と千歳は unnecessary 想像をする。

「嫌いなものありますか？」

「いえ、別に」

「じゃ、リゾット食べませんか？ここのパルミジャーノ・レッジャーノのリゾット、最高なんですよ」

「遅れてすみません」

桜田が到着した。

「遠野さん、僕、リゾット食べます」

「俺たちも今、それを注文しようとしたんだ」

「了解。じゃ、いつものメニューですね」

桜田はウェイターに向かって手を上げる。

「パルミジャーノ・レッジャーノのリゾットと生ハムのサラダ、デザートはコーヒーと特製ティラミスを、それぞれ3人分」

「かしこまりました」

「あと、グラスでシャンパンを」

誠人は付け足した。

「銘柄は？」

「何でもいいですよ」

誠人が意味深な視線を千歳に向けた。その抜け目無さに千歳は呆れて目を見開いたまま彼を凝視してしまった。

視線を逸らさない彼に気圧され、慌てて目を逸らす。

「仕事中にお酒飲んでもいいんですか？」

千歳は、桜田に向かって話しかけた。とにかく、誠人の世界から逃げることを第一に思う。

「ほんとはいけないんでしょうけど、僕らクライアントと昼間からワイン飲むこともありますし・・・ケースバイケースです」

「ストレスフルな仕事だから、たまには息抜きに昼間から酒くらい飲ませてくれ、だな、桜田」

「あははは、ま、そんな感じですかね」

桜田は、誠人の言葉に頷いた。

#22

「ところで、上海はどうでした？」

「どうもこうも、万博フィーバーで大変だ。街はすっかり作り変えられたし、交通規制は厳しいし」

誠人は首を振る。

「成長具合は？」

「上海や北京は東京並みだよ。貧しさを追いやって、富める大都会を作った。内陸部に行けば、信じられないほど貧しい暮らしをしている人間がいることなど微塵にも感じさせない街をね。あれほど貧富の差が激しければ、反日運動でもさせなければまっさきに中国政府が危なくなることは必死だ。今のままではチャイナリスクはどうやっても回避できない」

誠人はそう言うのとグラスの水を飲んだ。

「当分日本は中国のガス抜きに利用され続けるんですね」

桜田は、つまらなそうに言う。

「上海オフィスはどうでしたか？」

桜田は続けて聞いた。

「ああ、ニコラス・レオに会ったよ。彼が、桜田によろしくと言ってた。上海に遊びに来るようになって」

千歳は、ふたりのやり取りを黙って聞いていた。

ふたりが会話する様子を見る限り、誠人が嫌なやつには感じられない。それよりも、非常に好感が持てる人間に思える。

やはり二重人格者？

エレベーターでの突然の質問も気味悪かった。質問というより詰問だった。

この人の、この変わりようは何なんだろう？ 有能な上司然とした今と、人を精神的に追い詰める狂人的な振る舞いをする時の違いは一体何なのだろう？

3人の前にシャンパングラスが置かれた。

細長いグラスの中で黄金色が陽の光を浴びてさらにきれいに輝いている。

「チトさんとの出会いに」

桜田がグラスを持ち上げる。千歳と誠人もグラスを持った。

「乾杯」

グラスが重なり、さわやかな音を立てる。

昼間から飲むシャンパンほど贅沢なものはないと思っている千歳は、この贅沢を与えてくれた誠人に心の中で礼を言う。これくらい気が効くと嫌な部分も少しくらいカバーされる。

この後、サラダとリゾットが登場した。

誠人が言った通り、絶品だった。今まで食べたどのパルミジャーノ・レッジャーノのリゾットより美味しかった。チーズの味が濃く、まろやかで、思わず目を閉じたくなる。サラダのプロシユットもすばらしく美味で、何よりも嬉しかったのは、サイズの大きいプロシユットが何枚も皿に載っていたことだった。

食後のデザートにフォークを入れていると「千歳？」と声がした。

その声のほうを見ると友人の田中美加がいた。

「美加ちゃん」

「久しぶり。珍しいわね、こんな時間にこんなところで」

美加はそういいながらしつかり遠野をチェックしているはずだ。

「美加ちゃんは、ここでお昼？」

「うん、会社の人たちと」

美加の視線が、彼らを紹介しなさい、と言っている。

「あ、こちら今一緒にお仕事をさせていただいてるグレンジャー＆戸谷インベストメントの遠野さんと桜田さん。友人の田中美加さんです」

美加はすかさず名刺を取り出し、

「共生ファーマシーの田中美加です」

「御社の近藤社長とは、先日、外務省主催の経済開発会議で一緒

させていただきました」

誠人は名刺交換しながら言った。

「え、あの会議参加されたのですか？」

「ええ、投資会社として発展途上国にできることがあるかという会議がありましたね」

「そうだったんですか。私は別の会議に手伝いで行ったのですが、その時お会いできたらよかったのに」

美加は、特級クラスの微笑を見せた。

これで落ちない男はいないだろうと千歳は思う。美加マジックをとくと拝見という気分になる。

が、誠人は何の反応も示さず、代わりに彼女に釘付けになっているのは桜田だった。

30歳手前の桜田にとっては美加の少し年上のお姉さまの魅力はたまらないだろう。色香を押し殺したグレーのスーツにすらっと伸びた足。形の良い手に丁寧な彩られたネイル。巻いた髪は、今はヘアカリップで纏められていた。

残念だけど、美加は年下NGなの、桜田くん。千歳は心の中で思う。

「すみません、同僚が待っているので、これで」

美加が頭を下げた。

「じゃ、千歳、またね」

「うん。また連絡する」

美加がエレガントに去っていく。

その後姿を見送り、3人は同時に席に座った。

「綺麗な人ですね」

桜田の開口一番の惚けた言葉に千歳が吹き出した。

「・・・す、すみません、ほんとに俺、そう思ったから」

顔を紅くしてうろたえる桜田に千歳はさらに笑う。

「ごめんなさい。笑うなんて失礼なんだけど・・・桜田さん、あんまり正直だから」

千歳はそう言ってテーブルに突っ伏した。「チトさん、笑いすぎですって」と桜田が抗議した。

「確かに美加は、美人です」

千歳は笑い涙を指で押さえながら言った。

「彼女をほめる言葉は、美しい以外無いと思うもの」

「ですよ。僕の意見は間違ってるんですよ、遠野さんもそう思いませんか？」

「ああ、確かに美人だった」

誠人は、ティラミスに視線を落としたまま答えた。

千歳は、その回答に体温が冷える。理由は分かっていた。でも、それを認めるのは断固として拒否したかった。

「田中さんはお付き合いされてる方いるんですか？」

桜田は身を乗り出して聞いた。

「さあ？」

千歳はひとまず意味深に回答した。

#22（後書き）

本日、#23更新します。

#23

慌しく日が過ぎていく。

G&Tから依頼された仕事が思うように捗らないのは自分の才能のせいなのかと千歳は落ち込んでいた。

景山精機の訪問や社長インタビューなどはそれなりに上手く行った。会社案内の社内コンペの準備も着々と進んでいた。

なのに、デザインがまとまらない。ベースデザインを何パターンも作ってみたが、どれもしっくり来ない。

こんな時は気分を変えるしかないのだが、今はその術さえ分からない。

千歳は、カレンダーを見た。世間はゴールデンウィークに入っている。こうして仕事をしているのは自分だけなのではないかと思えた。

なんだか寂しい気分がする。

外は暑いほどの陽気で、緑が青々としていた。桜も終わりに近づいている。千歳の家から見える大きな3本の桜も、すっかり花より緑が目立つようになっていた。外出したら日焼けするだろうなと考える。

ピツと音がして携帯電話のメールが着信した。

チェックをするとG&Tの安藤だった。

”チトさん、こんにちは。今日、これから鎌倉でBBQするんです。G&Tの社員ばかりですがいらっしゃいませんか？夜までいますから都合が良い時間から参加OKです”

場所が添付されていた。

どうしようかな、と千歳は思う。もしかしたら、誠人も参加しているかもしれない。そう思うと行きたいという気持ちと行くべきではないという気持ちが半々になる。行きたいという気持ちと行くべきではないという気持ちの根底にあるのは、ひとつの感情だ。

が、素直にそれに従うことが怖かった。

あれほどまでに感情を逆撫でされた男に惹かれる自分の本能を嫌悪した。

確かに見栄えもする。仕事もできる。が、あの男の持つ内面には相当の疑問を感じた。

またあの香りを思い出す。

あの時以来、誠人があの香りは使っていないようだった。会う度にエルメスカブルガリが香った。

大体、自分がいちいち彼のつけてる香りをチェックしているのも嫌だった。

彼が何を着て、何を持って、どんな香水をつけて、と会う度に自分の脳にインプットするその行為は、彼が気になって仕方ないということだ。そのことを知られたくないが為に、視線を合わせなかったり、離れて座ったりする子供じみたことをしている自分の程度の低さにもあきれていた。

いい年して何しているのだろうと思う。

が、それでもやはり誠人に近づくことは避けたかった。

お昼が過ぎ、リビングの床に寝転がってアフリカの動物を撮影した写真集を眺めていると携帯電話が鳴った。

画面を見ると「G & T 桜田」と表記されている。何か緊急事態かそれともB B Qかといぶかりながら電話に出た。

「もしもし？」

「あ、チトさんですか？」

「どうかしました？」

「うちの安藤からメール行きませんでしたか？」

桜田はどこか外にいるのか、電話の奥から車の通り過ぎる音が聞こえた。

「あ、頂きました」

「お忙しいですか？もしよければ、いらっしやいませんか？」

「でも・・・」

「実は、開催場所はうちの会長の別荘なんです。今日は、会長はいないんですけどね、毎年場所を提供してくれるんですよ。で、その別荘を経てた建築家が」

桜田がその建築家の名前を言ったとたん、千歳は「行きます」と答えていた。

「鎌倉駅に着いたら連絡ください。迎えに行きますから」

その建築家がデザインした建物のいくつかは公共の建物で、誰でも見学することができた。しかし、個人の所有物となるとそう簡単には見れない。鎌倉にあるその一軒家については、雑誌で知っていた。ただ、その雑誌でも建築された当初の外見の写真が掲載されていただけで、中の写真は無かった。

その家が見れるというだけでも千歳は行く価値があると思った。日焼け対策をし、帽子を用意する。とりあえず、在庫していたワインを2本、袋に入れて家を出た。

#24

鎌倉駅はGWの最中だけのことはあり、観光客で混雑していた。携帯電話で桜田を呼ぶ。

「車でそちらに向かいますので、すみませんが15分ほど待っていてください」

千歳は、駅前の店を覗いたりしながら桜田を待った。

15分を経過した頃、携帯電話が鳴った。

「お待たせしました。チトさん、どこですか？」

慌てて店から出ると紺色の車の側で手を振っている桜田がいた。

「こんにちは」

「突然連絡してすみませんでした」

「いえ、家でパソコン見ていただけですから」

「もしかしてうちの仕事ですか？」

「あ、いえいえ、他にもいろいろと」

桜田が乗ってきたのはハリアーだった。こんな大きな車が鎌倉を走れるのかと心配したが、どうやら慣れているらしく裏道をすいすい行く。

「あの別荘は、戦後しばらくして建てられたものです。最初のオーナーがアメリカ人で、その人の友人が建築家のアダム・クレデイスだったそうです。何度かオーナーが変わったようですが、今はうちの会長が所有しています」

アダム・クレデイスはあのフランク・ロイド・ライトの弟子だ。

彼の建築手法を最も継承した人物として名が知られている。ライトと同じように日本とも関わりが深く、戦後建てられた建物でクレデイスがデザインしたものがいくつか残っている。個人宅も数軒手がけており、現存する1軒が今から向かう場所だった。

坂道を上がった場所にその家はあった。

緑のなかにベージュ色の壁が見える。それだけで、鳥肌が立った。

「どうしよう。私足が震えてる」

「え？・・・大丈夫ですか、チトさん？」

桜田は驚いて千歳を見た。

「絶対に中に入れないと思っていたところに足を踏み入れるのよ。自分の幸運に感謝するわ」

桜田は千歳の熱を帯びた言葉に、彼女の職業が何なのかを改めて思い知った気がした。

「僕たちにとっては、ただの立派な別荘でしかないんですけどね」
いつまでも車の中から家を覗き見ている千歳に桜田は、行きましようかと声を掛けた。

スロープになったアプローチを登ると家の3分の2が見える。残り3分の1は、大きく成長した庭木に隠された状態になっている。木が成長することさえ計算して設計されたのではないかと思えるほど、絶妙なバランスだった。

庭でG&Tの社員がBBQをしていた。

別荘は2階建。2階のバルコニーは奥に向かってせり出している。そこから海が見える作りになっているようだ。

息を飲んで立ち尽くす千歳に安藤が走り寄ってきた。

「こんにちは。来てくださってありがとうございます」

「・・・こちらこそ。こんなチャンス頂けて」

「チトさんは、安藤に会うよりこの家のほうが興味あるんだよ」

桜田はわざと意地悪く言った。

「遠野さんがチトさんなら興味あるだろうから声掛けてみろって言ったんですよ・・・ってこれは、チトさんには言っただけじゃなかったんですけど。黙っていてくださいね」

「遠野さんが？」

「ええ」

安藤は何のこだわりもなくそう言う。「早くこっちへ」と手招きした。

遠野が自分について思い出してくれた。そのことに千歳は意外な

気持ちになる。彼の一連の行動は、彼なりの想いがあるのだろうか？
もしそうだったら？・・・ありえない。

千歳は、その思いをきつく否定する。表面上、自分の心に嘘をつくのは簡単なことだ。

B B Qのグリルが置かれた庭には、30人を超える人がいた。メンバーの中には外国人もおり、その外国人たちとビール片手に話をしている誠人がいた。

誠人の視界に千歳は入るように歩き、立ち止まった。そして、頭を下げた。

誠人が外国人たちとの会話を切り上げ、こちらに近づいてくる。

「いらっしやい」

「お招きくださってありがとうございます」

白の麻のシャツにチノパンを履いた誠人は、新鮮だった。いつも整えられている前髪が落ちていて、若く見える。

「GWはどこへ行かないのですか？」

オフィスにいる時とは違って、雰囲気が柔らかい。

「はい。どこへ行っても混んできますし。遠野さんは？」

「同じです。それに、日本は休みでも海外は動いてますからね。たまにオフィスに行ったりしてます」

この人が今更海外旅行もないか、と千歳は思う。ずっと海外で暮らしていたのだ。日本にいるほうが新鮮なのかもしれない。

誠人が近づくと彼の今日の香りが千歳の鼻腔をくすぐる。今日は、カルバン・クラインのエタニティだった。今日のような陽気のよい休日にはぴったりだ。

「毎年ここで皆さん集まるんですか？」

「そのようですね。東京周辺でGWを過ごす連中への福利厚生みたいなものです」

「会長さんは、すばらしい人ですね」

千歳の声に熱が籠る。

「この家をちゃんと保存してるんですから。後で中を見せてくれるって桜田さんが約束してくれました」

約束・・・ね。誠人は千歳の口から出る言葉に反応する自分を嗤う。子供じゃあるまいし。

「当時の図面もあるって聞いたんです。見たことがありますか？」

「何枚かは、額に入れて飾ってありますよ」

これほど興味で目を輝かせている彼女を見たことがなかった誠人は、そんなにこの別荘が欲しいなら買い与えてしまおうかと馬鹿なことを考えた。

#24 (後書き)

アダム・クレデイスについてはフィクションです。

「暑くないですか？中にアイスクリームがあるんです。いかがですか？」

「え、家の中、勝手に入ってもいいんですか？」

両開きの玄関の片方、銅製のノブを掴む。ひんやりとした感触。そして、引く。扉が、全く古さを感じさせずにスムーズに開く。広い玄関があり、作り付けの下駄箱。それもあの黒の直線の縁取りがあるデザインだった。玄関というそれほど大きくないスペースにも、フランク・ロイド・ライトが宿っている。

千歳は歓喜した。無意識に手を胸に当て、心を落ち着かせようとしていたが、知らずに笑みが浮かび、軽い興奮状態に陥っている。

天井を見上げていると、光が閉ざされた。扉が閉まったのだ。

千歳の一連の行動を後ろから見ている誠人は、彼女の関心がこの家にしか向かっていないことに苦笑する。

「キッチンは奥ですよ」

そう促されるとようやく誠人の存在に気づいたようで、サンダルを脱いだ。

誠人が示す方向へ向かう途中で、帽子を脱いだ。無意識に髪をまとめ、片方へ流す。後ろで誠人が満足気に微笑んだことを千歳は知らない。

日差しの明るいキッチンには大きな冷蔵庫があり、その冷凍室を開くとハーゲンダッツのカップがあった。

誠人が振り返ると千歳はキッチンの作り付けの戸棚をそのひとつひとつを丹念に見て回っている。

「チトさん、何がいいですか？」

「・・・あ、えっと・・・ラムレーズンがありますか？」

誠人は、千歳の要望を探し出し、差し出した。自分には、グリーンティーを選んだ。

「スプーンはこれ」

プラスチックのスプーンが渡された。

「あっちにソファがあります。そこで食べましょう」

吹き抜けのリビングルーム。奥の天井が低く作られているのは、旧帝国ホテルのロビーを彷彿させる。低くなった天井の下に大きなソファが置かれていた。

開け放した窓から由比ガ浜が見える。

庭への窓より、海への窓がメインに思えるのは好みの問題だろうか？

「あなたの家もこんな感じで海が見えますか？」

「いいえ。こんなにフラットには見えません。うちのは山の間に見える海です」

アイスクリームを食べながら、窓の外を眺めた。

外からBBQを楽しむ声が聞こえてくる。この家の中には、ふたりきりなのか。

今日の遠野誠人は、冷淡でもなければ神経を逆撫でるような発言もしない。ゆったりとくつろいでいる姿は、魅力的な男性そのものだ。

今日は、二重人格のDr. ハイドのほうなのかしらん？

千歳は、スプーンをくわえて思った。

「それを食べ終わったら、この家を案内しましょう」

「遠野さんが？」

「不満ですか？」

「いえ、桜田さんが詳しいのかと思って」

「あいつが建築に詳しいなんて聞いたこともないですよ」

「遠野さんは詳しいんですか？」

誠人が「桜田よりは」と微笑んだ。

実際は、誠人が詳しいというわけではなかった。

この家の客人用に作られた案内本があり、それを基に見て回った。

丁寧に撮影された写真と専門家が書いたと思われる説明文。手作りのガイドにしては本格的だ。

「これを作った会長はマニアね」

「凝り性だということは知っていたけどこれほどまでは・・・」

誠人は感心する。

50ページほどになる本は表紙まで凝っている。

「あ、見て。この埋め込み照明。ちゃんと幾何学模様になってる。

この幾何学模様の安心感って不思議。調和って素晴らしい」

延々と天井を見上げている。

本を持っている誠人は、壁に寄りかかりながら千歳が満足するまで待っている。自分の前でこんなに素直に感情を表す千歳を見るのはじめてだったこともあり、それを見ているだけで楽しかった。自分が最初に与えた印象はよほど悪かったのだと己が性癖を反省した。

「ここがマスターベッドルーム」

「きゃー！」

千歳は、扉を開けた誠人の脇を通り抜けて部屋に入った。

天井と壁の間に作られた光を取り入れるための窓。黒く塗られた木で縁取りされた壁。天井から吊るされたライト。もちろんベッドや椅子も幾何学模様が掘り込まれたものだった。完璧なまでの空間だ。

誠人はベッドの淵に座った。

千歳は両開きの窓を開ける。カーテンがなびく。

「ここに住んでみたい」

「では、会長の愛人にでもなってください」

「そうでしょうか？ 会長さんはお幾つ？」

「・・・70くらいです」

「・・・70歳ですか」

誠人は、紹介しましょうか？と真面目な顔をして千歳に聞いた。「残念ですが遠慮させて頂きます。でも、ぜひ来年もBBQに呼ん

てください」

その返事に誠人は微笑みを返した。

階段を降りて行くと桜田が、

「あ、遠野さん、チトさんを案内しちゃったんですか？僕がしようと思ったのに」

「残念だったな」

「せっかくなところ見せようかと」

桜田は、ふて腐れたような声で抗議する。

「これ使うつもりだったんだろ？」

誠人は手に持った本をヒラヒラさせた。

「あれ、遠野さん、これのこと知ってたんですか？ちえっ！」

桜田の反応に千歳は笑う。

「桜田さん、この本、すばらしいわよ。ガイドなんていらなくらい」

「それは、失礼しました。私は邪魔でしたね」

誠人がおどけて見せた。

#26

すっかり日が落ち、BBQはいつの間にか片付けられていた。庭にいた人たちもいつの間にか姿を消してた。

「私もそろそろ失礼します」

千歳は、コーヒークップを置き、集中して読んでいたこの家の案内本を本棚に返す。

側でNYタイムズを読んでいた誠人が顔を上げた。

「送っていきますよ」

「いえ、タクシーで駅まで行きます」

千歳の頭にまたあの記憶が蘇る。今日はいい人だったかもしれないが、いつ変貌するかと思うとやはり怖かった。

「ところで、安藤さんや、桜田さんは？」

「さっき、帰りましたよ。あなたによろしく言って欲しいと伝言を受けました」

その言い方に千歳の予感が現実になることを知る。

誠人が新聞をテーブルに置いた。強い視線が千歳を捉える。

「チトさん、そろそろはつきりさせませんか？」

千歳は、動けなくなつた。背筋が冷える。

誠人の手が千歳の腕を掴んだ。そして引き寄せる。あつという間に彼の腕の中で抱きとめられた。

「イヤです。離して下さい」

「あなたは、これっぽっちもイヤだなんて思っていないのに？」

真実をつかれた千歳はうろたえた。しかし、再度「本当にイヤなんです」

「ならばなぜ私を窺い見るのですか？それとも、あなたが観察するように私を見ていたと思っっているのは、気のせいですか？」

誠人は千歳の顔を押し上げた。頬を染めた千歳が、怒りと羞恥で唇を震わせている。誠人は何か言おうとした千歳の唇を塞いだ。

驚きのあまり顔を避けることさえできない千歳をいいことに、誠人は、彼女の口腔を犯す。逃げる舌を追い詰め、絡めた。

「いやっ!」

渾身の力で誠人を押しのけた千歳は、彼の頬を叩いた。一瞬表情を歪めただけで、誠人は再び冷静に千歳を見る。

「そうやって自分を押し殺して、なんになるんですか?」

「離して」

握られたままの左腕を見て言った。涙声になっている。

「離しません。今夜はあなたを離すつもりはない」

「どうして?」

「・・・その質問は、自分自身にすべきでしょう?」

誠人が千歳の首に手を伸ばした。とっさに動けなかった千歳は、誠人の胸の中に抱え込まれた。首筋に唇を感じ、身を竦める。

髪を掻き揚げ、千歳の首を露にする。その首にゆっくりと口づけをすると千歳が何かを耐えるように奥歯を噛締めるのが分かった。

首筋に顔を埋めたまま彼女の顔の輪郭をなぞる。頬を伝う涙を指先で拭う。彼女が震えているのが分かったと、それが恐怖からなのかこれから訪れる快楽への期待なのかと誠人は思案した。

千歳の顔を見る。目を見開いて、唇を噛み締めている姿は、それなりに美しいと思う。この固くなさが彼女の魅力なのだ。堕ちないものは無いと分かっている。が、それまでの過程が難しければ難しいほど得るものは大きい。

誠人は、千歳の横一文字になった唇を再度塞ぎ、舌で彼女の唇を愛撫する。背けようとすると頭を抑え、逃げられないようにした。

「あ、んん」

拒否のうめき声を漏らす。

「本当に強情な人だ」

誠人は呆れたように言った。

「そう思うなら離してください」

「へえ、pleaseと言えるようになったんですね」

すかさず誠人は返した。

その言葉に再び千歳の頬が染まる。今のは違うと言いたかったが、上手く言葉が出てこない。怒りと羞恥が渦巻き、顔が熱くなる。

抗議の為に開いた口を誠人が捕らえる。誠人のキスは、千歳の理性を少しづつ崩していく。舌を絡めとられ、心まで同時にそうされてしまいそうだ。

この男とこういうことがしたかったのだと本能が声を上げている。誠人を恐ろしいと思うのは、未知への恐怖に他ならない。そんな恐怖より、ずっと抱いてきた彼が欲しいという気持ちのほうに従うべきだろう。もう素直になってしまったらどうだ？千歳のなかの最も強い感情がそう告げた。

突然難解なパズルが解けたように千歳の強張っていた身体から力が抜け、舌が、誠人に応えた。

後はもう彼の言いなりになるしかなかった。

マスターベッドルームのベッドに落とされ、千歳は誠人の熱心なキスを受ける。たっぷり時間をかけ、服の上から大きな手のひらで撫でられていると千歳はだんだんこの決断が間違っていないかと思ったと思えてきた。

誠人の恋焦がれた千歳のその首に、触れるか触れないかの距離で、唇でゆっくりと愛撫する。そして、耐えかねたかのように鎖骨へと濡れたキスを落とす。

「目を開けて」

誠人に言われて、目を開ける。

視界に誠人の顔がある。先ほどの険しい表情から一転して、優しく目を細めた彼の顔だった。

「どう？少しは落ち着いた？」

「・・・そういうこと聞くの？」

「これ以上イヤだといわれたくない」

苦笑しながら千歳を起こすと、カットソーを捲り上げた。

「カーテンを閉めて」

「月明かりだからいいだろ？」

明るさは、月のせいだけじゃない。庭の外灯の明かりも部屋に入っている。

誠人は、千歳のカットソーを頭から抜き、抱きしめながらブラジャーを外した。胸を隠した千歳の腕を外すと、そこに唇を近づける。

「思ったとおり、きれいな形をしてる」

「・・・想像したの？」

「毎晩ね」

そう笑い声を含ませて言うと、千歳を横たわらせた。

ほんのり明るい部屋の中で、千歳の白い素肌がぼんやりと浮いて見える。誠人は、ロングスカートをたくし上げ、足をなで上げた。

「くすぐったい」

「お子様」

太ももまで手を這わせると、足の付け根をゆっくりと指を這わす。千歳が身体を強張らせた。下着の中に手を入れ、千歳の顔を見る。片手で顔を覆い、誠人の視線を避けた。誠人はさらに手を進める。すでに濡れた彼女の中心を見つける。そこでそっと指を動かすと、千歳の口がわずかに開いた。その反応を確認しながら、さらに指を動かす。

「あ、」

小さく声をあげ、足をきつく閉じる。

誠人は、手を抜くと、足を閉じたのを緩めさせ下着を取り去った。スカートも脱がす。全裸になった千歳にシーツをかけてやると自分の服を脱いだ。

シーツの中で肌を合わせる。

「千歳、体温低いな。暖めてやる」

そう言って誠人は彼女を抱きしめ、足を絡ませる。

想像以上に冷えた足が誠人の足に絡みつく。その冷たさに思わず身が縮まった。だから、もっと腕に力を込めて千歳を抱いた。

千歳は誠人の身体に手を伸ばす。鍛えられた彼の身体はどこを触れても無駄がない。自分の体温が、身体の中から上昇していくのが分かる。髪を撫でられ、肌を擦り付けられる。それだけで、千歳は充分に幸福な気持ちになる。

誠人が千歳を組みしき体中にキスをする。時折り強く吸い上げられたり、歯を立てられたりしたが、それも甘い感覚に変わる。

誠人の指が千歳の中心に手を伸ばす。息を詰める彼女の反応を感じながら、さらに指を推し進める。両足を広げ、その場所へ顔を埋めると、誠人は舌這わせた。千歳が身体を振り、誠人から逃れようとした。その腰を押さえつけ、さらに舌を動かす。彼女の身体が一瞬しなる。

「いやっ、止めて!」

千歳が叫び声をあげた。

誠人はその尋常でない声に腕の力を解いた。一瞬にして身を起し、抗議するように誠人を見る。

一体なにが彼女をそうさせたのか理解できず、誠人は起き上がった。

「どうしたんだ？」

千歳は唇をきつく閉じ、子供のように首を振るとシーツを胸へ引き寄せた。

誠人はその身体に手を伸ばす。身体の反応は悪くなかったはずだと誠人は思う。確かに彼女から返ってくる表現は乏しかったが、充分反応していた。

「俺がいやなことをした？」

誠人はできるだけ優しく言い、千歳をシーツごと抱きしめた。シーツの間から手を入れ、再び愛撫をする。その手を千歳がきつく押さえた。

「ダメなのか？」

「・・・怖いのか？」

「何が？」

誠人は、千歳の顔を覗き込む。思いつめたような表情で唇を噛んでいる。

「何が怖いのか？」

質問しながら手は千歳の胸を愛撫し、甘い快楽を与える。千歳が少し身体の緊張を解いたのが分かると、その中心に向かう。充分に潤っている彼女は何が怖いのかと中心を捕らえた。びくっと身体が反応した。

「や、めて」

息も切れ切れに千歳は言う。やめてと言われてすんなりやめるつもりはなかった。彼女を抱く腕に力を込め、逃げないようにする。そして、さらに指を動かした。

「ん、だめ、いや、止めて」

誠人の腕から逃れようともがく。

「千歳」

「いや、怖い。お願いだから、止めて」

千歳がしがみついてくる。

誠人はふいに理解した。千歳が言う”怖い”の正体を。

「大丈夫、怖いことなんてない。気持ちよくなるだけだ。俺だけ感じていればいい・・・怖くないように抱いているから」

誠人は、千歳の首にキスをし、そのまま指を動かした。眉間に皺を寄せ、本当に恐ろしい体験をするのではなかつと思うような表情をして千歳は誠人を見る。その唇にキスをして、大丈夫だからともう一度言う。

誠人は千歳のシーツの中に入り、彼女を自分の中に抱えた。彼女の膝を立たせ、その足を自分の足で固定し、閉じないようにする。嫌がる千歳を背中へのキスでなだめ、中心に指を這わせる。慎重に千歳の身体の熱を上げていく。身を振るのが嫌がつているせいではなく、忍び寄るその時を耐えていると分かると誠人は、彼女のもっとも反応する場所を擦る。何度もイヤを口にしながら、千歳は誠人の指で身体を張り詰めた。小さな叫び声のような嬌声をあげ、最後は、誠人の胸の中に崩れ落ちた。

誠人は彼女の呼吸が落ち着くまで胸の中で抱いていた。身体を撫でながら時間をかけクールダウンさせるように。

よほど自分勝手な男としか寝てなかったんだな。

誠人は、うつろな表情の千歳を見下ろした。

最も、世の中の大半の女性がセックスでオーガズムを経験したことがないと雑誌で読んだが・・・。

ポルノビデオ紛いのことをして女性が悦ぶと勘違いしている男たちがどれほど女性を傷つけ、また、自分がイケればそれでいいと思っているマスターベーション型の男がいかに多いことか。女性の身体の反応を見ていてば、今どう感じているか分かるはずだ。自ずと、振りかどうかも分かる。

誠人は、千歳の顔に掛かった髪を指先で掻き分ける。

上気した頬が艶っぽく誠人を刺激する。が、今は無理に事を起こす時ではないと自制する。

「千歳、大丈夫？」

「・・・あ」

「怖かった？」

千歳は、誠人の胸から身体を起こそうとした。それを止められ、また抱きかかれられる。

「知らない世界を見るのは怖いことかもしれないけど、これは怖くなんかないだろ？」

「・・・死ぬかと思った」

シーツに顔を埋め恥ずかしそうに言う。

「この程度で死ぬなんて。もっと気持ちいいことがあるのに？」

誠人はそう言うのと千歳を下にし、自分の体重で押さえ込んだ。

「じゃ、今度は一緒に気持ちよくなろう」

千歳は息を飲んだ。

今まで経験した男の数が多いほうではない。セックスにそれほど熱心な男と付き合ったこともなかった。ただ抱き締められ、身体に触れられているだけで幸せだと思えることのほうが多かった。男の為にイク振りをするのは当然だと思っていた。だから誠人の献身的行為は驚きだった。誠人は千歳を観察し、彼女に快楽を与えるために手や唇を動かし、舌を使った。一晩で千歳は何度も高みに昇らせられ、呼吸が止まるかと思うほどの快感を与えられた。熱で浮かされた脳は、何も考えられなくなり、ただうわごとのように「もうやめて」と声をあげていた。

#28

千歳が目覚めると見慣れない景色に囲まれていた。数秒して自分の身に何が起こったのかを思い出した。隣を見ると誰もいない。

寝乱れたシーツに手を伸ばすが、すっかり冷えている。

慌てて起き上がると身体中が痛かった。

恥ずかしさで身体の痛みでベッドに突っ伏した。

最低最悪。

私はあれほど激怒した男と寝てしまった。それもその男はクライアント。

夜中男にいいようにされ、今まで大して気持ちよくもなかったセックスがこんなにすごいのだと知らしめられた。

彼に触られ続けた場所がじんわりと痛む。

が、ここで自己嫌悪に陥っていても仕方ないと思い直し、千歳はベッドから身を起こした。

「え！」

ふと目に入った自分の胸や腕に男の唇の跡がいくつもついている。

「・・・信じられない」

目に付くところだけでもかなりの数だ。

椅子にかけられた洋服を持ちーきつと誠人が拾って掛けてくれたのだろう、ベッドルームから続くバスルームに向かう。ドアを開けるとすでに使った形跡があった。

彼はもう起きて支度をすませているのだと分かった、ますますバツが悪い。

これを使えばばかりにタオルや歯ブラシが並べられている。

急いでシャワーを浴び、身体を拭いていると鏡に映った自分の姿に改めて驚いた。彼が付けたキスマークは、胸だけでなく、太ももや背中、首、さらにきわどいところにまで及んでいた。

「もう、どうしてこういうことするの」

今回限りの出来心かもしれないのにこうやって跡を残すなんて、と千歳は寂しく思いながらも他にも残っていないか全身を鏡に映した。

洋服を着てベッドを整え、1階へ降りる。

首のキスマークは、髪を下ろしてどうにか隠した。

リビングには人がいない。キッチンを覗くとコーヒーマーカーにコーヒーが落ちていた。カップが置いてあり、千歳はそのカップでコーヒーを飲む。

カップを手を持ったまま、家中を巡るが、誠人は見つからない。どこへ行ってしまったのだろうか？

窓を開け、庭を見るがそこにもいなかった。

置いてきぼり？もう終わったら用済みってこと？

まさかと思いつながら千歳はそう考えずにはいらなかった。

うんざりするほどのネガティブ思考がふつと沸いてくる。が、この後どんな結果になろうとも、自分が決断して起こったことなのだから覚悟しようと思う。

2Fのバルコニーに出て外を眺める。朝の海が輝いて見えた。遠くのほうには貨物船らしき大型の船が見える。

置かれている木の椅子に座って風が木々を揺らす音を聞く。爽やかな空気に多少なりとも気持ちの穏やかになる。

例えば昨夜が感情に流された一夜限りのことだとしても、後悔はしないと強く思う。広い胸に抱かれた記憶が甦り、思わず唇を噛んだ。しばらくすると車のエンジン音が聞こえ、駐車場のゲートが開く音がした。

階段を降りて行くと玄関の鍵を開ける音がし、誠人が入ってきた。その姿を見て無性にほっとする。

「あ、起きたんだ」

「おはようございます」

「おはよう。よく寝ていたからそのままにしてみました。悪かった

ね」

誠人は手にスーパールの袋を持っている。爽やかに微笑み、優しい眼差しで千歳を見る。

「簡単なもの作るから座っていてよ」

「遠野さんが作ってくれるの？」

「スクランブルドエッグくらい俺でも作れる」

心外だと言わんばかりに誠人はキッチンに入ってしまった。

ダイニングテーブルにはあつという間にコンチネンタルブレックファーストが並んだ。つまり、卵にソーセージにサラダにパンだ。

グレイプフルーツジュースをグラスに注ぐと「どうぞ」と誠人は手を広げた。

「いただきます」

昨夜のことなど全くなかったことのように平然としている誠人にいぶかりながらも、話題にでないだけ幸いとグラスを手にした。

誠人は食事をしながら新聞を手取る。

新聞は、3紙ほどありそれらをザッピングしていく。行儀は悪いが毎朝の習慣のように見受けられた。

しばらくすると無言で椅子から立ち上がり、携帯電話を取った。

ちらりと千歳を振り返りながらも相手呼び出す。

「Hey, Denis, This is Masato. Are you still in the office? . . . Great. I have a favor to ask. Could you find the truth which is . . .」

千歳は英語が理解できない振りをする。本当は、会話程度はこなせるのだが、この場では分からないほうがいいのだろうと判断した。誠人は新聞で読んだある企業について調べるよう依頼していた。

千歳は、コーヒーのお替りを取りにキッチンへ行く。新しく入れたコーヒーが良い香りを漂わせていた。サーバーを手に取り、ダイニングに戻る、誠人はまだ電話をしている。自分と誠人のカップに

コーヒーを注ぐ。

「・・・No... We will make a formal proposal to them in July...
Yeah... You know the company has...」

千歳は、皿の上のものをきれいに胃袋へ収めた。

「ごちそうさまでした」

相変わらず電話をしている誠人を尻目にそう言う。

その言葉が耳に入り、誠人は電話の相手に”とにかく依頼したことをやるように”と指示をし電話を切った。

「悪かった」

誠人はテーブルに戻り詫びた。

「別にいいのよ。冷めちゃうのはあなたの食事なんだから」

別段なんの意味も持たせるつもりもなく千歳は言った。

新聞を折りたたむと誠人はフォークを持ちようやく全うに食事を始めた。

「ひとりでいるとすべてが自分の為の行動になる」

「そうね、確かに。それが、シングルライフの醍醐味でしょ？」

「そう言って、いつもトラブルはやりすごすのか？」

誠人の視線が千歳を捉えた。

「トラブルって、別に食事中に電話することを私は咎めたりしないわ。行儀が悪いとは思うけど」

「だったらそう言えばいい」

「・・・別に言うほどのことでもないでしょう。次にいつ一緒に食事するかわからないのに」

つい口に出して、しまったと思う。

「・・・どうということ？」

「ごめんなさい。気にしないで」

「いや、聞き捨てならない発言だった。君は、俺との事が今回限りだと思っている？」

「分からない」

「分からない？」

誠人がフォークを置いた。

「俺は君と初めて会った日から、どうすれば再会できるか考えていたよ。それは、俺だけのことなのか？」

英語で考えて翻訳すると結構クサイ台詞も恥ずかしくもなんともないのだと誠人は思う。が、言葉に込めた想いは真実だ。

千歳は誠人のストレートな言葉に心拍数が上がる。ほんとうろたえる様に、

「でも、あなたほどの人が私を望む理由が分からない。もっと若くてきれいな・・・G&Tの受付嬢みたいな人だっているじゃない」
そのうろたえ方に誠人はほくそ笑む。

「あのさ、どうして若さが一番だと思うの？そりゃ、動物として種の保存の方式を考えれば、そういう発想になるかもしれないけど、俺たち人間だよ。若ければいいってもんじゃないだろ」

誠人は手を伸ばして千歳の手を握った。

「あんまり俺をチープな人間だと思わないでくれ」

「・・・すいません」

「あと、NOと感じたことがあったら言って欲しい。我慢して後で泣かれても困るから」

千歳は首を竦める。

「泣くのは、ベッドの上だけにしてよ」

誠人は上半身を伸ばし、千歳にキスをした。

#29

「夕方にはハウスクリーニングが来る」

誠人は千歳が部屋の片づけをしている横で言った。

「でも」

「大丈夫。そのままにしておけば跡形無くきれいにしてくれるから誰もいない家にクリーニング業者を入れることができる懐の深さに感心しながら、千歳は家を出ることにした。

誠人は、駐車場から車を出した。シルバーのオーディITクーペだった。

そういえば美加がチェックしたウェブサイトでは、メルセデスのSLって書いてあったっけ。つくづく贅沢な人なのね。

千歳は、ドアを開けてくれた誠人に礼を言ってシートに座った。赤いレザーシートがスポーティーでカッコいい。

運転が上手ければこんな車に乗ってみたいが、いまいち自信のない千歳は車を所有していない。

「うちに来ないか？」

「え？」

横須賀に送り届けられると思い込んでいた千歳は、誠人を見た。

「この休みはどこへも行かないんだよね？ だったらうちに来ない？」

「でも、仕事したいもの」

「君もワーカホリックだな」

「しがないフリーランスなので優雅に遊んでいる暇はないんです」

「パソコン持ってうちにおいで。そしたら、うちで仕事ができる」

「それは無理。私、一人でないと集中できないから」

即答した千歳に誠人は正直だなとつぶやく。

「じゃ、今日と明日は仕事を忘れて俺の側にいてよ」

「えええ」

さっそく家に招待されてしまう展開に動揺した。

「えー、じゃない」

「着替えも無いし。化粧品だって最低限しか」

千歳は思いつくこと口にする。そうでもしないと動揺が収まりそうもない。

「別に化粧なんてしなくていいし、服も着なくてもいいさ」
「！」

思わず誠人の腕をぶった。

誠人のマンションは六本木にあり、オフィスまでタクシーで10分未満という驚異的な場所だった。

「毎日タクシー通勤？」

「たまには歩くけど」

今まで足を踏み入れたことが無いほどの高級マンションで千歳は開いた口がふさがらなかった。

地下駐車場には、高級車しか停まっていなない。車を降りて12階までエレベーターで昇る。このマンションは、20階が最上階だ。

静まり返った廊下を歩き、部屋の鍵を開ける。

「・・・・ねえ、モデルルーム？ここは？」

千歳は玄関で立ち尽くした。鎌倉の別荘もすごかったが、この部屋も並大抵ではなかった。

広いリビングに高級家具が並んでいる。

「一体、家賃いくらですか？」

「50万」

「・・・・・・」

「週3回のクリーニング付きなんだから相場だろ？」

よく分かりませんが、と千歳はつぶやく。

大きな窓から東京タワーが見える。この景色に50万円払っているようなものなんだろうと窓ガラスに近づいた。

「スカイツリーが完成したら東京タワーはどうなるの？」

「さあ、しばらくしたら取り壊されるかもね。あの一等地を放置し

ておくような勿体無いことはしない」

「月に50万円も払ってるなら、買ったほうがいいじゃない？」

「日本の住宅用マンションは、買ったときに最高値でそれ以降は価値が下がるばかりだから、俺は魅力を感じない。それに不動産は、NYで持つてるし」

「はあ」

「千歳、NYに行くことがあったら俺のマンション使っていいからそういう世界で生きている人の言葉だった。

パソコンを立ち上げている誠人を背にし、東京の街を眺める。今日は天気がいいが、雨の日の街をここから見るのも素敵だろうと思ったりしていると、後ろから腕が回ってきた。

「そんなにここからの景色がいい？」

首筋に唇を押し当てて誠人が言う。

「滅多に見れないから」

「これからいつでも見れる」

「・・・慣れて感動しなくなるのかしら？」

「千歳は、慣れない。いいものは、ずっといいと感じていられる」
くるりと身体の向きを変えさせられ、口を塞がれた。食べられてしまうかと思うほどの情熱的なキスに千歳の背がしなった。

唇を離すと誠人が千歳を胸の中に閉じ込める。千歳は、自分のため息が濡れていることに気づき誠人の胸に顔を埋めた。

「このままこうしているとまた君を滅茶苦茶にしたくなる・・・外にランチにでも行こう」

「こんなすっぴんで？」

「そんなに気にすることじゃないだろ？」

「お願い。私の年を考えて。六本木なんてところで、こんな姿で、化粧もせずに歩くんなんて」

「ほんと日本人女性って他人の目を気にしすぎだよ」

マンションの向かいにコンビニがあるからそこへ化粧品を買いに行こうと言われ、千歳はとりあえず了解した。

コンビニで買った化粧品でどうか自分でも許せる顔に仕上げた。誠人の部屋の洗面所の鏡は大きく、その鏡を開けると戸棚がついていた。千歳は、そっとその棚を空ける。想像したとおり、彼の日常品やフレグランスコレクションが並んでいる。

エルメス、ブルガリ、カルバンクライン、ポールスミス・・・の瓶がある。が、最初に会った時のあの香りに適合するボトルは見当たらない。

あの日以来、彼がその香りを付けていることはない。もう使わないのかしら？千歳は鏡を閉じた。

首のキスマークにファンデーションを塗ってみたが、隠すことはできなかった。髪が揺れるとどうしても見えてしまう。

「何か首に巻くもの貸して欲しいんだけど」

千歳は、洗面所から顔を出していった。

首？と誠人は反応する。

「あなたが付けた跡が見えちゃうの」

にやりと不敵に笑い、誠人は立ち上がるとどんなのがいいかわからないからここから探して、とウォークインクローゼットへ案内した。

「ましてモデルルーム並み」

ずらりと並んだスーツにネクタイ、クリーニングから戻ったカッターシャツ、カジュアルな洋服すべてが洋服屋の如く吊るされている。

「小物はここ」

引き出しを開けるとポケットチーフやらスカーフやらがきちんと整頓されて並んでいる。

「こういうの自分でやるの？」

「引越した時に時間が無かったから業者に全部まかせたら、きれいにしまってくれたんだ。だからそのままを維持してるだけ」

「ふーん・・・あ、これお借りしてよい？」

ベージュの綿素材のスカーフを見つけた。

「どうぞ」

手に取り首に巻く。タグに” Marc Jacobs ”とある。

「ねえ、無印良品に寄って。そこで服を買うから」

「無印？もっとセクシーな服着てほしいな」

「じゃ、ZARAでもいいわ」

「いや、もっと他にあるだろ？」

ああこの人は資本主義の申し子だった、と千歳は首にスカーフを巻きながら思った。

「みんながみんなあなたほどの年収があると思わないで」

そう鏡に向かって言うのと急に誠人は表情を止め、ついと顔を背けた。

「分かった。無印へ行こう」

彼の表情が変わった理由が千歳には理解できなかった。

#30

セントラルパークで、ジャケットの前を合わせ、震えながらタバコを吸っている。辺りの景色はモノクロで、聞こえてくるノイズは車が走る音とクラクションだけだった。

情けなくて悔しくてガタガタと震える身体をタバコを持っていないう片方の手で押さえた。それでも震えは止まらなかった。

「遠野さん？」

呼ばれて目が覚めた。

ソファアで眠ってしまったようだった。

短い間だったが、嫌な夢を見ていた。

「大丈夫？ 苦しそうにしてたけど」

千歳の声に取り繕うような笑みをみせた。無印良品で購入したワンピースに着替えた彼女が誠人の二の腕に手を置いている。

「・・・なんでもない」

そう言って彼女を引き寄せた。

ロイス・ベッカーで成功へ階段を登り始めたと感じていたころだった。

同じようなバンカーが主催した日本人会の集まりで、その女性と知り合った。アメリカの大学を卒業し、NYの出版業界で仕事をしているという木下葵は、誠人の前でワインをこぼした。

「ごめんなさい」

テールブルクロスが濡れて慌てる彼女の代わりに、誠人は手早く後始末した。

それがきっかけで名刺交換をし、彼女のアプローチから交際が始まった。

ちやうど飢えていた時だった。仕事がノリ、金もあり、人生を謳

歌するにふさわしい状況が揃っていた。木下葵は美人だったし、どこへ連れて行っても不足ない女性だった。

そして、彼女の首も、それなりに美しかった。

交際して1年ほどで婚約し、結婚した。

結婚式は、マンハッタンでも最高級のレストランで多くの友人を招待した。

葵のことを愛していたと誠人は思う。彼女は、結婚と同時に仕事を辞め、誠人が購入したマンションで悠々自適な主婦生活をした。

はじめのころは氣を使つて出来るだけ早めに家に帰っていたが、自分のチームを持つようになり、真夜中を過ぎて戻る日が連続した。彼女がそれを不満に思っているのは分かっていたが、それを聞くのが嫌だった。だから余計に帰宅時間が遅くなった。

それでも、週に一度は一緒に外食をし、必ず彼女の肌に手を這わせた。

ある日、出張が取りやめになり、予定より早く家に帰った。

連絡もなしに家に戻ったのは、多分、神の思し召しだったのだらう。

扉を開け、中に入ると、妻のドレスが脱ぎ捨てられていた。そして、その先に男のジャケット、妻の下着……。

ベッドルームで何が行われているか明らかだった。

わずかに開いた扉の向こうから女の喘ぎ声が聞こえてくる。

目の前が真っ赤に見えた。

誠人は、怒りに任せて扉を開けた。

その時の彼女の顔は、多分一生忘れられない。官能で火照った頬に驚愕の表情、まるで亡霊でも見たような顔をしていた。

誠人はベッドの中にいた男に掴みかかり、殴り倒した。男は、洋服を掻き集めながら裸で部屋を飛び出していった。

その後のことは、あまり記憶が無い。いや、思い出すのを拒否しているのだ。

人生で初めて女性に手を上げ、泣き叫ぶ妻を無理やり犯した。彼女が叫んだ言葉の中で最も堪^{こた}えたのが「金の亡者」だった。

「あんたなんて、単なる金の亡者じゃない」そう叫んだ彼女の口を押さえ、誠人は自分の激情を彼女の中に叩き込んだ。

気づいたらセントラルパークのベンチでひとり座り込み、震える手でタバコを吸っていた。タバコなど高校以来吸ったことなど無かったのに。

弁護士を通じて離婚は成立した。

誠人の弁護士が優秀だったせいもあり、あまりにもあっけない結末だった。

最期に葵が言った。

「私のこと、心から愛してくれたことなんてないでしょ？」

そんなことはないと言いたかったが、言葉を返せなかった。

「あなた、自分の人生しか見ていなかったもの。私が他の男に抱かれていた事だって、ずっと気づかなかったくらいに」

呆然とする誠人に背をむけ、振り返りもせず彼女は去っていった。

その時の衝撃が、誠人の身体から未だに消えない。

ファンドマネージャーが天職だと分かっている、この仕事は己の欲のためだけではないかと、いまだに感じる。

魂を汚す代償。その報酬が高いことに誰が文句を付けられよう。

その金で何をしようと誰にも関係ないはずだ。

「千歳、夕飯は何が食べたい？」

誠人は気分を変えるために明るい声で聞いた。

「なんでもいい」

「何でもいなんて言う、デリバリーピザだぞ」

「宅配のピザなんてほとんど食べたこと無いから、逆に食べてみたいわ」

そんなやり取りの末に届いたのは、有名ピザレストランのピザだった。

ワインクーラーからワインを出し、東京の夜景を眺めながらふた
りでピザを食べた。

ワイングラスを傾けながら誠人は思う。

ウォール街では、気が狂いそうなストレスに酔っていた時期もある。
あのスリリングな生活を懐かしむ気持ちも無くはない。でも今は、
しばしの間、スピードを落とした生活を楽しもう、と。

いつかまたあの世界が自分を呼ぶかもしれない。それまでの間。

#31

「これが会社案内の基本デザインとホームページのデザインです。実質ホームページ製作と運営は、弊社が既に取り引しております信頼の置ける会社です。ご覧になっていただくとお分かりになりますように会社案内とホームページが同じようなデザインになっており、どちらを見ても御社のイメージがブレることはありません。また――」

千歳はG&Tの会議室でマックを操作しながら景山精機の景山社長や営業部長に説明した。彼らがOKすればあとは順調に進む。

正面のスクリーンにサンプルが表示されている。

会議には、千歳が連れてきたwebデザイナーとコピーライター、そしてG&Tの遠野誠人、桜田亮、安藤レナが出席していた。

「会社のロゴデザインコンペも順調とお聞きしております。集まった作品の中からいくつか候補を出して頂き、こちらで再度デザインしてお見せします」

景山社長は満足げに頷いた。

「順調にすすめば、6月中には完了します」

千歳はにっこり微笑んだ。

「予想より早い仕上がりだね」

「はい。御社がご協力くださったお陰です」

「ただ」と千歳は社長や営業部長を見る。

「これからコピーを仕上げていくにあたり、さらなるご協力をいただかなければなりません。私たちは御社のお手伝いはできますが、事業内容や社風など会社に属さなければ分からないこともあります。そこで、提出させていただくコピーの内容にできるだけ詳しい方にチェックをして頂きたいのです。数値や年号は特に厳しくお願いします」

「分かりました。社に戻ったらそのように伝達します」

「ありがとうございます」

打ち合わせが終わり誠人が社長たちを別室に案内し、会議室は千歳たちだけになった。

「あー、よかった。無事に終わって」

「お疲れ様でした。これで作業に入れますね」

webデザイナーが言った。

「ほんと、よろしく願います」

千歳は、頭を下げた。

「チトさんのイメージが明確なので、こちらはやりやすいですよ」

「結構悩んでるって言ってた割りに、すっきりしたのが上がってきて驚きました」

安藤はベースデザインの感想を言った。

「突然ひらめいたの」

誠人のところから戻った夜に突然デザインが降ってわいたように決まったのだ。自分の節操の無さに少々呆れた。

少し打ち合わせをするからとwebデザイナーとコピーライターを先に帰すと、千歳は別のミーティングルームに移動した。

「チトさん、今夜のこと覚えてくれてますよね？」

「女子会でしょ？もちろん」

「うちの女の子たちもすっごく楽しみにしてます」

安藤はそう言って千歳のためにミネラルウォーターを置いて離席した。

マックを開け、メールをチェックする。

I. C. の鈴木社長に打ち合わせが上手く行った旨のメールを入れた。メールを見てにんまり笑う彼の姿が目に見えかぶようだった。いくつかのメールに返信をしていると扉が開いた。

「チト」

「あ、遠野さん。どうされました？」

反射的に立ち上がる。

誠人は、足早に近づき「今夜の予定は？」と聞いた。

「安藤さんたちと女子会です」

千歳の口調は、あくまでも”業者とお客様”だった。

「なんだ、そうなんだ。景山社長が一席を設けるといつてね。チトも呼んで欲しいというから。ま、でもいいよ。先約があることを伝える」

「すみません」

「会議、上手くやってくれてありがとう」

誠人はそう言うと、千歳の唇を塞いだ。擦りガラスになっているとは言え、社内でこんなことをするとは思ってみなかった千歳は目を見開いて驚く。

「・・・」

「なんだその顔は」

「驚いた・・・」

「女子会、終わったら部屋に寄ってくれ」

誠人は千歳の首に手をふれて部屋から出て行った。

#32

女子会は六本木のレストランで開かれた。G&Tの女性従業員10名が集まった。

「チトさん、彼いるんですか？」

「・・・一応」

「どんな方ですか？やっぱり同じようにアーティスト？」

「普通の会社員ですよ」

あなたたちが知っている人ですとはさすがに言えず、千歳は話を展開させようかと頭をフル回転させる。

「どうやって知り合ったんですか？」

「仕事関係です」

嘘ではない。

「チトさん、うちの社員どう思いますか？」

安藤は突然聞いた。

「どうって？」

「外から見たらどうなのかなって思っ」

「私は、桜田さんや遠野さんとか、あと数名しか知らないから、どうって言われても」

「そうですね。うちって結構お給料いいんですよ、銀行系と比べ。まあ、かなり厳しいですけど。でも、その厳しさに耐えられると若いうちに信じられないお給料もらえちゃうから、変になっちゃってるんじゃないかと思っ」

「贅沢しすぎってこと？」

「ええ」

「桜田さんはそんな風には見えないけど」

千歳の言葉に安藤は小声で、

「今、桜田さん、すごい入れ込んでる女性がいるんです。その女性が、超美人らしくて」

え？それって美加ちゃんのこと？

「片思いなのになんばっちゃって、会う度にエルメスのスカーフとかプレゼントしてるんです」

「・・・」

「私にまで女の人とはどんなものが欲しいのかって聞いてきたりして。重症です」

美加ちゃん、興味がないなら早めに振ってあげて、と千歳は心の中で願った。

「チトさん、遠野さんと一緒にお仕事されてどう思いましたか？」
反対の席から質問された。一瞬ぎくりとする。

「えーと、それはどういう意味で？」

「遠野さん、うちでは人気あるんですけど」

「けど？」

「いろいろ噂があって」

これこそ女子会の醍醐味ではないか、と千歳は思う。

よくよく考えると、自分は遠野誠人について知らなすぎる。彼がフアンドマネージャーで二重人格者のような行動をするくらいしか知らない。

「噂？」

「あんまり信じないでくださいね、チトさん。都市伝説だと思って聞いてください」

安藤がフォローした。

「遠野さんってNYですっごい有能なエクイティデリバティブズチームのディレクターで、年収が2億円超えてたんですって」

「2億?!」

千歳はその額が大きすぎてとっさに理解できない。それが真実なのかどうか判断する基準さえも良く分からない。

「相当のやり手で、イエローデビルなんて呼ばれたりしたこともあったそうです」

イエローデビル・・・余りにも酷すぎるニックネームね。

「で、向こうでモデル級の金髪美女と結婚してたんだけど、遠野さんが浮気しまくって愛想つかされて離婚されたとか」

「・・・なんか想像できる」

離婚歴があったとは知らなかった。

意外にも千歳にシヨックは無い。もし、まだ離婚していないならばものすごい衝撃だろう。が、友人の何人かは離婚歴がある。珍しい話ではなかった。既に、そういうことで動揺する年齢ではなくなっていた。

「チトさん！」

安藤は、酔った勢いでチトの身体を揺すった。

「都市伝説ですから」

「はいはい」

「今は恋人がふたりいて、ひとりはUTF銀行のやり手のフアンドマネージャーで、美人で足がきれいな人で、もうひとりは、モデルらしいですよ」

「・・・忙しそうなのにマメなんですね、遠野さん」

「その噂、本当かどうか分かりません。だって、遠野さん、毎朝7時半には出社してますし、夜は接待とかでうちの誰かしら連れて食事に行ってます。夜の予定が無ければ9時過ぎくらいまで事務所にいて、その足でジムに行ってるそうですから。あ、これは秘書情報ですけど。・・・で、土日も遠野さんからメール入ったりするんですよ。ディールが始まったら徹夜もありますし。はっきり言って、仕事バカです」

「安藤ちゃんってほんと遠野派ねー」

誰かが冷やかす。

「だってすごいもんあの人。あの人と仕事したら、他の人がいかに要領悪くて考えていないかすぐ分かるわよ」

「まあ、仕事はできるわよね。恐ろしく厳しいし」

「ああ、あんまり仕事できないと怒鳴られてファイル投げつけられるらしいから」

「こわーい」

女の子たちが同時に反応する。

「秘書の小林さん、よくやってるわね」

「小林さんは仕事できるから。気がきくし。それに、英語、中国語できて、前は外資系金融で秘書してたんでしょ？」

「遠野さんも小林さんには優しいわよね。彼女を信賴してるっていうのが分かる」

「だって、小林さんを面接したの、遠野さんでしょ？好みだったんじゃない？」

好みで秘書決める・・・すごい業界。

千歳は、秘書の小林を思い出す。秘書然とした女性だった。こんな秘書がいたら出社するのも楽しいだろうと思った記憶がある。

ああいうストイックな感じで、仕事ができる女性が好きなのか、と千歳は思った。

自分はどうなのだろう。自分ができる範囲では、それなりに評価されているが、所詮、自分のフィールドでしか動いていない。苦手な仕事は避けているのが現状だ。反省の余地あり、と思う。

「そんな遠野さんでも、バレンタインのチョコは結構集まったわよね。なのに、全部事務の女の子にあげちゃうんだもん。鬼よねー」
それは、確かに鬼、と千歳は同意した。

#33

エントランスで部屋番号を押す。

「おかえり、開けるよ」

誠人の声がして自動ドアが開いた。

エレベーターに乗り12階へ行く。

部屋のドアの前に行くと誠人が顔をだした。

「楽しかった？」

「聞いちゃった」

「何を？」

千歳は靴を脱ぐと、部屋に上がりソファに座った。程よく酔いが回り身体が重い。

誠人は冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出すと千歳に握らせた。

「遠野誠人の真実を聞きました」

「なんだよそれ？」

内心の動揺を隠して誠人は千歳の隣に座った。

女子社員の噂話が千歳の耳に入ったのは確実で、その中には真実が無きにしもあらずだった。

「会社で怒鳴ってファイル投げるってほんと？」

「・・・まあ、あんまりバカなやつには投げることもある」

「毎日7時半に出勤して、帰りはジムに行くのは？」

「特別なことが無い限り、そんな感じ」

「女たらしで、今はふたりの人と付き合ってるって聞きました」

「・・・千歳と誰だ？」

「いえ、UTFのファンドマネージャーとモデルです」

誠人はソファに崩れた。

「くっだらない」

「まあ確かにくだらないです」

「UTFのフアンドマネージャーとは寝たよ。随分前にね。モデルとも寝たかもしれない。でも、両方共付き合ってた訳じゃない」

「・・・はっきり言ってくださなくても良かったんですが」

「そう？はつきりしておいたほうがいいだろ？他には何を？」

千歳が水を口に含み、一呼吸置いた。

「・・・結婚、していたことがあるって」

誠人は、ああとため息のような肯定をした。

「もう5年くらい前になる」

千歳は黙った。そして、また水を飲んだ。

「・・・別れた理由は聞かないのか？」

「・・・聞いても、どうしようもないから。それに」

「それに？」

「今、結婚しているわけじゃないから、過去なんてどうでもいいと
いうのが本音」

誠人は千歳を抱き寄せた。

「今の俺は千歳しか想っていない。I love youと言える
のは千歳だけだ」

「・・・アメリカ人は、野球もハンバーガーもI loveで表現す
るのよね？」

「どうしてそういう知識だけ豊富なんだ」

誠人は千歳の顔を上げる。

「俺がどれだけ想ってるか、思い知らせてやる」

そう言って誠人は千歳に深く口づけた。

#34

この前愛し合ってから10日ほど経っていた。誠人の出張が入ったりして週末も会えなかった。だから誠人は、千歳に覚えさせた官能を思い出させるためにわざとバスルームを選んだ。

バスタブの中で体中を愛撫され自分の声が響くのを千歳はひどく嫌がった。

「ここは嫌」

「また嫌々が始まった」

誠人は、千歳の中に指を入れて擦る。

「千歳はほんとに潔癖でまともなことしかしたがらない」

「お願いだから離して」

「ダメだ。もっと千歳に気持ちよくなってほしい」

湯から引き上げ、壁に背を当て立たせる。壁の冷たさに身を縮めるが、誠人に押さえつけられた。誠人はバスタブに膝を着き、千歳の片足を肩に掛けた。千歳のそこが露になり、その状態に気づいた千歳は足を降ろそうと無駄な抵抗をする。

「動かないで」

片手で腰をホールドし、もう片方の指で千歳の中心を開く。

誠人がその部分に唇を寄せ、吸う。千歳の泣き声のような喘ぎ声がバスルームに反響した。手で口を押さえ、声を押し殺そうとするが、押し寄せる快感を止めることができない。音を立てて舌を動かす誠人の頭を抑えてどかそうとする。

「あ、だめ、お願いやめて」

苦しげな声で懇願しても誠人の舌は止まらない。

「いやっ、もう離し、」

ぐっと子宮が押し上げられる感覚と共に大きな快樂の波が押し寄せる。その波を止めようと千歳は身体の奥にブレーキを掛ける。けれど、その努力はわずかしき効果を発揮せず、結局は身体を仰け反

らせ、誠人の腕に爪を立てた。足が震え、膝が抜ける。誠人が身体を支えていなければそのまま力なく崩れ落ちてしまっていたに違いない。抱きとめられ、どうにかバスタブに横になった。

「もっと気持ちよくなれるのに、どうして感覚を開放するのを止めてしまうんだ？」

誠人は、暖かい湯の中で千歳をあやすように抱く。

「・・・苦しい。こんなに怖くて苦しいこと、無いもの」

掠れた声で弱々しく答える。

「なんでそんなに怖がる？」

誠人の間に千歳は首を振るだけだった。

「気持ちいいことは悪いことじゃないのに、そのことを君の心が許さないのかな」

誠人はそう言うのと千歳を抱き上げ、ベッドへ運んだ。

多分、彼女はこうしてただ繋がった状態で強いオーガズムを体験することは無いのだろう、と誠人は千歳を揺らしながら思う。

それでも、千歳の胎内は誠人に絡みつき、彼から理性を失わせる。彼女の胎内が彼女の意味とは関係なく、誠人を捕らえ離さないのは女の性なのだと言っても彼女はいつものように「イヤ」と言って身体を振るに違いない。それもまた、誠人の性癖をくすぐるディテールなのだが。

誠人は、目に涙を浮かべた千歳を引き寄せ、身体を起こした。彼女が嫌がるだろうと思っではいたが、身体の向きを変え、背中から抱く。

抵抗したが「大丈夫だから」と押さえ込んだ。

腰を持ち上げ、足の間に見えるそこに指を入れる。こんなに熱くどろどろになっているのに何がイヤなのかと誠人は思うが、身体と脳は時には別物だと苦笑した。

彼女の感じるところを擦り、様子を伺う。顔をシーツに押し付け、両手でシーツを握り締めている姿は相変わらず快楽と戦っているよ

うにしか見えない。誠人は意地悪くさらに刺激する。腰が落ちるのを何度も持ち上げさせる。

押しとどめることができない声が漏れる。折れ曲がった首が苦しそうに見えた。

「千歳、イク前に教えて」

誠人は、千歳の耳に囁いた。そんなことを言えるはずが無いことは分かっていた。それでも、言わせてみたいと思う。

彼女の体液で濡れた指で胸の頂を触るとさらに硬さを増す。その硬さに少し力を入れてつまむと、身体が跳ねる。

「んんん」

「もっとしてほしいだろ？」

その言葉には、いやいやで答えるが、どの意味のイヤかは不明だ。誠人が、再び後ろから指を入れた。そして、親指でその中心を捕らえる。内と外から振動を送られ、千歳の胎内が限界を示した。

「千歳、イクだろ？イクって言いなよ」

「あ、あ、遠野さん、だめ、もう、だめ、怖い・・・だめ、いやぁ怖い」

うわごとのように言う。

これが彼女の今の限界だと誠人は思う。ここでいきなりイクと口にされても楽しみが無い。

誠人は千歳の中から指を抜き、彼自身を押し入れた。熱くきつい彼女の中を抽挿を繰り返す。彼女の中心に手を伸ばし、そこを擦ると千歳の細く短い叫び声と共に息が詰まるほど締め付けられた。誠人は、我を忘れて腰を打ちつけた。千歳の胎内が痙攣したように長い間誠人を離さなかった。

意識が虚ろになっている千歳をシートでくるむと誠人は額にキスをする。

「Chitose, I really need you.」
耳元で囁いた。

「遠野さん、チトさんがいらっしやいました」

秘書の小林に案内され、千歳は誠人のオフィスに案内された。

ガラス張りの部屋には、さも管理職と言った感じのデスクと応接セットがあり、2台のモニターが株価のチャートを表示している。黒の革張りのオフィスチェアに足を組んで座っている誠人の姿は、ドラマか何かのようだった。

「失礼します」

千歳は、一礼して入室した。

そこには桜田亮と以前一度だけ面識があった徳永太一がいて、打ち合わせをしているところだった。

「どうも、チトさん、そちらにお掛けください」

誠人は、ふたりとの話を切り上げ、立ち上がると千歳にソファを勧めた。

千歳はそこに座り、テーブルにマックを取り出した。

今日は景山精機のロゴについて相談するためにG&Tを訪問した。

「どんな感じになりそうですか？」

「社員の方のアイディアは一通り目を通しました。社長が一番気に入られたデザインを基に作成中です」

マックの電源を入れ、データを呼び出す。

「いくつか作ったので、見てください」

千歳がマックを誠人の方へ向けると、机の上に置かれた彼の携帯電話が鳴った。

申し訳ない、と断り電話を手取る。画面に視線をやったと同時に、桜田と徳永に向かって眉を上げて見せた。そして、

「はい」

冷静な声で電話に出る。

「ああ、これは菊田部長、お世話になります」

誠人はデスクの淵に腰掛ける。

「・・・ああ、その件ですか。何か？・・・我々としても“フタババッテリー”さんに協力したいものですから」

電話の相手の声が漏れ聞こえてくる。妙に大声でまくし立てている。

「先方は迷っていらっしゃるようですね」

誠人はがなり立てている声に辛抱強く相手をする。眉間の皺が深くなり、どこを見ているわけでもない細めた目が冷ややかだ。

「ですから、UTFさんとフタババッテリーさんが既に契約をされたのなら我々も引かざるを得ませんが、現段階ではそうではありません」

誠人が淡々と言葉を返す。

桜田の視線が誠人を見守っている。

「・・・何をおっしゃっているのですか？我々が提案したプランに先方が興味を示されたのです。より優れたプランを望むのは、経営者として当然のことだと思いますが」

彼の冷静さがますます凄みを増し、千歳は視線を落としたまま動けない。

「我々も遊びではありません。失礼します」

そう言い放つと相手が喚いているのを無視し、一方的に電話を切った。

「UTF銀行ですか？」

桜田がすかさず聞いた。

「ああ、フタバに天秤に掛けられて激怒してるよ」

「直接遠野さんのケータイに掛けてくるなんて、よっぽどですね」
徳永はあきれたように言った。

「UTFの菊田部長は、そういう人だ。桜田、フタバの気が変わらないうちに契約をすすめるんだ」

「分かりました」

「徳永さん、フタバの調査を早急にお願いします。UTFのほうが

付き合いが長い分、うちは分が悪い。うちが用意する資金調達額を最終確定するためにもお願いします」

「了解です」

部屋の中の3人は、千歳のことなど忘れてしまったかのように会話をしている。千歳は、黙ってその時間が過ぎるのを待つ。

「では、頼んだぞ」

「はい」

ふたりは「チトさん、また後ほど」と千歳に会釈して退出していった。

「すみませんでした。お待たせてしてしまつて」

誠人とふたりきりになり千歳は妙に緊張する。

先ほどの誠人ががらりと雰囲気を変えて千歳の前にいる。

ドアを開けて誠人は秘書の小林にコーヒーを頼む。

「今日は、安藤が出張に出てましてね」

「ええ、安藤さんから昨日メールをいただきました」

ふたりきりなのに畏まった会話をしているのがおかしいが、ガラスの向こう側を社員たちが歩いているのだから仕方が無い。

小林がコーヒーを持ってきてテーブルに置く。

「この間の女子会でみんなが小林さんのこと褒めてました」

千歳は言った。

「俺はぼろくそに言われたらしい」

「何て言われたんですか？」

「遠野さんは、怒鳴ってファイル投げつける怖い人だって」

千歳は、ファイルを投げるまねをした。

「それ、真実ですから。それに、椅子を蹴飛ばして壊したこともありますよ」

小林はそう言って微笑むと部屋から出て行った。

「・・・フォローしてもらえませんでしたね」

「うるさい」

千歳は、面白そうに誠人を見た。

「遠野さん、” Robots and Empire” って知ってる？」

千歳は、遠野のマンションで、持ち込んだ自分のマックでメールをチェックしていた。

「Robots and Empire?・・・アシモフのSF小説か？」

「うーん、違うみたい。近未来のLAが舞台で、ロボットと子供が主人公」

なんのことだ？と誠人は千歳のマックを覗く。

「映画？」

「そう。来年の春に公開される映画の販促関連一式をやらないかってオフアアが来たの」

「すごいじゃん、千歳」

誠人は純粹に褒めた。

「すごいのは、これを取ってきた社長の鈴木さん」

千歳の返事に誠人は相変わらずだと思う。千歳の自己評価の低さは、どこから来るのかいつも思う。クリエイターとして充分評価されているにも係わらず、自信なさげな発言を口にする。天狗になってもおかしくないくらいなのに、決してそうならないのは、彼女のメリットでもありデメリットでもあった。モノを生み出すことは得意でも、あくまでも主役になるつもりはない。名前を売るつもりも無ければ、極力裏方に徹したがる。企業としては、癖が無くて使いやすいが、いつかそれが仇になる日がくるかもしれない。誠人は時折りそんなことを思ったりした。

「制作はどこ？」

千歳は、ハリウッドの某有名アニメーション制作会社の名前を言った。

「アメリカでも公開は来年春だって」

「千歳、受けるの？」

「鈴木さんは、受けて欲しいみたいなのよね。デザインの主導は、アニメの制作会社だから、私がすることはあんまりないと思うんだけど」

「千歳が仕事を受ける基準って何？」

「え？」

誠人は、聞いた。

「面白そうだから？」

「それもあるけど・・・鈴木さんがやるって決めたら基本的にはやるようにしてるかな。景山精機だってはじめは私には無理だと思っただけど、鈴木さんが遠野さんの依頼だからって言うから受けたし」

「チトとしては、景山精機は興味なかった？」

「それは、クライアントさんには言えませんが」

誠人の質問に千歳は、軽口で答える。ミトン製菓の仕事がしたかったとは言えなかった。

「じゃあ、鈴木さんが取ってきた仕事は、何でも受けるんだ？」

「そんなことない。断ったことだってある。他のデザイナーに回してもらったり・・・自分ができるって思えないと受けられないかな」「できるって思えるきっかけは？」

どうしてそんなこと聞くのだと千歳は誠人を見上げた。

「千歳が何を考えてどんな判断してるのか知りたいだけ」

「じゃあ、遠野さんは？どんな判断で企業を選ぶの？」

「俺は単純に利益が出るか出ないか、それだけだよ」

誠人は、急にビジネスマンの顔をした。

「だとすると、デザインってそれだけの判断じゃない気がする。利益が出なくても、やりたいって思っただけで引き受けるものもあるから」

千歳は自分の頭の奥を探るような表情をした。

「でも、利益が出なければ、私は生活していけないから、その辺の匙加減が難しいかな・・・」

「それをやってくれるのが、マネージャーの鈴木さんか」

「マネージャーじゃなくて、社長」

「俺には、チトのマネージャーにしか思えないけど」

「鈴木社長は恩人なんだから、そんなふうに言わないで」

「恩人？」

「そ、飢えて路頭にまよわないように私を保護してくれる人なんだから」

誠人はその言葉が単なる揶揄か事実かと頭の隅で思う。

「それに鈴木さんがいなかったら、遠野さんと私は会っていなかったのよ」

「それは確かにそうだ。・・・ところで、千歳、その遠野さんっていうのそろそろ止めない？」

景山精機の仕事をしている間は、呼び間違えるのを懸念して「遠野さん」を通した。恋愛関係で仕事を得たと思われるのが嫌だった。誠人にしてみたら、次に会うきっかけの為に仕事をオフアーしたのが本音なのだが、とりあえずここは千歳の意見を尊重した。

その景山精機の仕事が終わり、G&Tを訪問することも無くなった今も千歳は誠人を姓で呼んでいた。ベッドで「遠野さん」と呼ばれるのは、それなりにそそのものがあつた。力関係が色濃く表現されるような気がして誠人はそれはそれで良かったのだが、普段も姓で呼ばれるといつまでたっても関係が埋まらないような感覚がしていた。

「まーくん、とか呼んで欲しい？」

「俺は、ピッチャーか」

「アメリカでは何て呼ばれてたの？」

「マサとかマサトとか。苗字で呼ばれるほうが少ないから」

ふーんと言うと千歳はまたマツクの画面に意識を戻した。

梅雨に突入している東京は連日雨が続いていた。濡れた東京が窓ガラスの向こうに見える。エアコンのお陰で快適な室温を保っているが、外に出たらうんざりする湿度が身体に絡みつく。そんな湿度

も千歳は好きだと言った。

ほんと、変な奴。不快なものさえも好きだと言う感覚があるかと思うと快感には頑なまでに正直にはならない。

このアンバランスが才能なのか？

誠人は、キーボードを叩いている千歳の後姿を眺めた。

「鈴木社長は恩人」という千歳の言葉が誠人の頭にひっかかった。だが、千歳にさらに質問を重ねるタイミングを逸し、それについて会話する機会は訪れなかった。

ある雨が強く降る日、誠人は都内に仕事で来るという鈴木を昼飯に誘った。

「景山精機の件、ありがとうございました」

誠人は行きつけの寿司屋の個室で鈴木に頭を下げた。

「いや、こちらこそ、破格のオフアーありがとう」

それほど高額で発注したつもりはないので、これは鈴木のお世辞だ。

「ところで」

と鈴木は意味深に誠人を見た。

「・・・チトは落ちたのか？」

「ご存知でしたか？」

「なんとなくね、チトみたいな現実離れた子が好みかなと思ったんだ」

誠人はその言葉に苦笑する。現実離れ、というのは言い得て妙だ。アーティスト肌という意味では確かにそうかもしれない。

「一緒にいて楽しいですよ」

「そうだろ。面白い子だよ。あの子がここ数年ひとりでいるのが疑問だったんだ」

「そうなんですか」

テーブルに並んだ寿司懷石はその新鮮さを示すように輝いている。味も抜群の店で、誠人はかなり気に入っていた。なので、仕事以外で使うことが多かった。

「まあ、いろいろあったしな」

「いろいろ？」

誠人の反応に鈴木が箸を止めた。

「・・・聞いてない？」

「何を、ですか？」

誠人の心の中に不穏が芽生える。

「盗作トラブルの件」

「・・・いえ」

「・・・そうか、悪かった。このことは聞かなかったことにしてくれ。いつか彼女が君に話すだろう」

生殺し状態か。

誠人が鈴木を見た。その視線に気圧され、鈴木は観念したようにため息をついた。

「今から話すことは、いつか改めて本人から聞いてくれ」

「わかりました」

誠人は、居住いを正す気持ちで鈴木の言葉を待った。

「おれがまだ広告代理店に勤めていた頃からチトとは付き合いがあった。まだ駆け出しだったけど、あいつは才能があったんだ。だから、製薬会社の広告で広告大賞を取った時は当然だと思った。受賞したのは、26歳。彗星のような登場に業界が騒然となった」

その時の様子を思い出すかのように鈴木は口元を緩める。

「広告業界で時代の寵児になった。まだデザイン会社に所属していたチトは次々とヒット作を生み出した。さすがに多忙で厳しくなったんだろう、しばらくしてフリーになると俺に連絡してきた。俺もちょうど代理店を辞めようと思っていたところだったから、前祝いでも食事でもするかと夜に会ったんだ。その時、チトがフリーになると同時に応募する予定のコンペのラフデザインを見せてくれた。代理店業界1位の未来社が仕切る老舗和菓子屋のカタログデザインだ。これぞチトの真骨頂といわんばかりの愛らしくてきれいで女性が目を奪われるような作品だった。俺は手放しで褒めた。が、どこか抜けている彼女は、そのデータが入っているメモリを紛失したんだ」

「レストランに置き忘れたんですか？」

「わからない。俺は、レストランに置き忘れたと思ったが、レストランはそんなものは無かったと言った」

鈴木はため息をついた。

「数日後、そのコンペが中止になったと情報が入った。理由は不明だが、急に取りやめになった。そして、しばらくしてその和菓子屋のカatalogが店頭に並んだ」

「まさか、それが？」

「ああ、チトのラフ案そっくりだったんだ」

誠人の表情が歪んだ。まるでその時の千歳の苦しみを表現しているように。

鈴木がやり切れないように首を振り、話を続ける。

「デザイナーの名前は公表されなかった。未来社の社内デザイナーということ以外は・・・俺は、ラフ案を見ていた。チトの家のマックにもデータは残っていた。こっちが有利なのは分かりきっていた。だから、裁判を起こすために俺は動いたよ。クリエイターが人生を掛けて作った作品を盗み、世に出すなんて最低だ。しかし、相手は、天下の未来社だった。向こうの弁護士の脅しはすごかったよ。俺は、チトが業界から抹殺される可能性を考え、裁判を諦めさせた」

鈴木は、お茶を一口飲んだ。

「・・・その後、しばらくチトは物を作ることができなくなった。俺はI・C・を立ち上げ、無理やりチトを所属させた。とにかく小さな仕事から始めさせることしか彼女が生き返ることは無いと思っ
てね。今では随分回復したが、あの事件の後遺症でチトは諸手を振
っての売名行為はしない」

ふたりの間に沈黙が広がった。

誠人は腹立たしさに奥歯を噛み締めた。

巨大企業が一介のクリエイターを追い詰めた。彼女の絶望がどれほどだったか想像してもしきれないだろう。

千歳の日ごろの発言がネガティブなのはこれが理由だった。未来社の弁護士がどんな脅しをしたのか分からないが、彼女のトラウマ

になるようなことをしたことは間違いない。

しかし、救いもあった。彼女の才能を認め、庇護してくれた鈴木だ。彼のお陰で千歳は今でもデザインの仕事ができる。権力に屈したことが安易だったかどうかは分からない。が、もし鈴木判断が無ければ、本当に彼女はクリエイター生命を失っていたかもしれない。

「千歳は、だから、あなたの側から離れないのですね」

「・・・あいつは完全にフリーになることが怖いんだよ。またトラブルに巻き込まれるんじゃないかと思っているんだ」

「千歳がこの間、鈴木社長は恩人だって言ってたんです。路頭に迷わないよう保護してくれた、と」

それを聞いて鈴木はわざと声を出して笑った。

「お互い様だ。うちはチトのお陰で助かってる」

誠人は、鈴木を見た。

自分はこの人に心底感謝しなければいけないと思う。自分が千歳と出会う前、彼女の才能を見出し、繋ぎとめてくれた人に。

千歳の言うとおり、鈴木がいなければ自分たちは決して出会うことは無かったのだ。

梅雨の晴れ間が覗いた日曜日だった。

たまには君の家に行く、と誠人は電話でそう告げると千歳の家がある横須賀市へ向かった。車を止めるところを探すのが難儀だからやめたほうがいいという千歳の言うとおり、駐車場はかなり遠いところになってしまった。

千歳とこの町にどれほどのゆかりがあるか分からないが、この町で生活すると決めたのだからそれなりに愛着があるのだろう。

細い川沿いの道を歩き、前回車から降りた山を登る道の前に来た。10分ほどこの山道を登れば千歳の家がある。

湿度が高く少々うんざりしたが、行くといったのは自分なのだから仕方ない。

お昼前に到着すると告げていた。時計は、11時を過ぎたところだ。

以前怒りで蒼白になった彼女を抱き寄せた門の前まで来た。あと少し階段を登ればいい。緑の濃い空気の中で深呼吸した。

千歳の家は、古い木造建のさほど大きくない平屋だった。瓦屋根の昔からある一軒家だったが、何度か手を入れているようで、ところどころ建材が新しくなっている。庭は十分すぎるほど広く、開け放した窓からカーテンがはためいていた。こんなに開放的になれるのは、この立地だからだろうと思う。しかし、不動産価値としてはさほど高くないなどと瞬時に思い、誠人は自分の頭が相当いかれていると反省した。

引き戸を開け「ごめんください」と声を掛ける。

家の奥から声が聞こえた。

「てっちゃん、その蛍光灯も換えてくれる？」

千歳の声だった。

「どれだよ？ ああ、これか。了解」

男の声が聞こえた。金縛りにあったように立ち尽くした。

「・・・ちー、誰か来たんじゃない？声しなかった？」

「え？ホント？」

パタパタと足音がして千歳が顔を出した。

「あ、いらっしやい。わざわざ遠いところまでようこそ」

満面の笑顔で玄関までやって来た。

「ああ」

「山道疲れたでしょ。どうぞ、中に入って」

「・・・誰かいるのか？」

誠人は、内心冷や汗をかきながら聞いた。

「うん。いとこのてっちゃんが来てくれてるの」

いとこと聞いて誠人の心が弛緩した。

「てっちゃんは大工さんなのよ。この梅雨で雨漏りしたところがあつたから応急処置してくれたの」

よくよく物を作り出す一族なのだと誠人は思う。

「そうか」

靴を脱ぎ、家へあがる。

どこもかしこも窓が開け放たれていて、気持ちいい風が吹きぬけている。昔行った田舎の祖父母の家のような。

「てっちゃん、遠野さん」

脚立に登っている体格のいい男に向かって千歳は誠人を紹介した。頭にタオルを巻き、半袖から出ている腕は、よく日焼けした筋肉質だった。

「どうも、速水哲也です」

「はじめまして、遠野誠人です」

誠人は哲也を見上げた。

「すみませんね、高いところから。今この作業終わらせますんで」

「ありがと、ねえ、お昼食べてくでしょ？」

「何食わせてくれるの？」

「お蕎麦茹でようと思ってるんだけど」

「お、うれしー、あ、でも・・・」

哲也は誠人を見た。

「気にしないでください」

「私、お蕎麦の準備してくるね。遠野さん、縁側の椅子に座っていい」

千歳は、広い縁側にある椅子を指差して言った。庭を向いて白木のデッキチェアが2脚置いてある。その片方に腰掛け、側に置いてあるテーブルに積んである雑誌を手にとった。

彼女はこういうファッション誌を読むのか、と誠人は思う。

20代後半くらいの女性をターゲットにしたかなり高級ブランドを掲載している雑誌だった。無印良品に連れて行けと言った彼女に合わない。が、その雑誌には付箋が幾つも付けられている。その付箋のページを開くとピアジェの時計やウノアエレのイヤリングやネックレス、エミリオ・プッチのスカーフやエルメスのバッグなどエレガントで繊細なものばかりだった。

意外とこういうのが好きなのか。誠人はそれらの商品を頭にインプットする。

しばらくすると「お待ちせ」と声がして千歳が近づいてきた。

「お蕎麦、茹で上がったから」

「ありがとう」

畳の部屋にラグをひいた和洋折衷の部屋には大きい四角いテーブルが出されていた。

座布団が置かれ、そこに座り、3人で蕎麦をすすする。

「うまい」

誠人は一口食べていった。

「でしょ、私、お蕎麦茹でるの結構自信あるのよ」

「麺つゆも旨いし。あとは、蕎麦を打てるようになるだけだな」

哲也の言葉に「蕎麦を打ち始めたら、もう蕎麦屋になるしかないって言うわよ」と千歳が返した。

山盛りのざる蕎麦はあっという間に3人の胃袋に消えていった。

「遠野さんはずっとNYに？」

「いえ、大学はボストンだったので、卒業してからです」
「そうだったの」

千歳は誠人の大学時代の話を聞いたことが無かった。

「どうして日本に戻ってきたんですか？」

哲也の質問は全く悪気がない。そうと分かっているにも誠人は一瞬答えに迷った。

「そろそろ日本に戻ってもいいかなと思ったんですよ。・・・将来の為に日本で実績を作るのも必要かと思ったんです」

誠人はもっともらしい事を言い、誤魔化した。

「速水さんは？ずっと大工の仕事を？」

「ええ、家業が大工なんです。あ、”ちー”のオヤジとうちのオヤジは兄弟で、いところの中では俺たちが一番仲がいいんですよ」

「そ、てっちゃんとは年も同じだから中学・高校は同じなの。でも、高校に行ったら、てっちゃんグレちゃって、卒業間際に退学しちゃったの」

「退学？」

「はははは、今となってはバカですよ。ま、でも俺は家業継ぐつもりだったので、学歴より腕なんです」

哲也は自分の腕を叩いた。

「遠野さんはどうしてアメリカの大学へ行ったの？」

千歳は聞いた。

「オヤジが都銀に勤めていてね、英語ができずに苦労したんだ。その反動で、息子は英語ができるようにしたいって夢があって、大学はアメリカ」

「直接？」

「いや、日本で大学に入って、その後ボストン大学に編入した」

「お父さんが銀行員だから遠野さんも銀行員になったの？」

「オヤジの影響が無いっていったら嘘になるけど、たまたまインターンで投資銀行で仕事をさせてもらったんだ。それが面白かったか

ら」

「MBAってやつも持ってるんですか？」

「ええ」

「すごっ！」

哲也はすごいものを見るような目で誠人を見た。

「ほんとに世の中にはこういう人がいるんだな」

「・・・いや、金融業界で働こうと思ったら必要だからってだけですよ。現実には実務で学ぶことのほうが多いんです」

「映画なんかだとウォール街で働くビジネスマンってカッコいいじゃないですか。本当にあんな感じなんですか？」

「あれは、デフォルメされすぎてますよ」

もっと酷いし、下衆野郎の集まりです、とはさすがに言えなかった。

腹がこなれた頃、哲也は帰っていった。

「夏になったら屋根、本格的に修理が必要だぞ」と千歳に忠告した。
「分かった。心積もりしておく」

千歳が洗い物をしている間、また誠人は縁側の椅子で雑誌を捲った。

ここから見える山の景色は良かった。ビールでもあれば最高だが、車で来ている手前そうもいかない。

庭の向こうに広がる緑に誠人は気分が開放的になる。この辺鄙な場所に住んでいる千歳の気持ち理解できた気がした。

「お茶がいい？ コーヒーがいい？」

「緑茶がいい」

「あら、だんだん日本人っぽくなってきた」

千歳は誠人をからかう。

湯飲みを渡すと誠人は熱いお茶に口をつけた。その横顔を眺めて千歳はしばし幸せな気分になる。

「”ちー”なんて呼ばれていたんだ」

「そうよ。小さい頃は”ちー”とか”ちーちゃん”とか」

「ちー、か」

「遠野さんは？」

「いつまで遠野さんって呼ぶつもり？」

「あ、そうだ、すぐ間違えちゃう。誠人は、子供の頃はまーくんって呼ばれなかった？」

「呼ばれない。俺は、いつも誠人だった」

「つまんない！」

誠人は千歳を自分のほうへ引き寄せ、脚の上に座らせた。
腕を身体にまきつけ、カットソーの中へ手を入れる。

「ここではダメ。人が来たら見られちゃう」

「見られたっていいよ」

「・・・」

千歳が怖い顔をして誠人を見た。
が、その唇を誠人が捕らえる。千歳の首に指を滑らせながら、誠人が彼女を味わう。音を立てて唇を離すと、もう一度腕に力を込めて千歳を抱きしめた。

「安藤から伝言を預かってるんだ」

「安藤さんお元気？」

「ああ」

「伝言って？」

「彼女、結婚するんだ。で、千歳に結婚式に参列してもらえないかと聞いてきた」

「え、安藤さん結婚するの？お相手は？」

千歳は誠人から身体を離し、満面の笑顔で聞いた。

「・・・うちの社員」

「社内恋愛！きゃー、ロマンチック」

いきなりのハイテンションに誠人は面食らった。

「社内恋愛はロマンチックなのか？」

「だって、秘密が存在するのよ。最初はふたりきりしか知らなくて、同じ社内にいるのに会話するのもなんとなく気がひけて」

「・・・女性の想像力は逞しいよ」

「相手はどんな人？」

「アナリスト。年は、30くらいなか？俺は一緒に仕事したことないけどね」

いえ、人柄が知りたかったの。男は肝心なことを答えてくれないと千歳は思う。優しそうとか気が利く人だとか。彼女をどれくらい大事にしているとか、そういうことを答えて欲しかった。ここが男と女の差だ。

「結婚しても仕事は続けるの？」

「そうみたいだよ。辞める必要もないだろ」

誠人はそう言って千歳の首筋に顔を埋める。それをくすぐつたいと首を竦め、

「あ、だから女性会の人にG&Tの男性陣をどう思うのかって聞いたのかしら？」

「ん？」

「お給料がいいから、みんなちょっと感覚が変じゃないかって心配してた」

「そうか？」

「わからないけど」

「千歳はどう思う？」

誠人の舌が千歳の首筋をなぞる。

「ん」

千歳がそれに反応した。誠人の手に置かれていた千歳の手に力が籠る。

「私は、あなたや桜田さんくらいしか知らないから、答えようがなかった」

「千歳、しよう」

「・・・だめ、今日はだめ」

「なんで？」

「だって、危ない日だもの」

そう言って誠人の腕を解いた。

厳密に基礎体温は図ってはいないが、排卵日はちゃんとチェックしている。いい年をして無計画に妊娠するようなことはしたくなかったし、大体、誠人との関係が将来につながるかなど考えたこともなかった。いや、考えたことはあるが、来年も一緒にいれたらいいというような短期的な希望だった。

あ、そうかと誠人は納得する。この家には、コンドームなどという気の利いたものはないようだ。

「じゃ、うちに行こう」

「え？」

「早く、家中の鍵掛けて」

誠人はそう言って椅子から立ち上がった。

半ば強引に支度をさせ、手をひいて家を出た。

車に千歳を乗せると、密室になったのいいことに誠人は再び彼女に深いキスをする。誰かが見ていたらと思うと千歳は気が気でない。

「もう、信じられない。したいから家まで行くなんて」

「いいじゃないか。セックスレスが問題になってるこのご時勢、セックスしたい男がちゃんというって証明しなくちゃね」

千歳は、誠人の発言に呆れる。

「ところで、安藤の結婚式には参列してくれる？」

「いつ？」

「7月31日、土曜日」

「もうすぐね」

「結構迷ったみたいだよ。チトさんにこんなこと頼んだら失礼だと思えますか？って深刻な顔して俺のオフィスに来た。自分で聞いてみればいいって言ったんだけどね、打診してくれて言うから」

「安藤さんは、私たちがこうして会っていること知ってるの？」

「知らない、かな」

プライベートなことは話題にしない誠人の生活は、会社では余り知られていない。だから余計、訳の分からない噂が立った。

「私から安藤さんに連絡しておく。ぜひ出席させて頂きますって」

「俺も桜田も呼ばれているから、知ってる人が誰もいないってことはないよ」

#39 (後書き)

多忙につき、次の更新は土曜日の予定です。

「千歳、最近、いいことあったでしょ？」

え？と鏡の中で千歳は同級生だったヘアデザイナーと視線を合わせた。

個室でふたりだけしかない。他人を気にせず会話できることをいいことにヘアデザイナーはきわどい質問をしてくる。

「あんたのお肌つやつやだし、表情がきれいよ」

さすがゲイ。抜け目ない、と千歳は思う。

「そう見える？」

安藤の結婚式に参列するために髪を整えてもらう。

「男、できたの？」

「実はそうなの」

「えー！だれだれ、どんな男」

「だれって、あなたの知らない人。すごくい男」

そう口にし、誠人はいい男なんだと自分で納得する。見栄えもするし、仕事もちゃんとしている。何より、一緒にいて彼の想いが伝わってくるのが嬉しかった。

「何そのいい男って。分かった、セックス上手いんでしょ」

「・・・」

思わず顔が赤くなる。それを見たヘアデザイナーがにやりとする。

「そういう男は大事にしなさいね」

「そればかりじゃないから」

「いいじゃない、それだって大事な要素よ。ねえ、今日も会うの？」
頷く。

「そーなのぉー。じゃ、とびつきり美しくしてあげるから！」

ヘアデザイナーはまるで姉のように張り切りだした。

全ての支度ができ、鏡の前に立つ。

「いい女の出来上がり」

和色で白藍という薄水色の地に白と緑で百合の花を描いた訪問着だ。帯は濃い緑の織名古屋帯。銀糸が使われていて薄っすらと輝いて見える。夏にふさわしい清涼感ある着物だ。

髪はまとめ上げ、シンプルなかんざしを留めた。花のヘアアクセントを付けるか迷ったが、若い子と同じようなスタイルをするのは良くないとアドバイスされ、小さなパールのヘアピンをいくつか差し込んでいる。

「たまに着物着るといいわね」

ヘアデザイナーはほれぼれした表情で千歳を見る。

「彼も惚れ直すわよ」

「そう願ってます」

迎えに行くと言った誠人に支度があるから現地集合でと断った。

彼にしてみたらエスコートなしで女性がフォーマルな席に登場することが異常なのだが、日本ではそんなことは構わないからと千歳は説得した。

ありがたいことにそれほど湿度が高くなく、汗だくになることはなさそうだった。

有明にあるその結婚式場は会場から海が見えることで話題の場所だった。天候がよければガーデンパーティーができる。

その結婚式場に行けるということにも千歳はわくわくしていた。

広尾から会場までタクシーに乗る。

タクシートの運転手が「きれいだね」と褒めてくれた。

会場に入り、受付で名前を書き終わると、千歳、と声を掛けられた。

振り向くとタキシード姿の誠人がいた。

「遠野さん」

誠人は参ったなというような表情を浮かべて近づいてくる。

「まったく、俺をこれ以上どうしたいの？」

小声で囁いた。

「え？」

「きれいだ」

相変わらず口が外国人だと思う。

「あ、ありがとう。誠人も、タキシードなんて着ちゃうのね」

「うちの会社はそういう慣例なんだ。つまりは外国かぶれてことなんだけどね。どう惚れ直してくれた？」

誠人のずうずうしい言葉に閉口する。が、千歳の答えはイエスだ。着慣れているせいか全く気負い無く、絶対に貸衣装でないのが分かる。

新郎より見栄えしちゃったらダメじゃないと言いたい気持ちに駆られる。

「向こうにカフェがあるから行かないか？桜田もいる」

「ええ」

大勢が行きかうロビーを抜けるだけでも大変だった。誠人は部下たちに挨拶され立ち止まり、千歳は女子会で一緒になった女子社員たちに捕まり、一緒に写真に納まったりでなかなかカフェまでたどり着けない。

「人気者だな」

誠人が苦笑した。

「チトさん！」

カフェの一角から桜田が手を振っている。テーブルには、弁護士の田原もいた。

「お久しぶり」

「うーん、チトさんの着物姿、惚れますね」

桜田は手放しで褒める。

「ありがとうございます。桜田さんのタキシードも素敵ですよ。見直しちゃいました」

桜田と美加はどうなったのだろうかと聞きたくなった。

美加からも連絡はないし、千歳もしていない。そのうちメールで

も来るだろうと思っていて、そのままになってしまっていた。桜田を見る限り、陽気で生き生きとしている。ということは、上手くいつているのだろう。

新郎新婦を肴に話をしていると来場者をチャペルへ案内するアナウンスがあった。

天井の高いチャペルは女性の憧れそのものだった。陽光がステンドグラスを通して祭壇を照らす。集まった若い女性たちがうつとりとしているのが分かる。

「アメリカのブライダル産業も相当なものだが、日本もすごいな」

「そうよ。女の子の夢を叶える場所なんだから」

「千歳もこんなのがいいのか？」

誠人の質問に千歳は何も考えていない振りをし「そうね。一世一代大舞台って感じで」と答えた。

#40 (後書き)

次話は、明日更新予定です。

#41

ウェディングドレスを纏った安藤は、初々しく可憐で美しかった。隣に立つ新郎は少々神経質っぽかったが、彼女にデレデレで見えてほほえましい。

「仕事中からは想像できないダレっぷりです」

桜田が隣で解説してくれた。

誓いのキス。

たくさんのフラッシュの中でふたりの唇が重なる。

千歳は、きゃーと小声で冷やかしの声を上げ、両手で口元を覆った。見ているほうも照れくさい。拍手喝采で「one more!」と掛け声が上がったりしている。

神の前で永遠の愛を誓ったふたりが、手を取り合ってチャペルを退場する。幸せそうに微笑むふたりに千歳はたくさんの拍手を送った。

ライスシャワーが行われ、披露宴の為に宴会場へ移動するというときに誠人の携帯電話が振動した。

「悪い、ちよつと電話に出る」

誠人は足を止め、千歳から背を向けた。

「・・・そうですか。分かりました。すぐに・・・ええ」

誠人の背中が緊張しているのが分かる。声を掛けるのさえ躊躇われた。

何が起こったのか分からない千歳は見守るしかない。

「千歳、悪い、緊急事態発生だ。申し訳ないが、俺はこれで失礼させてもらう」

「どうしたの？」

「ごめん、後で説明する」

誠人の顔色が良くなかった。

千歳は誠人の腕を握った。

「何があつたの？」

「ちよっとね」

そう言うのと千歳を人目につかないところへ引っ張り込んだ。

「千歳、もっと見ていたいのに残念だ」

誠人が千歳の顔を両手で包む。その手がいつもより硬い。

「今夜電話するから。本当にきれいだよ」

誠人は、千歳の額に唇を触れさせた。

千歳をその場に置き、誠人は弁護士の田原の傍らへ行く。そして、何やら耳打ちをすると田原が表情を変えた。

誠人は、早足で会場を後にした。

披露宴のテーブルは誠人と同じだったが、彼のテーブルセッティングはいつの間にか片付けられていた。

千歳の隣は田原だった。

「チトさん、遠野さんとお付き合いは長いのですか？」

「え？」

千歳は田原を見た。

「皆、あなたと遠野さんがお付き合いしていること知らないようですね」

「・・・」

「仕事にプライベートを持ち込まない人だから、彼に恋人がいるかどうかを知る術はなかったんですけどね。でも、最近の彼は、とても充実しているように見えて。その理由があなただとは、今日までわかりませんでしたよ」

田原は、千歳のために白ワインを追加する。

「今日は、遠野さんが退席してしまつて残念でしたね」

「そうですね」

「あなたの姿に目を奪われている彼を見れて、私としては面白かったんですが」

田原の言葉には笑みが含まれる。

「遠野さんが退席したのは、お仕事で何かあったのですか？」

「・・・」

田原は何も言わない。

千歳はこれは守秘義務の一環なのだろうと思う。手がけている仕事でトラブルがあったなどとは口にできないのかもしれない。

今までに見たことがないほどの切迫した表情をした誠人だった。ちよっとしたことが起こったのではないのは分かる。

照明が変わり、新郎新婦が衣装を変えて再登場した。どっと歓声が沸く。

千歳は、ふたりのほうに顔を向けた。

つい先ほどまで誠人が側にいてふたりを見ていた時と彼がいなくなってからふたりを見るのでは、随分生まれる感情が違うものだと自分でも驚く。人は自分が幸せでないと他人の幸せを素直に喜べないのだ。

自分の心の狭さに苛立つ。

千歳は、そんな心を他の人に気取られないよう、できるだけ笑顔を作った。

#41 (後書き)

次の更新は、土曜日の予定をしております。よろしくお願いいたします。

#42

首都高湾岸道路は相変わらずの交通量だった。飛ばしたくとも先が詰まっていたはどうしようもない。

もう間に合わないかもしれない。

誠人は、ハンドルを握りながら思った。

夜中に走れば2時間を切る道を、30分以上オーバーして到着した。そこは、九十九里浜に程近い介護施設病院だ。

車を降りる前に蝶ネクタイを外す。

自分の服装がタキシードだということがこの場所にふさわしくないことは重々承知だったが、戻って着替える時間も無かった。

誠人は、車を降りると早足に病院へ向かった。

受付で名を名乗り、連絡を受けた旨を伝える。

「ご案内します」

受付の女性の後を着いていく。介護施設に併設された病院に入っ

た。

突然の薬臭さと独特の重い空気に息が詰まった。

女性がナースセンターへ入っていく。少しして、ドクターが現れた。

「・・・医師の手塚です」

「遠野です。お世話になっております」

誠人は深々と頭を下げた。

「お父様ですが、」

「間に合いませんでしたか？」

誠人は自分の口で言った。それを言うためにここに来たような気がしていた。

「残念ですが、1時間ほど前に」

何かが自分の体から引きはがされるような感覚がした。

「そうですか・・・父は、今どこに」

「施術室です。こちらです」

父親の遺体を目の前にしてドクターから死因を説明された。直接の原因は、肺炎からの呼吸困難だった。

「長い間、父をありがとうございました」

誠人はドクターが部屋から出て行くと、側にあった椅子に座った。70にはなっていない父親だったが、すっかり老いて小さくなっていた。髪も白くなり、皺も多くなり、肌は乾燥している。

子供の頃の記憶の父は、快活で仕事熱心なビジネスマンだった。酒とタバコが好きで、晩酌の時、誠人を膝の間に座らせてくれた。

高校生の時、母親が癌で亡くなってからは男同士協力して生活してきた。

アメリカへ行く時も、卒業するまで帰ってくるなど激を飛ばしてくれた。

誠人は、父親の手に触れた。細く、骨ばった指。硬くなった皮膚。ざらざらした爪。記憶に残る父親の手とはまるで違っている。力を込めて手を握る。

思わず顔を伏せた。耐えていた涙が床に落ちる。

最期に、名前を呼んで欲しかった。

誠人の唇から嗚咽が漏れた。

千歳は二次会の会場にいた。

桜田の熱心な誘いを断れなかった。

誠人からは何も連絡がない。田原からも何も聞けずに別れてしまった。

二次会の会場は、六本木の洒落た居酒屋だった。

「チトさん、ほんとうにありがとうございます」

安藤は、チトの手を握って礼を言った。

「こちらこそ、お招きいただきありがとうございます。だんな様、どんな方？」

「優しいところが取り柄です」

「はいはい、ご馳走様！」

桜田がふたりの間を割ってはいる。

「桜田さんだって、あの美女には優しいんですね？」

「美女？まさか美加？」

ここぞとばかりに千歳は聞いた。

「いや、実はそうなんです。今、俺、美加さんとお付き合いさせて頂いてます」

「すごい、桜田さん」

千歳は、桜田の肩を抱いた。

「がんばってね。応援してるから」

「はい！」

美加もついに真実の愛を見つけることができたのかもしれないと千歳は嬉しくなった。

披露宴のフレンチが重かったのと、さすがに着慣れない着物の締め付けのせいで食欲は無かった。オレンジジュースを片手に桜田のろけ話に相槌を打っていると、桜田の携帯電話が鳴った。

「あ、はい・・・分かりました」

桜田は電話を切ると不思議そうに千歳を見て「田原さんが電話が欲しいって」

「田原さんが？」

「ええ、この番号に掛けてください」

桜田が見せた電話番号を自分の携帯電話に入力し、席を立った。喧騒から離れた通路で田原を呼ぶ。

「もしもし、チトです」

「田原です。すみません。突然」

「いえ、どうかされましたか？」

「・・・チトさん、今日遠野さんが退席した理由ですが」「はい」

「遠野さんのお父様がお亡くなりになられたんです」

「え？」

千歳の脳が止まる。田原の言葉の内容に呼吸が苦しくなる。

「遠野さんのお父様が入院されていたのはご存知でしたか？」

「い、いえ。彼はそういうことを話さない人なので、ご健康でいらつしやるかと思っていました」

呂律が上手く回らない。

「そうですか。もう5、6年ほど千葉の病院に入院していました。今日とうとう・・・」

「何の病気で入院されていたんですか？」

「アルツハイマーです。遠野さんのお父上は、若年性アルツハイマーを発症されて、介護施設がある病院に入院していました」

千歳の身体が震える。

どうして、こんなに重要なことを彼は話してくれないのだろうと怒りさえ沸く。

「彼に、兄弟は？」

自分が遠野誠人と言う人物について何も知らないことがどんどん明るみになる。電話を持つ手ががくがくと震えている。それをもう片方の手で押さえた。

「弟さんがいらつしやるのですが、もう随分連絡を取っていないそうです」

「連絡を取っていない？」

「・・・はい。若いうちに弟さんは、家を離れられたそうです」

田原は、誠人の事情を知っているのは田原が所属する弁護士事務所だけで、父親に関する様々な手続きも取り仕切る事になっていると言った。

「遠野さんは、今夜は病院の近くで泊まれるそうです。明日、火葬し、御遺骨をお持ち帰りになられるとのことでした」

「彼のいる場所を教えてください」

震える声で千歳は尋ねる。

田原は、病院名と誠人が宿泊しているホテルの名前を言った。

#43

着物から黒のシンプルなシフォンブラウスとスカートに着替えると、千歳は千葉にあるその場所へ向かった。

電車を乗り継ぎようやく最寄り駅まで到着した。

既に22時を回っていた。

潮風に包まれた町。海のきれいさは、横須賀に勝っている。夏になると若者や家族連れで賑わう場所。

タクシー乗り場にはタクシーはおらず、駅に張り出されている地元タクシー会社に電話した。

待っている間に自分の無力さに肩が落ちる。誠人が自分よりも弁護士たちを頼っていたことが寂しく思えた。しかし、自分たちがこうして関係を持つようになってまだ数ヶ月しか経っていないことを思うと、それも仕方ないのかもしれないと自分を励ます。自分だって彼に家族のことを話したり、過去の出来事を積極的に語ったりしていない。そう考え、この点について彼を責めることはしないようにしようと思った。

タクシーがそのホテルの前に到着した。海が目の中のリゾートホテルだった。おおよそ父親を亡くした人が泊まるころとは程遠い雰囲気のところだ。

ホテルの前の駐車場には満車とも思える数の車が停まっていた。

夏休みに入った親子連れが来ているのだろう。

千歳はぐると駐車場を見渡して誠人の車を探したが、見つけれなかった。

携帯電話を取り出し彼を呼び出そうとした瞬間、もしかしたら迷惑なのかもしれないという思いがよぎった。

彼はひとりになりたいのかもしれない。

そう思うと呼び出しボタンを押すことが躊躇われたが、もし彼がそう言うなら帰ればいいことだ。

千歳は、意を決してボタンを押した。

「・・・はい」

低くくぐもった声が返事をした。

「誠人？」

「・・・千歳。どうした？」

「田原さんから聞きました。私、今、あなたがいるホテルの前にいるの」

「・・・」

「もしもし？・・・聞こえてる？」

「何考えてんだよ」

誠人の心底バカにしたような声に千歳はぞっとする。

「そんな風に言わなくてもいいじゃない」

「・・・ごめん、悪かった。すぐ降りていくから、ロビーで待っていて」

プツリと電話が切れ、波の音が大きくなる。

ロビーに入りソファに腰掛けていると、タキシードのジャケットを脱ぎ、カバールベルトを外した誠人がエレベーターから降りてきた。

「こんなところまでよく来たな」

憔悴した顔をしている。目が少し赤いように見える。

「こんなところって。都内から2時間ちよつとよ」

誠人は苦笑して千歳の隣に座った。

「・・・田原さんが、君に？」

「ええ。あなたのお父様が入院していたことを教えてくれた」

「・・・そうか」

「悲しい日になってしまったわね」

千歳は、誠人の手を握る。

誠人はその手を握り返し、

「いつかこういう日が来ると思っていた。覚悟はできてたよ」
誠人が奥歯を噛締めたのが分かった。

「ねえ、今夜は私を側に置いてくれる？」

千歳は誠人を見る。

「お願いしたほうがいい？・・・今夜は私を側に置いてください」
「ばか」

誠人は千歳の頭を抱いた。

誠人がホテルの浴衣に着替えるとその丈が足りずに千歳は密かに笑いを堪えた。

窓を開け放つと波の音が部屋を満たす。

誠人は千歳を胸に抱く。

「ねえ、お父さんの話をして」

「・・・親父の話か・・・」

誠人は、思いつく話をした。

しょっちゅう転勤していたこと。それに付き合わされて引越しが多かったこと。酔って玄関で寝ていたこと。運動会で一緒に走ったこと。ボストンまで会いに来てくれたこと。ロイス・ベッカーに就職したことを喜んでくれたこと。

「素敵なお父さんね」

「そうだな・・・」

誠人は千歳の髪に口付ける。

「ねえ、弟さんがいるって聞いたんだけど」

「ああ。・・・田原さん、守秘義務違反だよな」

誠人はぼそつと言う。

「弟は、俺と違って出来が悪くてね」

「え？」

「4歳年下なんだけど、可愛いそうにずっと俺と比べられて育ったんだ」

誠人の口調が虚ろになる。

千歳は、不安になり誠人の顔を覗く。視線がどこも見えていない。

「誠人？」

「あ、うん」

「弟さんの話、したくなければしなくていいのよ」

千歳が誠人の顔に手を伸ばし、撫でた。

誠人は千歳に視線をやり、思い出したかのようにキスをする。軽いキスを一度。それから、息が詰まるほどの激しいキスを繰り返した。情熱を呼び戻すかのように千歳の唇を噛み、舌を絡めとり、口腔を探る。

「千歳、愛してる」

誠人が熱に浮かされたように言った。

千歳の浴衣をただけさせ、胸に口付ける。いつもより性急にことを進める誠人に千歳は、やはり精神的なショックがあるのだらうと感じた。

誠人と、差し迫った彼の感情を吐き出させるためだけのセックスを初めてした。

千歳への愛撫は最低限で、いきなり彼女の足を持ち上げ彼自身を押し入れた。それでも千歳の胎内が忠実に彼に絡みつくのが分かる。誠人は荒れた息で抽挿を繰り返し、思い出したかのように千歳の唇を噛む様に口づける。あまりに暗い目をしている彼が痛々しかった。

彼が千歳をきつく抱きしめ、その瞬間、いつものように苦しみから解放されるような声を短く上げる。千歳も誠人の身体に手を廻し、彼が安心できるような身体を密着させた。

千歳の中の誠人自身の質量が変わっても、誠人は千歳を抱きしめたまま身体を動かそうとしない。そのうち、彼の身体が震え始めた。

「・・・ごめん、千歳」

声が涙で濡れていた。

「いいの。大丈夫だから、誠人は何も考えないで目を閉じて」

千歳は彼を抱く腕に力を込めた。

さして大きくもないベッドでふたりは一分の隙間も作るまいと身を寄せ合った。

#44

火葬場で僧侶がお経を読んだ。

その場にいたのは、誠人と千歳と荒木・磯貝弁護士事務所の民事専門の大川弁護士の名3名だった。

お棺が、鉄の扉の奥へ消えた。誠人は、それを見つめたまましばらく動かなかった。

ひとりにさせてあげましよう和大川に促され、千歳は待合室に行った。

「彼の弟さんは？」

「行方が分からないんですよ。もう家を出て15年は経つらしいです」

「15年？」

千歳は驚く。家を出て15年間一度も連絡を取らないとはものすごい決意で行って行ったのだろう。

「遠野さんは、どうしてこんな簡易的なお葬式しかやらないんですか？」

「お父様の遺言です。葬式不要と」

「……そうなんですか……でも、あまりにも素っ気無くて」

「葬式は形だけのものだから」

後ろから誠人の声がした。

「誠人」

「父は長男じゃないし、墓を建てることに拘らなかった。母の遺骨は母の実家で面倒見てもらってるし」

気持ちに一区切りついたのか、先ほどの落ち込みからは想像できないほど回復した表情の誠人がいた。

「……お父さんのお骨はどうするの？」

「北海道にでも撒いて欲しいというのが遺言」

誠人は千歳の隣に座ると彼女が入れたお茶を啜った。

テーブルの下で千歳の手を握る。

大川の携帯電話が鳴り、ちょっと失礼と言って大川が席を立った。しばらくすると慌てて戻ってきた。

「遠野さん、弟さんが見つかりました。田原から今連絡が」

最初、大川が何を言っているのか理解できなかった。彼の言葉の意味を理解できた次の瞬間、誠人の体に身震いする程の衝撃が駆け抜けた。

「・・・どこに」

声が掠れた。

「北海道です。今日の最終便で東京にいらっしゃるそうです」

田原も興奮を抑えながら答えた。

誠人は嬉しいのか悲しいのかよく分からない表情をした。激情にさらされると人間の脳はコントロールを放棄するのだろうか。

「何時に到着しますか？」

「17・00に羽田です。羽田で田原がお出迎えします。そのままヒルトン東京へご案内すると言っております」

「わかりました。ありがとうございます」

もう少し早く見つかったければと千歳は思った。せめて火葬される前に会えたらよかったのに、と。しかし、15年も連絡を絶っていた人が見つかったのだ。そのことは奇跡的なことに違いない。誠人の父親が仕向けた最期の魔法なかもしれない。

千歳は様々な感情を押さえ込んでいる誠人を見つめた。

#45

誠人はマンションに戻った。

千歳も着替えるために一旦横須賀に戻ることにし、後でホテルに向かうと約束した。

誠人はシャワーを浴び、冷蔵庫からよく冷えた水を取り出すと喉を鳴らして飲む。

オヤジは知っていたのか。

ベッドに座り、東京の街を見下ろす。快晴の青い空が非現実的な景色に見えた。

北海道に遺骨を撒いて欲しいと言うのはそういうことだったのか。またしても俺は道化か、と誠人はペットボトルを握る手に力が籠る。

父親がアルツハイマーを発症したという知らせを受け、仕事を降り出して日本に一時帰国し、八方手を尽くして完全看護の病院を千葉に見つけた。

1年に1、2度しか見舞いには行けなかった。進行が早く、あつという間に父親は誠人が誰だか分からなくなった。

ある時、父親は誠人のことを「健斗」と呼んだ。

弟の名前だった。

自分のことは忘れても弟のことは覚えている。その事に体中の血液が流れ出るような思いをした。

十何年も音信不通の次男のうほうが、父親の期待に応えた長男より記憶に残るのか。

「健斗、待ってたよ。元気だったか」

涙を流し、握った誠人の手を何度も何度もさする父親に、自分は誠人だと言うことができなかった。言ったところで理解できるとも思えなかったし、訂正されていることすら分かるかどうか不明だった。

誠人は、父親に健斗と呼ばせた。だが、呼ばれるたびに身を切られる思いがした。

オヤジ、俺は何のためにボストンまで行ったんだ。オヤジの希望を叶えることが俺の夢だったのに。

「できの悪い子ほど、かわいい、か」

誠人は、自嘲する。

しかし、もういい。もう終わったんだ。

誠人は、残っている水を飲み干した。

自分は、親の敷いたレールを存分に利用し、ここまでのし上ったのだ。何もかもを手に入れることなどできない。それは今までの経験で充分すぎるほど分かっている。

ベッドから立ち上がると、ペットボトルをゴミ箱へ叩き付けた。

ホテルに到着し、車を預けると誠人はロビーで千歳と落ち合った。

千歳は、ベージュのブラウスと黒のパンツを着て現れた。髪を垂らし、いつもより柔らかい印象だ。

誠人は千歳の腰に手を沿え、彼女の髪にキスをする。

「来てくれてありがとう。昨日から俺につき合わせてばかりでごめん」

「謝ったりしないで」

千歳は、誠人の肩に額を寄せ、彼の香りを胸に吸い込む。今日は、ポール・スミスだ。この香りは、時間が経つにつれて男っぽくなる。千歳の好きな香りのひとつだった。

黒の上下に白のシャツを着た誠人は千歳の手を握り、弟と田原弁護士が待つマールラウンジへ向かった。

誠人がラウンジの入り口に立つと、奥の席で田原が立ち上がるのが見えた。休日だというのにきちんとスーツを着ている。

そちらへ向かって歩く。

誠人の肩に力が入っている。これから起こることへの心の準備が伺えた。

田原も近づいてきた。

「このたびは、ご愁傷様でした」

「田原さんのご尽力のお陰で、弟と再会することができます。ありがとうございます」

誠人は頭を下げる。

「お力になれて光栄です」

「いくら感謝しても足りないくらいです」

「何をおっしゃるのですか。これが我々の仕事です」

田原はどこまでも謙虚だった。

「弟さんは、奥様とお子様と一緒にいらっしゃってます」

「・・・・・・」

誠人は驚きの表情のまま固まった。

「先を越されましたね」

田原はそういうと千歳に目礼し、ラウンジを後にした。

#46

誠人は、振り返り、そのほうを見た。

ソファ―に座っている男性と視線が合う。15年前とは随分違う弟がいた。

ゆっくりと歩み寄る。柔らかいものの上を歩いているような、思考と体が別々になったような、不思議な感覚に囚われる。

「……今まで、よくも行方をくらましていたな」

「兄さん」

ふたりが抱擁するのを千歳は少し離れたところから見ている。

側にいる女性とふたりの子供が事の展開を驚きの表情で見上げている。男の子は小学生手前くらいの年齢だろうか。女の子は、3，4歳と見たが、千歳には判断つきかねた。

千歳は、誠人に「今交際している女性」と紹介された。そんな風に言われるのがはじめてであることに気づく。こうやって自分は、誠人の隣にすることが日常になるのだらうと、こういう重大な場面でも冷静に思った。

「本当に申し訳なかったと思っている」

健斗は深々と頭を下げた。

誠人はそれにどう答えて良いのか分りかねた。腹立たしさと安堵感が胸の中で渦巻いていた。だから、健斗の詫びには無言で彼を見つめるしか無かった。

「オヤジの最期は？」

「俺も間に合わなかった。医者曰く、肺炎からの呼吸困難だったそうだ」

「……そうか」

健斗は、そう言って天井を見上げた。

誠人と健斗は、非常に良く似た兄弟だった。背も同じくらい高く、体つきは健斗のほうががっしりしているが、ひと目で兄弟と分かる

外見だ。一般的には、健斗のほうがワイルドでセクシーかもしれないと千歳は思う。

子供たちは、ケーキを与えられ、嬉しそうに頬張っていた。彼の妻――江利子は、確かに洗練された美人とはいいがたいが、健康的でおおらかそうなかわいらしい人だった。黒いワンピースは急あつらえの品なのだろう。サイズが合っていないのは明白だった。

誠人と健斗は、お互いの現状報告をし合っている。話は尽きないようであつという間に時間は過ぎる。

「誠人さん、そろそろ子供たちが限界よ。一度お開きにして後でレストランで落ち合わない？」

千歳が退屈そうにし始めている子供たちを見かねて言った。

「申し訳ございません、落ち着きがなくて」

江利子が恐縮する。

「いいえ、お子さんたちには辛いですよね」

千歳は、男の子を膝に乗せて言った。

「そうだな、そうしよう。俺の部屋にオヤジの遺骨がある。会っていくだろう？」

「ぜひ手を合わせて詫びたいよ」

エグゼクティブフロアの37階の部屋でテーブルに置かれた遺骨の箱に向かって健斗と江利子が手を合わせる。思うところがあるのだろう、健斗は随分長い間手を合わせたままだった。

唇を硬く結び感情を堪えている姿は、哀れだった。後悔が体中からにじみ出ている。

顔を上げると小さくため息をつき「俺は本当に親不孝をしたんだな」と再び肩を落とした。誠人はそんな弟を黙って見ていた。

健斗たちが部屋から去ると千歳は置かれているペットボトルの水を手を取った。

誠人は、窓の外を眺めている。新宿のビル街がきらめいている。外の喧騒が全く感じられない室内は、別の次元にいるような感覚になる。

「弟さんはどうだった？昔と同じ？」

千歳は、聞く。

「・・・そうだな、昔より、丸くなった」

「年取ったのよ。弟さんもあなたも」

その言葉に誠人が苦笑する。

「あいつが北海道で酪農か・・・。すごく意外だよ」

「そうなの？」

「だって、動物嫌いだったんだぞ。子供の頃、犬も猫も苦手で」

苦笑しながら言う。

「それはすごい変化ね」

誠人は、千歳を抱き寄せた。

「俺も変わったかな」

「きつと変わったのよ。変わったから、弟さんと冷静に向き合えるじゃない？」

「そうだな」

誠人は千歳の髪を掻き揚げ、首筋に唇を付ける。そのまましばらくそうしていたが、はっと顔を離れた。

「・・・結婚したら、戸籍にそれが載るよな？」

「ええ」

「この間、大川さんがうちの戸籍を調べた時は、何も変化は無かった・・・ってことは、あいつら入籍してない」

「事実婚ってこと？」

「多分」

「ふたりも子供がいて？」

千歳は信じられないと首を振った。

別に形式に拘るわけではないが、ここ東京でも未婚の母には厳しい現実がある。互いの合意があれば、特に子供ができれば結婚したほうがメリットは大きい。ふたり揃って東京へ来る位、想いが同じならば、結婚するのが当たり前だと千歳は思った。

「居場所を知られたくなければそうするしかないだろ」

「・・・そこまでして隠れたかったってこと？」

は！と誠人は感情を吐き出すように笑った。

「かもしれない。オヤジと俺は、よほど恨まれていたってことだ」
誠人は千歳から腕を解く。体のどこかが痛むかのような表情を浮かべる。

「そんな・・・きつと戻るきつかけを失って、自分でもどうしようもなかったのよ。いつか探し出してくれるかもしれないって思っていたかもしれないし」

千歳は、自分の言葉が誠人の心に届くのか不安だった。

「そうだな。・・・そう前向きに解釈することにするよ。俺たちも、いつか帰ってくるだろうと大して探さなかったんだ。お互い様だ」

自分に言い聞かせるように言うと、誠人はもう一度千歳を抱き寄せた。彼女の温もりで自分の心の空虚感を埋めたかった。

遅い夕食だった。

さすがに子供たちは初めての東京に疲れたのか部屋に戻るなり眠ってしまっただけで、健斗と江利子のふたりだけが現れた。

誠人は慣れた様子で料理を頼みメニューをウェイターに返す。

4人の前にビールのグラスが並んだ。

形どおりの乾杯をして、グラスに唇を付ける。

「江利子とさっき話をしたんだけど、兄貴は俺たちとは別世界の人みたいだ」

健斗はそう言って妻の江利子と視線を交わした。

「別世界？」

「ああ、成功したエグゼクティブって感じで」

そうなるために一体どれだけ努力したと思っているんだ。誠人は弟の言葉に鼻白む思いがする。

「一度だけ、兄貴が雑誌に出てるの見たよ。どれくらい前かな・・・4年くらい前かもしれない」

健斗は遠くを見るような目をした。

「経済系の雑誌で、兄貴は今NYにいるのかって思った。投資銀行で仕事をしていて、すごい成功してるんだって知って、兄貴らしいなと思って」

誠人は、何も答えずただ口元で笑っただけだった。

「誇らしかったよ。俺は、オヤジに反抗して家を出たけど、兄貴はちゃんと勉強して夢を叶えて。やっぱり俺と兄貴は出来が違ったんだって納得した」

誠人は弟の言葉にフラストレーションを感じる。が、それを微塵にも感じさせず「お前こそ、ちゃんと家庭を守ってるんだから、偉いじゃないか」と兄らしい言葉を口にした。そして、

「江利子さんにとっては、親とも兄弟とも付き合いがない男と生活

するなんて、不安以外の何物も無かったと思います。ほんとうに申し訳ないことをしたと思っています」

誠人は江利子に頭を下げた。その点に関しては、常識的に物事を考えることができた。

「そんな、私が・・・私が彼を北海道に引き止めたんです。多分、彼は、いつも東京に帰りたかったんだと・・・」

「やめろよ、江利子」

健斗が江利子を制した。

「何度も言ってるけど、俺はあの場所が好きなんだから。別に東京に帰りたいとは思っていない。今は、お前もいるし、子供たちもいる。仕事も楽しんでるんだから、何も言うな」

ふたりのやり取りを千歳は微笑ましく見る。過程はどうであれ、結局のところふたりはお互いが必要としているのだ。それがよく分かった。

千歳の視線に気づいた江利子が顔を赤らめて俯いた。

「江利子の親父さんが、俺に牧場を任せてくれてるんだ。江利子はひとりっ子だし、誰も牧場を継がなければ閉鎖されてしまう。日本の酪農のことを考えたら俺みたいなのは適任かと思って」

金の運用しかできない人間よりお前はよっぽど価値がある、誠人は心の中でそうつぶやくとグラスに残っているビールを空けた。

オヤジは銀行員として仕事をした結果、金の貸し借りだけでないものに価値を見出したのか？だから健斗だったのか？何百億という金を動かし、雇用確保、企業再生、技術革新など、それら経済活動の裏で貢献することは、オヤジにとっては何も意味を持たなかったのか？

ファンドマネージャーは、それほどまでに酷い職業か？

誠人は、平静を装っていたが内心は全く逆だった。

目の前の男、弟が、実は人生の成功者で神の前では祝福され、自分は蔑まれるのだと思うと腹立たしさを通り越し、ひたすら虚無感に苛まれた。

ただ、この感覚が今だけなのだという事も理解していた。

日常が戻れば、自分は自分の世界に戻ることができる。そこでは、抜け目無く世界を見渡し、慎重かつ大胆に決断することができる者が成功者であり、神以外の者に祝福される。自分が猿山のボスだと分かっていても、その山の頂上に立つのは気持ちのいいものだ。今の虚しさを埋めるには手っ取り早いカンフル剤だ。

しかし、この年齢になっても、信じてきた親に否定されるということがこれほどまで堪えるとは。

・・・人は、全てを手に入れることはできない。

誠人は、再び同じ事を強く思う。

食事が終わりにかけた頃、誠人は健斗に、明日子供たちをデイズニ
ーランドに連れて行ったらどうかと提案した。

「でも、明日には帰らないと・・・」

「せっかくこっちに來たんだ。どこへも行かずに帰るなんて子供た
ちがかわいそうだろ」

健斗と江利子は顔を見合わせる。

「時間に都合がつかなら、俺が招待するよ。結婚式も挙げてなけれ
ば、籍も入れてない。そんな不義理をさせていたのは、遠野家だ。
俺が、長男として、面目が立たない」

そう口にしたが、心底そう思っているのか自分自身が疑問だった。
単に、価値の無い人間が価値ある人間に、財力を見せ付けたいだ
けなのかもしれないと思う。自分の根性が嫌になる。

「兄貴・・・」

「ここから車を出させるからそれで舞浜まで行けばいい。予約は俺
がしておく。飛行機の変更も入れておくから心配するな」

誠人はそう言うとは、と席から立ち上がった。

千歳の手を取ると、ふたりに向かって「明日10時にロビーで」
と微笑んだ。

「健斗さん、江利子さん、きつとお子さんたちが喜ぶと思うから、
ぜひ彼の言うとおりになさったらいいかがですか？」

「ありがとう、兄貴」

「感謝するなら、江利子さんや彼女のご両親にするんだな。今まで
お前の我儘を聞いてくれてたんだから」

誠人の言葉に江利子が涙ぐんだ。

「北海道に帰ったら、籍を入れるんだ。ちゃんとけじめはつけろ」
「わかった」

誠人は、千歳の手を引いてエレベーターに乗り込んだ。

「・・・何？」

自分の顔を見つめている千歳に気づく。

「ん、何か、変、かな」

「変？」

「よく分からないけど・・・あなたが、変。いつもの誠人じゃない」
「・・・そんなことない」

誠人は、内心の動揺を隠す。

「ふたりが喜んでくれたからいいんだけど・・・でも、あなたは、
今、喜んでる？」

エレベーターのチャイムが鳴って停止した。扉が開く。

「もちろん」

誠人は千歳の顔を見ずにそう答えると、彼女の背を押した。

CNNを見ている誠人に先にお風呂に入るからと言って千歳はバスルームへ向かった。湯を溜め、バスソルトを落とす。

ゆっくりと湯につかり、目を閉じた。

たった二日間だけのことなのに、ものすごく長い時間を過ごした気がする。

過去の遠野誠人という人物と、今の彼が全く別人に思えるほどだった。いつもは完璧なまでに武装している彼が隙を見せ、感情を露にしたことは、千歳には意外に思えたが、ぼんやりしていた彼の輪郭をはっきりさせ、内面を知る機会ができたと思う。

少なくとも、遠野誠人という人間が自分に弱さを見せたことで、ふたりの関係が表面だけのものでなく、もっと深いところで繋がったような気がした。

ただ、違和感もあった。

父親を亡くしてからの彼は、時々冷淡な感情を表した。

特に、弟への親切心はどこまでが真実なのだろう。15年振りに会った弟は気づいていないようだが、会話の中に生まれる沈黙や、

笑みの中に彼の苛立ちが含まれているような気がした。なぜ苛立つのだ？

千歳は、湯の中に深々と沈む。思考は行き止まり、結論は出ない。耳を澄ますとニュース音声が聞こえてきた。その音を聞きながら100まで数える。子供の頃の癖が未だに抜けない。

バスタブの栓を抜き、髪を洗う。

髪をタオルでくるみ、バスローブを羽織って部屋に戻ると、誠人はテレビを付けたまま眠っていた。

テレビを消すと、部屋が静まり返る。

誠人は洋服のまま眠ってはいけないと思ったようで、洋服は脱いでいるが、彼には珍しく乱雑に椅子に掛けただけだった。

上掛けに包まって眠っている表情が苦しげなのが気になった。

千歳は、彼に手を伸ばし髪を撫でる。それから、頬に触れた。

よほど疲れたのだろう。ぐっすりと眠っている誠人は、千歳に触れられても身動きひとつしない。

千歳は、誠人の額に唇を寄せた。

携帯電話が振動して誠人は目を覚ました。タイマーが7時を知らせた。

久しぶりに良く眠った気がした。夢を見た記憶も無い。ありがたいことに昨夜の不快感が消えている。

すぐ横に千歳が眠っていることに安心する。

誠人に背を向けて眠っている彼女に後ろから腕を廻す。すっぽりと身体の中に収め、足を絡めた。

まだ夢の中の千歳は、無意識のまま誠人の腕に自分の手を添える。その行動に誠人はひどく幸福を感じる。

眠っている彼女を無理やり起こし、セックスに持ち込もうかと思うが、10時前にはロビーにいないかならないことを思い出し、我慢する。

千歳の首筋にキスをする、誠人はベッドから降りた。

ドアの下に差し込まれた新聞を取り、バスルームに行き、湯を溜める。

新聞を読みながら風呂に浸かっていると、しばらくして千歳が顔を出した。

「おはよう、早いね」

バスタブの淵に腰掛け「仕事は？」と聞いた。

「今日は休み。昨日、メール入れといた」

「もしかして、弟さんと一緒にディズニールランドへ行くつもり？」

千歳は面白そうに聞く。

「まさか。勘弁してくれよ」

誠人は新聞を折り畳み、千歳に腕を伸ばし彼女を自分に引き寄せる。キスをして唇を離しても千歳を見つめたまま何か言いたげだ。

「どうしたの？」

誠人は、急にバスタブから立ち上がると、パジャマのままの千歳

を抱きかかえた。

「きゃ！」

逃げようとする千歳を取り押さえ、一緒に湯のなかに沈んだ。

「もう、びしょ濡れじゃない！」

「いいじゃないか。どうせすぐ脱ぐんだから」

誠人の目に健康的な欲望が浮かんでいる。

誠人は自分でもバカバカしいと感じながらも、パジャマが濡れて肌に張り付いている千歳がつくづくセクシーだと思う。前が乱れ胸の谷間が覗き見えるのも、その胸に雫が落ち流れるのも、自分を誘惑していると思えない。

「ほんと是我慢しようかと思ったんだけど、やっぱり無理だな」

「無理って・・・」

千歳の声は、誠人の唇で閉じ込められてしまった。

「連休が取れたら、そっちにオヤジの骨を持って行くよ。どこか都合のいい場所を見つけておいてくれ」

「分かった。いろいろありがとう」

子供たちはディズニールランドへ行けることが嬉しくて側で大はしゃぎしている。ホテルがくれたミッキーマウスの帽子を被せられ、準備万端だった。

弟家族をヒルトンのホテルタクシーに乗せて送り出すと、誠人はホテルスタッフが駐車場から出してきた車に乗った。

「どうする？仕事が忙しくないなら、ドライブでもする？」

「・・・うーん、できればメールをチェックしたいかな」

「じゃ、千歳のところへ行こう」

誠人は車を横須賀に向けて走らせた。

#51

家に着くと千歳は全ての窓を開けて歩いた。

籠っていた空気が一扫され、心地よい風が通り抜ける。街中と違い、山を抜ける風のせいで気温が低く過ごしやすい。

誠人は縁側の椅子に座ると庭の家庭菜園を覗き込んでいる千歳を眺めた。強い日差しを避けるために大きな麦藁帽子を被っている。手に持った籠に何やらのせると戻ってきた。

「何が取れたんだ？」

「ナスでしょ、きゅうりでしょ、ピーマンにトマト」

「それ全部、千歳が育てたの？」

「育てたってほどじゃないけど。苗を植えたら育ったっていうか」
店で売っているものと違い、形はいまいちだが、どれもつやつやして瑞々しい。

「トマト、すっごくおいしいのよ。洗ってくるから待っててね」
キッチンから水音がしたと思うと、千歳がトマトを持って戻ってきた。

はい、と差し出されたトマトを受けとり、そのまま囓り付く。

「・・・旨い」

「でしょ」

「子供の頃食べたトマトの味だよ」

「ね、味が濃くておいしいでしょ。太陽の味がするでしょ」

千歳も囓る。

「アメリカじゃ結構おいしいトマト食べられるんだけど、日本のトマトって色は悪いし味は薄いしで、旨くないなと思ってたんだ」

「きゅうりもなすも、高級スーパールのより美味しいわよ」

「じゃ、夕飯期待していい？」

「もちろん」

時々しか使わないPCを誠人に貸す。

縁側の椅子に座り仕事のメールをチェックしている誠人にコーヒーを入れると、千歳は仕事部屋に移動した。

誠人は携帯電話でオフィスを呼び出す。

「小林さん？ 遠野です、お疲れ様」

「遠野さん・・・この度は、ご愁傷さまでした」

「悪いね、今日、急に休みにしてしまつて」

誠人は、何か言いたげな秘書の小林の言葉を遮って話をした。

「何かあつたら電話してくれて構わないから」

「でも、お葬式は？」

「済んだ」

「え？」

「それより、何か連絡事項ある？」

誠人は、聞いた。

「でも、みんな気にしています。遠野さんのお父様のお葬式には」

「小林さん」

誠人は、仕方ないと思いつつも小林との会話が進まないことにもどかしくなる。

「俺の話はいいから、何か連絡することは無い？」

「でも」

「でもない。君は俺にクビを宣告させるつもりか？」

誠人の言葉が本心ではないと分かっている小林はすみませんと詫びて、ようやく本題に入った。

「今朝のミーティングに参加された桜田さんがご報告したいことがあるとのことです。あと、法務の三上さんとドイツのアルベルト・シュナイダー氏、山王銀行の久保部長からお電話がありました。皆さんご連絡が頂きたいと伝言を残されました。それから、”ラインズプロジェクト”のキックオフミーティングの開始時間が明日の10時から11時に変更になりました。これは、税理士の佐々木さんからの依頼により変更です。その後、15時にクリスタルテクノの

溝口社長のアポが入りました。ちなみに、明後日の夜は、金融庁主催の情報交換会が予定通り行われます。取り急ぎ、以上です」

小林の声が心地よく脳に響く。

「了解。三上さん、アルベルト、久保さんにはすぐに連絡を入れる。桜田はその後で」

「お願いします」

「他にも何かあったら、逐次メールを入れてくれ。すぐに対応する」
誠人は電話を切った。

自分自身のスイッチがONになった、不意にそう思った。PCのスリープモードが解除されるように、裏返していたカードを捲るように、脳内が切り替わった。

千歳が淹れてくれたコーヒーを飲み、再び携帯電話を操作する。
無意識に笑みが浮かぶ。

「三上さんですか？遠野です」

誠人は、ビジネスコールをしながら自分の中に甦ってくる自信やプライドに安心する。弟と向き合っていたときに感じた虚無感はどうどこにも無い。

自分がいるべき場所に戻ってきたという感覚で、エネルギーが無限に沸いてくるような気さえした。いつものフィールドでなら自身自身でいられる。

猿山のボス。・・・俺も相当小さい男だな、心の中でつぶやいた。

クライアントとの昼食が済み、誠人は帝国ホテルのロビーを歩いていた。

外気を考えるとうんざりする。NYも暑かったが、東京も暑い。おまけにニュースで連日の猛暑が報道され、暑さを煽っているように思えた。

タクシーに乗るために正面玄関へ向かっていると、呼び止められた。

「誠人！」

立ち止まり声のする方角を見ると、そこには元妻、木下葵が立っていた。

「・・・葵」

「こんなところで会うなんて、奇遇ね」

元妻の木下葵は満面の笑顔を浮かべ、小走りに近寄って来た。以前よりずっと健康的な印象を受ける。無造作に結った髪。肌は日焼けしてそばかすが増えているが、表情は生き生きとしている。

離婚したことが良かったのか、と誠人は一瞬いい気がしなかった。エレガントなスタイルが好きだったはずが、細身のデニムにノーアイロンでピンクの綿シャツの袖を折り返して着ている様子に、意外な感じを抱いた。足元は、ノーヒールのサンダルというのも驚きだった。NYにいた頃は、ヒールがあるものを好んでいたことを思い出す。

変わらないのは、昔と同じように見栄えのする女性であることだ。千歳とは違う種類の女性だ、と誠人は思う。

千歳が見栄えがしないというのではない。彼女がひとりで立っていれば男に視線を送られていることは誠人も知っている。

種類が違ふと感じるのは、内面のことだ。

千歳は放っておいてもひとりで生きていけそうな芯の強さを感じ

るが、葵は女性であることを長所として要領よく生きていく術を持っているようなイメージがある。どちらが良いとか悪いとかは思わないが、若い頃に葵のような女性に惹かれた理由が分かる気がした。放っておけないと思わせるのは断然、葵のような女性だ。千歳は、キャリアにしても性格にしても確実に「独り立ち」している。若い頃に千歳に出会っていても、友達以上にはならなかったかもしれない、と誠人は思った。

「いつNYから戻ってきたの？」

「2年前かな。君は？東京に住んでるのか？」

「ううん。今は、ロンドンが中心」

離婚した後、彼女が実家の名古屋へ戻ったことは知っていた。が、それ以降どうなったかは全く情報はなかった。

「相変わらず、ビジネスマンね」

葵は誠人のスーツ姿を上から下まで眺めて言った。

「今も、投資銀行に勤めているの？」

「ロイス・ベッカーは辞めたよ。今は、日本の投資会社で働いている」

「・・・名刺くれる？」

誠人は、名刺入れを取り出すと葵に名刺を渡した。

名刺を受け取った葵の指にマニキュアが塗られていない。そのことも意外だ。10日に一度は必ずネイルサロンに通っていた以前の彼女からは考えられなかった。

「しばらく東京にいるの。機会があったら、食事でもしようよ」

「ああ、そうだな」

誠人は、そんなことは無いだろうと思いながらも同意の言葉を返す。

「じゃ、またね」

葵は、にっこり微笑んで誠人から歩み去った。

誠人は、すっかり変わった元妻の姿に疑問を抱きながらも、ホテルの外へ向かって歩き出した。

「遠野さん、木下様という方から何度かお電話がありました」

会議から戻ると秘書の小林がそう報告した。

帝国ホテルのロビーで葵と会ってから数日経っていた。連絡があるとは思ってもいなかったために、誠人は少し驚いた。

「連絡先は聞いている？」

「はい。こちらです」

「Thanks」

小林が部屋から出て行った後、そのメモを眺めながら電話をすべきかどうか迷った。誠人としては、顔を合わせて話をしたいと思えなかった。嫌な思い出が甦るくらいならこのまま無視してもいいだろうと考える。が、反面、数年間夫婦として過ごした相手を無下にするのは良くないのでは、と情が動いてもいた。

決心がつかなかった誠人はメモを机の傍らに置くと、取り急ぎ対応すべき案件のためにP Cに手を伸ばした。

#53

打ち合わせが終わり、部屋から出て行くスタッフの気配を感じながら時計を確認した。既に20時を過ぎていた。

机に置かれたメモに視線が止まる。

決心して携帯電話を操作した。

「もしもし？」

「葵か？俺だ」

「あ、誠人。悪いわね」

葵は外出しているのか周囲が騒がしい。

「何かあったか？」

「明日か明後日あたり、時間ない？」

「何で？」

「何でって、酷いわね。元妻からの誘いは迷惑かしら？」

葵ははっきりと言う。

誠人は、苦笑すると

「そういう訳じゃないが、意外だと思って。君は俺には会いたくないだろうと思っていたから」

「あの時は二度と会いたくなかったけど、私も大人になったから。それに本当に会いたくなかったら、あそこであなたに声なんて掛けないわ」

確かにそうだ、と思う。

「明後日の昼なら空いてる。夜は申し訳ないが予定が入ってるんだ」
「分かった。じゃ、明後日のお昼に。ねえ、昔、一度だけ一緒に行ったことがある銀座の”香”っていう日本料理のお店覚えてる？」

「・・・ああ、思い出した。晴海通り沿いの看板出てないところだろう？」

誠人は記憶を辿る。

一緒に日本へ戻ったときに、ふたりで行った店だ。こじんまりと

しているが、静かで、品が良く、料理が美味しかった。今まですっかり忘れていた。

「そうそう。そこで、12時にどう？」

「分かった」

すっかり忘れていたが、ひとつ思い出したら妙に鮮明に記憶が蘇った。

幸せな時の記憶は、カラーで匂いや音までクリアーだ。反対に、別れの時の記憶は基本的にモノトーンで音が歪だ。その時の精神状態が記憶に影響していた。

誠人は、彼女と会うことで暗い思い出を少しでも良いもので上書きできないかと考えはじめていた。

店の前でタクシーを降りた。

以前と変わらぬ店構えではあったが、そこが日本料理店だと知る人は少ないはずだ。古風な引き戸には看板は無く、一見すると普通の民家のような佇まいのだ。

誠人は引き戸を開け、短い石畳を歩いた。日差しが強く、わずかな時間でスーツのジャケットが重く感じる。

玄関を開くと店の店員が「いらっしゃいませ」と誠人を待っていた。

「遠野と申します」

「はい。木下様のお連れ様ですね。どうぞおあがりください」

靴を脱ぎ、店員の後についていく。

記憶と違わない店の様子に少々驚く。時が止まっているかのようなそのままの状態だった。自分が時間の迷路に足を踏み入れてしまったような感覚になり、誠人は目を瞬いた。

そして、案内された個室も、前回と同じ場所だった。

「お連れ様がいらっしゃいました」

店員は中に向かってそう声を掛けると襖を開けた。

「どうぞ」

誠人は、個室の中を見て足を止めた。

「忙しいのにわざわざありがとう」

葵の隣に見知らぬ白人がいた。

「・・・紹介するわ。今一緒に暮らしているステイブ・サプスフ
オード。イギリス人よ」

ああ、だからロンドンなのか、と合点がいった。

「Hi」

誠人は、ステイブ・サプスフオードと呼ばれたペールグリーン
の瞳に無精ひげをはやした細身の男に手を差し出した。

「I'm Masato Touno」

「Hi. Nice to meet you. I've heard about you」

ステイブは、誠人の手を握り返した。

ふたりの間で自分がどんな人間として話されているのかと、誠人
は思う。

「で、どうして？」

誠人は葵を見た。現在の男を紹介されてどうすべきなのか全く分
からない。

「実は、彼、ステイブは、ワールドメディカルサポートという医
療ボランティアNGOのメンバーなの」

葵は英語で言った。

#54

ワールドメディカルサポート、通称WMSについては、誠人も人並み程度の情報は持っていた。

1980年に設立された人道医療支援の団体で本部はロンドン。非政府、非営利、非宗教を掲げており、どんな国のどんな場所でも可能な限り医療支援活動を行っている。

「ステイブは、医者じゃないの。財務部門を担当しているのよ」
医者と言われてもぴんと来ない外見だが、財務担当といわれてもぴんと来ない外見の男だ。ただ、外国人にとって外見はさして重要ではない。彼がどんなにラフな姿をしていたとしても、仕事には大して差し支えない。

「私たちは、あなたに協力して欲しいのです」

ステイブが話を引き継いだ。

「協力？ 寄付の話なら、直接会社へ言うてください」

誠人は、笑った。

「ええ、そういう話ならば会社へ連絡させてもらいます。でも、今日の話は、まずあなたとしたいのです」

ステイブの話は一旦途切れた。「失礼します」と外から声がし、襖が開いた。

3段重ねの重箱が3人の前に並べられた。料理が美しく詰められている。ふたを開けた葵が素直に感激の声をあげる。

「こういうのを見ると日本っていいなって思うわ」

ステイブも充分魅了されているのが分かる。

こういう瞬間が誠人は好きだった。長い間、アメリカ暮らしをした中で、日本文化に対する欧米人の憧れや敬意を幾度も体験した。もちろん、所詮遠くの小さな島国という認識しか持たれていないことも多々あったが、それでも極東の島国にしか存在しない独特の美意識は、他とは全く違った。この美に触れた外国人が日本を嫌いに

なるはずがない。政治や経済とは別のところで、日本は絶対的な地位を確立している。しかし悲しいかなそれを自覚している日本人は少ないし、アピールする時の金のかけかたも下手ときていた。

ステイプは葵の影響なのか、箸を上手に使うイギリス人だった。その箸で料理をつまみ、これは何だ、何からできているのかなどを葵に聞きながら口に運んでいく。

「日本ははじめてですか？」

「いいえ、3回目です。昨年2度来ました」

イギリス英語は苦手だな、と誠人は思う。特にステイプの英語はイギリス訛りが強い。耳が早く慣れてくれることを願った。

「今回は、仕事で？」

「ええ、アジア地域で活動している医療ボランティア関係者のミーティングです。広報活動も兼ねて、今週末から東京で開催されます」そのことは、ニュースで聞いていた。

「で、私に話というのは？」

「あなたが優秀なフアンドマネージャーということを見込んでお願いです」

「優秀かどうかは分かりませんよ」

誠人は苦笑して葵を見た。金の亡者に優秀も不出来もあるか。

「我々WMSは世界中に医療関係者を派遣しています。多くの方々の支援のお陰で、貧困国と呼ばれる国々や紛争地域で広範囲の活動が可能になりました。しかし、問題が多いのが現状です。ご存知の通り、今世界中でエイズ発病者は3500万人以上といわれています。それも、貧困国に感染者が多く、彼らのエイズに関する知識や情報量の少なさ、経済的、政治的理由により治療が受けられず発症し死亡する患者がほとんどです」

ステイプは語った。

母体感染が多いこと。その母親はエイズの知識がまるで無い男たちにレイプされて感染したり、自分あるいは夫がエイズキャリアだと知らずに性交渉を続け妊娠・出産をしている。そして、発病して

もなんの治療も受けられず死亡する。

多くの医療ボランティアが手を尽くしても、命を救うことができないのはごくわずかだ。救える命さえ、諦めざるを得ない現実が存在している。

「原因のひとつは、エイズ治療薬の流通制限です」

エイズ治療に欠かせない抗レトロウイルス薬がジェネリック医薬品として生産販売が許可されても、アフリカなどの貧困国が対象になることが少なく、患者に行き渡らない。あるいは、販売されたとしても価格が現地の人間が購入できるほど下がっていないのだ。

「エイズ治療には時間がかかります。外科的処置で治る病気ではありません。何年も何年も薬を飲み続け、その薬が合わなければ他の薬をトライします。また、薬の副作用で体調を崩すことも多く、患者は忍耐を強いられる日々を過ごすのです」

発症前にエイズ感染が発見できれば、薬で発症を抑えることができる。しかし、特許法などの理由から製造販売が国によって限定されたり、販売されたとしても、1日1ドル以下の生活をしている人々に、年間1000ドルの薬代を払えと言う製薬会社。

「こんなことが許されますか？製薬会社は人を救うために薬の開発をしているのではなく、金儲けのために開発をしているのです」

誠人は、スティーブの言い分が分からなくはない。が、資本主義経済の原理からすれば利益を出すことが第一だ。製薬会社の立場は理解できる。利益が出なければ次の薬の開発もできない。それに、新薬の開発には金がかかる。薬の代金には、パテント費用が含まれているのだ。

肝心なのは、どこまでが必要な儲けか、ということだ。

「今、我々は、アメリカのレテシア製薬というエイズ治療薬を開発している企業に注目しています。最近この会社が開発した抗レトロウイルス薬は、取り扱いが簡単で、今までの薬よりも非常に効果を発揮していることを確認しています」

そして、スティーブが言った。

”そのレテシア製薬を買収して欲しい”

「・・・どれほどの規模かも分からず、ただ買収して欲しいなどといわれても」

誠人は話の展開に呆れ、一瞬言葉が出なかった。

ねだったところで手に入るものとそうでないものがある。疑惑の目で彼を見た。

「これがレテシア製薬の情報よ」

これまで黙っていた葵が書類封筒をテーブルに乗せた。

葵の表情が真剣すぎて違和感を感じる。こんな表情は彼女には似合わないと思う。

「マサチューセッツ州にある売上高35億ドルの企業。医薬品メーカーとしては、中堅。専門は、抗鬱剤や糖尿病治療薬。今回の抗レトロウイルス薬の開発で今後は相当注目されると思う」

「抗鬱剤のアルピソンは有名だな。若い子にも処方されてるやつだろう？」

誠人は、資料を捲る。

工場はアメリカとカナダにある。ヨーロッパ・アジアに販売網を持ち、東京には日本法人もある。株価はNASDAQで50〜60ドルをコンスタントに維持している。時価総額110億ドル。

これだけの規模の製薬会社を、欲しいです、はいそうですかで買収できるわけが無い。

誠人は、資料をテーブルに置いた。

「資金は、どうなさるおつもりですか？」

ステイブは、声を低くしていった。

「我々のために、用意してくださる方がいます」

その詐欺師のような物言いに誠人は嫌な気分がしてくる。

「エリザ・キアーナンという資産家が30億ドル用意してくださっています」

「エリザ・キアーナン？」

「オーストラリア在住の慈善家よ。今86歳なの。彼女、自分が高齢だし、財産を継ぐ人もいないので、WMSに全てを託してくれたの」

「しかし、30億ドルでは、買収できませんよ」

「分かっています」

「単純に考えて、議決権争いで勝負しようとしたとしても3分の2の74億ドルは必要です」

「この買収が成功すると分かれば、支援は増えるはずですよ」

希望的楽観では仕事はできない。誠人はスティーブを見た。この男は真面目に話をしているのか、それともジョークなのか？

「ですから、あなたに方法を考えて欲しいのです」
待ってくれと男の言葉を止めた。

「私が今勤務しているG&Tは、敵対的買収はしない方針の投資会社です。ですから、レテシア製薬を突然買収するなんてことはまずしません。レテシア製薬が友好的にM&Aを承諾する可能性は？」

「ありません」

誠人は荒唐無稽な計画にうんざりする。

「あなたの志は分かります。しかし、余りにも非現実的だ」

「・・・では、あなたは貧困国に生まれた人間たちはただ黙って死ねと言うのですか？」

「そうは言っていない。しかし、ここを買収しなくても解決方法はあるでしょう？エリザ・キアーナンの30億ドルで薬をばら撒けばいい」

「問題はエイズだけじゃない。貧困国に行き渡らない薬は沢山ある。治療さえ受けられない彼らは未来に希望を持たず、独裁者や民族紛争に翻弄される人生を送るしかないんです。平均寿命が40歳以下の国がどれほどあるか知っていますか？」

スティーブの薄灰色の瞳が誠人を睨んだ。感情を抑えた声とは真逆の視線は、全身の怒りを宿したような鋭さだった。

その視線に動じない振りに成功した誠人は、ため息をついてみせた。

「私は慈善家ではありません。投資会社に属する人間です。負けると分かるゲームには参加しないし、会社に不利益を与えるようなデイルには手をだしません」

「君には良心ってものは無いのか？」

ステイーブの目がさらに凄んだ。誠人は、その視線を正面から受け止め、

「このビジネスに良心なんてリスクは持ち込まない主義です」

そう言い放つと葵を見た。

「悪いが俺にはこの話は乗れない」

「誠人」

「この手の仕事ならヨーロッパのファンドのほうが相談に乗ってくれるんじゃないか？ボランティア精神はヨーロッパのほうが旺盛だろ」

書類の入った封筒を葵へ返す。

「もう少し考えてみて」

葵は封筒を押し返した。縋るような目で見つめられ、思わず視線を逸らした。

「悪い。俺には無理だ」

そう言うと言席を立った。

#56

タクシーの中でステイブ・サプスフォードの話を反芻する。

1日1ドル以下で生活する人々。治療の術も無く、死を待つばかりの子供たち。生まれた国が違えば治療薬が手に入るのに、たまたまアフリカ諸国に生まれたために薬が買えずに死ぬ。

今自分がこうして裕福に暮らしていられるのは、ラッキーなだけなのだということを誠人は痛感する。

だが、どうにもならない。

富めるものはひたすら富み、貧しいものは永遠に貧しさから脱却できない。

グローバルリズムなどと聞こえのいいことを言っても、結局、人間は自分のことしか考えていないのだ。隣で何が起ころうとも知らぬ存ぜぬを貫く。

誠人は目を閉じた。

5年前に「金の亡者」と叫んだ葵の声が、甦った。

夜、顧客との食事が終わり店の前で客をタクシーに乘せて送り出すと、誠人は同行したスタッフにオフィスへ戻ると告げ、歩き出した。

昼間のことが頭から離れなかった。

葵に二度目の失望をさせたことを悔いているわけではない。今更名誉回復などとも思っていない。強いて言えば、ステイブ・サプスフォードの無言の軽蔑が誠人のプライドを刺激したのだ。

誠人は歩きながら携帯電話を取り出し、相手呼び出した。

「Hey, Denis!」

いつもワンコールで電話に出るデニスは、今日もワンコールで「Masato, What's up!」と景気がいい。

誠人は声のトーンを落とし、

「アメリカの製薬会社でエイズ治療薬が得意なところをピックアップして企業情報を送ってくれ。それと、ジェネリック製薬の製造販売を手がけている企業も頼む」

「おい、誠人、今更製薬会社か？ちょっと遅いんじゃないか？」

「質問は無しだろ。急ぎで頼む」

「緊急の場合は、割増料金だぞ」

「構わない」

デニスの電話を切ると今度は別の人物を呼び出した。

「オーストラリア在住のエリザ・キアーナンという資産家について調査してくれ。あと、WMSに所属しているイギリス人、ステイブ・サプスフォードについても頼む。10時間以内に調査報告を上げてくれ」

オフィスに戻ると、レテシア製薬について検索する。

レテシア製薬について調べれば調べるほど買収は無理だと思えた。財務状況も悪くない。現段階では、例の抗レトロウイルス製薬については未発表であるために株価は53ドルほどだが、これで薬が発表されたら株価は上昇する。そうになったら、ますます買収は難しくなる。

もし買収に成功し、上場を取り下げ、再度上場させたとしてもそんなに株価が上がるかは疑問だ。WMSの意図が100%社会貢献であることが分かれればマーケットは動かないだろう。確実なりターンが望めなければ、G&Tとしては買収する意味はない。

自分のオフィスから出てフロアーを眺める。まだ10時を過ぎたばかりなのに珍しく明かりが点いているブースが少ない。

頼みのコーヒーマーカーはきれいに片付けられていた。

別のフロアーに行けば、IT系が残っていたり、アソシエイトたちが徹夜仕事をしているのだろうが、わざわざそこへ行つて挨拶する気にもなれなかった。

ビルの2階にあるコーヒESHOPが遅くまで営業していることを思い出し、エレベーターで降りていく。

食事後のコーヒーを飲みに来ているらしき人たちが声高に会話している間を縫い、カウンターへ向かった。

「Mサイズのブレンドコーヒーをホットで」

「ありがとうございます。350円です」

コーヒーを受け取り、店を出ようとすると目の前に井原藍子が立ちはだかった。

「お疲れ様です、遠野さん。まだいたんですか？」

「ああ、お客さんと食事してから戻ってきたんだ。君は？」

「私はさっき仕事が終わって、ちよつとクールダウンしたくてここでコーヒー飲んでました」

井原藍子は少年のような仕草でショートカットの髪を掻き揚げた。表情に疲れが見える。

誠人はコーヒーをひと口飲む。

「まだ仕事していくんですか？」

「もう少しね」

「ほんと、好きですよね、仕事」

井原はからかうように言った。

「これしか能がないんでね」

誠人の回答に井原は肩を竦ませた。疲れてはいても日焼けした肌は健康そのものな井原は「趣味は持ったほうがいいですよ。ジムでこもって体動かしてるだけじゃ、不健康ですから」と笑う。

誠人は今度海行く時誘ってくれ、などと適当なことを返している。と、ふいに思い出した記憶を井原に投げかけた。

「そういうば、君、去年ASファーマと誠真製薬の合併手がけたよな？」

「ええ、チームのメンバーでした」

突然の質問にきょとんとした顔で井原は誠人を見る。

「明日、昼に時間あるか？」

「・・・お昼ですか？」

井原はすばやく手帳を見ると、

「11時30分から1時まではあいてます」

「悪いがその時間に、俺のオフィスに来てくれ」

「わかりました」

「じゃ、お疲れ」

誠人は、井原に背を向けた。オフィスに戻るエレベーターに乗り込むと、はたと自分は何をしているのだと思う。

ステイブの言葉を真に受けているのか？

エレベーターの壁に寄りかかり、階床を表示するモニターを眺める。昇っていくときは気持ちがいいものだ。降りていくときの居心地の悪さは、人生の凋落を見ているようだ。

”あなたは貧困国のエイズ患者は黙って死ねと言うのですか？”

「そうだよ、先進国は偉そうに語るだけで、現実は何もしないんだ」
そうつぶやくと、扉の開いたエレベーターから降りた。

千歳は、久しぶりに会う美加を待っていた。

桜田と交際していることをメールで確認し、ぜひ話を聞かせてと呼び出したのだ。恋話はいくつになっても楽しいものだということを女は本能的に知っている。

「千歳、お待たせ」

美加が現れた。

「なんだか美しさにますます磨きがかかった??」

「千歳のほうこそ、遠野さんときあってるんでしょ？」

「え？」

千歳は固まる。

「桜田君が、なんか怪しいって言ってたわよ」

バレはじめたか・・・と千歳は観念した。

「でも、桜田君、遠野さんにそんなこと聞けないから、今日会うならチトさんに聞いといてだって」

美加は、で、どうなの?と笑顔で問う。

「・・・桜田さん、当り」

「そうなんだ。千歳、遠野さんを紹介してくれるって言いながら、自分が付き合っちゃうなんて」

美加は冗談めかして言う。

「仕事を引き受けてしまったから、どうしたらいいか分からなくなっってしまった」

千歳はとんちんかん言い訳をする。できればこの話題から離れて、美加と桜田の話に変えたい。

「ねえ、美加ちゃんはあるのレストランの後、どうやって桜田さんから連絡が来たの？」

「ふふふ」

美加は意味深に笑う。

「彼がね、会社に電話してきたのよ」

「大胆！」

「でしょ」

突然、掛かってきた電話で「もう一度会いたい」と言われ、最初は遠野情報を得るために会ったが、最後はミイラ取りがミイラになったというわけだ。

基本的に真面目な桜田は、美加の気持ちを自分に向けるために様々な手を尽くしたが、最後の決め手は「すみません。急にクライアーントから呼び出しがかかってしまいました。今日はキャンセルさせていただきます」という連絡だった。

「キャンセルされて惚れたの？」

「まあ、女心は複雑ってこと。この子真剣に仕事してるんだなって思っ、ほろっときちゃったのかな」

美加はワイングラスを傾ける。

「ま、桜田さんは有望株みたいだから、美加の男を見る目は確かかってこと」

「恋人が若いといいわよ。いろいろ褒めてくれて」

「美加さんきれいですね、とか言ってくれるの？」

「そうそう。好きだ好きだって、年上の男が言わないようなこと言ってくれるから、嬉しくなるのよ。大事にしてくれるし」

しれっと言う美加に千歳は爆笑する。

「桜田さん、いい！」

「でしょ。遠野さんのこと尊敬してるみたいだから、よろしくお願いね」

「よろしくって・・・私がどうするわけじゃないし・・・」

千歳は、再び戻ってきた話にうろたえる。

どうやら桜田はよく誠人の話を美加にするようで、桜田は誠人のようなフアンドマネージャーになりたいらしい。

「メンターがいることはいいことだから、あの人のいいところだけ受け継ぐといいわよね」

「いいところだけ、って悪いところあるの？」

「そういうわけじゃないけど、結構会社じゃ怖いらしいから」

「そんなところもいいみたいよ。今時、怒られることも少ないし、勉強になるって」

「ストイックな男」

美加は、意外と肉食系だった桜田に惚れたようだ。

美加と分かれた後、千歳は誠人のマンションへ向かった。

六本木の駅から夜風を感じながら歩いているとタクシーが停まった。

「千歳」

窓から誠人が顔を出した。

「あら、今帰り？」

「乗れよ」

「マンションまですぐそばだもん。あなたが降りて」

千歳の言葉に、誠人はタクシーを降りる。

「残業？」

「そう」

「もうすぐ12時よ。ご苦労さま」

誠人は千歳の手を握った。

「楽しかった？」

誠人はほろ酔い状態の千歳に聞く。

「うん」

誰と会ってきたのかと聞くべきなのか一瞬迷う。が、迷ったとたん、質問が作想的になることは分かっていたから尋ねるのを止めた。

「誠人は、食事した？」

「ああ、お客さんとね」

「豪華な食事？」

「銀座で中華料理」

「いいなあ」

千歳は、誠人の腕に体を寄せた。

今日、元妻に会ったことは言えなかった。仕事と重なる部分がある限り、不用意な説明はしたくなかった。だったら最初から何も言わないに限る。

「千歳」

「ん」

顔を上げた千歳を引き寄せ、誠人は唇を寄せる。

「外よ」

「誰も見てないよ」

そんなはずがあるわけが無い。車は走っているし、わずかといえども人は歩いている。

誠人は千歳と軽く唇を合わると、再び歩き出した。

千歳がバスルームから出てくると、誠人はベッドの中で書類を読んでいた。

「おいで」

いつものように自分の横のスペースを叩いて、千歳を呼ぶ。

時計は既に1時を回っている。

千歳は、誠人の横に入ったが、誠人は書類を読むのを止める様子は無かった。

今夜は”苦しみと恐怖を伴う幸福な時間”はなさそうだった。あの時間を単純に幸せだと思えないことについては、誠人に対し申し訳なく感じる。けれど、こればかりは、自分でもどうしようもない。千歳が目を閉じると誠人は読書灯の明かりを少し暗くしてくれた。今は、彼の存在を感じながら眠れる幸せに千歳は満足していた。

目を覚まし、目に入った時計の針は8時22分と表示していた。

千歳を起こさず誠人はとうに出勤してしまっていた。

こういうことに全く構わない誠人を楽だと思ふ反面、デリカシーの無い女だと思われるのではないか、ちゃんと起きて「いつてらっしゃい」と言ったほうがいいのではないかと考えることもあるけれど、テーブルの上に「Good morning, my dear. Have a good day! Masato XXXX」とメモがあるのを見ると、誠人は別に形式ばったことを望んでいないのだと思ひ直す。

テーブルの上のオレンジを剥き、東京タワーを眺めながら食べる。まだ9時前だというのに日差しがまぶしく、空が突き抜けるように青い。今日も猛暑は確実だ。

千歳はオレンジを食べ終わると、ベッドルームに置き去りにしたままのマックを取りに行く。ひとりなのをいいことに広いベッドに

ジャンプした。

シーツにくるまると誠人の香りがする。

彼が風呂上りに使うローションやクリームの香りに彼自身の香りが混ざり、ふんわりと柔らかい匂いになっていた。

目を閉じると誠人が側にいるような気分がしてくる。

昨日、さっさと眠らずに彼の腕の中に納まればよかった、と不意に残念な気持ち湧き上がってきた。

誠人の腕の感触が体に甦る。抱きすくめられた時の、腕の力強さが千歳の心の奥を切なくさせる。

千歳は枕もとの携帯電話に手を伸ばした。

数回コールして、相手が出た。

「はい、遠野です」

「わたし」

「いつもお世話になっております」

側に人がいるのか、誠人はビジネスライクだ。

「今日、何時に帰ってくる？」

「・・・申し訳ございませんが、現段階では明確な回答は致しかねます」

千歳はその言葉に喉の奥で笑う。

「昨日の夜、先に眠ってしまったから、今夜は待つてようかと思つて」

つい甘え口調になり、自分で恥ずかしくなる。

「お申し出は大変嬉しく思います。しかし、少々立て込んでおりまして、ご期待に沿えるかどうか難しいところです」

「できるだけ早く帰ってきて。待つてるから」

「ありがとうございます。そのように対応させていただきます」

「こういう電話もたまにはいいでしょ？」

千歳は、今誠人がどんな顔をしているのか見たいと思う。クールな顔をして秘書を目の前に電話をしているのだろうか？それとも、打ち合わせ途中で皆を待たせてこの会話をしているのか？何にせよ

当人たちにとっては甘ったるい電話であることは間違いない。

「・・・突然のことで驚いております」

「ちよつと今私おかしいの、多分。・・・仕事なのに電話したりして、ごめんなさい。もう切ります」

「たまには、こうしてお電話いただけるのもありがたいです。では、また後ほど。失礼します」

千歳は誠人の声が柔らかく笑い声を含んだことを聞き逃さなかった。

電話を持ったままベッドに再びもぐりこむ。

自分が怖いほどの幸せを感じていることに気づく。仕事以外の充実感で、これほどの幸せを感じたことがかつてあっただろうか。

人間は強欲だと千歳は思う。誠人がいなくなる生活など考えられなかった。このまま永遠に彼が側にいると確信する自分がいることに何の疑問も抱かなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1909q/>

シアワセノトキ

2011年4月24日10時10分発行